平成３０年度碧南市発達障害児者地域生活支援モデル事業　成果物

ＩＣＦ（国際生活機能分類）を活用した
療育支援事業

平成３１年３月

愛知県碧南市

目次

１　事業要旨　・・・Ｐ１

２　事業申請の背景と事業目的　・・・Ｐ３

３　事業の実施内容

(1) ＩＣＦ情報把握・共有ツールの概要　・・・Ｐ５

(2) ＩＣＦ情報把握・共有パッケージ　・・・Ｐ５

(3) パッケージを共有するためのクラウドシステム　・・・Ｐ７

(4) ダウンロードデータの整理表を展開するエクセルアプリケーション・・Ｐ８

(5) 情報共有フォーマットを生成するためのエクセルアプリケーション・・Ｐ１５

４　モデル事業の実施経過

(1) モデル事業の実施単位　・・・Ｐ１７

(2) 利用者への参加協力依頼と参加協力親子　・・・Ｐ１７

(3) 事業の年間実施計画と実際の計画実施　・・・Ｐ１８

(4) ＩＣＦ情報把握・共有システムの実践活用　・・・Ｐ２１

(5) モデル事業の成果を検証する方法　・・・Ｐ３８

５　モデル事業の成果と考察

(1) ＩＣＦ情報把握・共有システムの活用にかかわる質問票の結果　・・・Ｐ５５

(2) 本事業の振り返りアンケート（保護者および支援者）　・・・Ｐ６５

(3) ＩＣＦ情報把握・共有システム活用前後での
個別支援計画の比較（企画推進委員）・・・Ｐ６６

(4) 就学時の引継ぎ書類　・・・Ｐ６９

(5) ＩＣＦ情報把握・共有システムの活用した支援経過で得られた
参加協力者の感想　・・・Ｐ７１

(6) 企画・推進委員の評価（企画推進委員会での発言から）　・・・Ｐ７５

(7) 考察　・・・Ｐ７７

付録

１　企画・推進委員会の実施状況等　・・・Ｐ８０
２　成果の公表実績・計画　・・・Ｐ９７

平成３０年度　碧南市発達障害児者支援モデル事業報告
ＩＣＦ（国際生活機能分類）を活用した療育支援事業

1　事業要旨

(1) 問題

発達障害児者の地域生活を支えるには、ライフコースにわたる支援の早期開始が重要であるが、発達障害の困難性が現れる時点は、本人の障害特性の程度と生活環境の状態の相互作用により大きく変動する。そのため、子育て支援から発達支援への連続性を担保し得る地域支援体制の確立が求められるが、「障害」という言葉のスティグマ性および本人･家族を含む多領域支援連携の難しさからその実現は難しい状況にある。今回、碧南市では発達障害児者地域生活支援モデル事業を活用し、この地域課題に取り組むこととした。

(2) 方法

方法の中核を成すのは、ICF(International Classification of Functioning, Disability and Health;国際生活機能分類)の活用である。ICF は人間のあらゆる健康状態とその関連領域の諸要因を日常の用語で網羅的に分類・記述したものであり、専門性や専門用語による壁に阻まれがちな支援の縦横連携を実現する共通言語として期待されている。今回の事業では企画推進委員会委員長が日本医療研究開発機構の平成 27 年度から 29 年度委託研究で開発を進めてきた「ICF 情報把握・共有システム」(安達,2018)を活用することとした。本システムはクラウド上に構成され、家族・本人を含む複数の支援者による分担入力を可能とするとともに、入力結果を支援に関連づけるためのデータ整理機能を有するものである。

本システムを碧南市の早期療育事業である親子支援事業および親子通所施設の 2 箇所で活用し、把握された情報に基づいて支援会議を実施し、支援計画を検討･策定･実施した。事業効果の検証方法として、支援チーム構築に関わる評価、システムの支援活用における評価、システムを活用した支援会議の評価、支援計画の実行と結果の評価、システム活用前後の個別支援計画の比較評価、保護者及び支援者の支援参加の振り返りアンケートなどを行ってきた。

(3) 結果

支援チーム構築の評価では、チーム構築の労力は少なく、チーム構築および分担入

力が連携支援に有用である、などの良好な結果が得られた。

システムの支援活用における評価は、活動と参加シートでは、対象児者の現状や有効・必要な支援がわかり、今後の支援計画に資する、連携支援の実現に有用である、記入の労力は得られた情報に見合う、などの良好な結果が得られた。環境因子シートでは、対象児者の生活に影響する環境因子および必要な環境調整支援がわかり、今後の支援計画に資する、連携支援の実現に有用である、記入の労力は得られた情報に見合う、などの良好な結果が得られた。

システムを活用した支援会議の評価では、参加者間のコミュニケーションが対等かつ良好となり、支援計画が具体的な情報把握に基づく対象児者の実態に沿ったものになった、などの良好な結果が得られた。

支援計画の実行と結果の評価では、計画はチームにも個人にも実行可能なものであり、目的の支援課題は解決して支援対象児の生活は改善し、計画実行によるチームの支援連携が向上する、などの良好な結果が得られた。

保護者及び支援者の支援参加の振り返り評価は、保護者では、子どものよさがわかり、場面の工夫から支援する方法がわかった、子どもを褒めることや子どもと一緒にいて楽しいと感じることが増え、支援会議への参加で子育てのエネルギーをもらえた、などの良好な結果が得られた。支援者では、日常の具体的情報に基づく支援構築の重要性、場面や条件で子どもの様子が異なることの確認の重要性がわかり、支援者間で根拠を伴う具体的な話し合いが増えた、などの良好な結果が得られた。

システム活用前後の個別支援計画の比較評価では、活用後の記載が活用前に比べて、具体的となり、同じ支援を共通にイメージでき、支援効果を評価しやすくなった、などの良好な結果が得られた。

4) 考察

ICF の早期発達支援における活用は、親子支援事業(子育て支援)と親子通所施設(療育)の両事業単位で良好な結果であった。ICF の活用により切れ目のない支援が実現される可能性が示されただけでなく、支援計画検討会議が具体的で実質的なものとなり、個別支援計画の具体性が向上した。加えて、支援者の支援スキル向上、支援会議に参加した保護者が子育てに前向きとなり、子どもとのかかわりが改善した。ICF が支援の共通言語となることで、保護者と支援者が日常の具体的エピソードに基づいた子ども像を共通に描けたことが、今回の結果に奏功したと考えられる。

2　事業申請の背景と事業目的

発達障害児者の地域生活を支援するためには、一人一人の日常生活の困難を把握し、ライフコースを通じて、それらの困難さに応じた支援を提供していかなければならない。

しかし、発達障害はその困難さが発現する時期と程度が多様であるとともに、それを把握する明確な生物学的把握指標が存在しないために、一地域における発達障害の完全な把握を人生早期から実現することは容易ではない。そのため、発達障害支援には子育て支援との連携が求められるところであり、「発達が気になる状態」からの支援開始およびその支援を縦横につないでいくことが必要不可欠である。

愛知県碧南市では、乳幼児健診から配慮ある子育て支援、そして発達支援をシームレスにつなぐ体制整備を進めてきており、健診事後教室、発達相談、巡回支援、早期療育親子支援事業、親子通園施設運営などを行っている。これら一連の早期療育支援事業における子どもの育ちの支えは、親子の支えから始まって、徐々に、関係機関との連携へと広がっていくものであり、本来、発達障害支援には関係各機関の多職種連携、そして当事者・家族を含む多領域連携が形成されていくべきである。しかし、実際には、それぞれの専門性や専門用語、発達支援視点の相違などにより、その実現はなかなかに難しい。そのため、今回、平成 30 年度発達障害児者地域生活支援モデル事業を活用して、発達障害のライフコース支援に求められる多領域支援連携の初発点を実効性ある形で実現するための取り組みを行った。

当市では、2 年ほど前から、支援対象児が示す発達の課題と生活への影響、困難さを全体的視点から理解するために、ICF の図式に基づいて、児の状態像を読み解くことを試みている。しかし、一定程度の共有理解には至るものの、その理解を、児の生活実態に即した具体的な支援に結実させる作業は容易ではなかった。その結果 ICF の考え方をよく知る作業療法士などの専門職が支援を強くリードする形となり、スタッフ全体の ICF 理解と協働性に支えられた支援構築と支援実施には届かない状態であった。

ICF は、人間のあらゆる健康状態とその関連領域の諸要因を網羅的に分類・記述したもので、WHO（World Health Organization;世界保健機関）が 2001 年に提示している。ICF の構成要素は、ICD-10 （International Classification of Disease and Related Health Problem 10th Revision；国際疾病分類)により分類･記述される「健

康状態」，健康状態に関連する個人内要因である「心身機能・身体構造」，個人の生活実態である「活動と参加」，個人の生活実態に関連する個人外要因である「環境因子」，健康状態以外の個人的特徴である「個人因子」の 6 つであり、これらの相互関係により、人間の健康状態と生活機能およびその背景を包括的に捉えることができる。

ICF の大きな特徴は、背景因子と呼ばれる「環境因子」と「個人因子」で、この因子の導入により、日常生活での困難（障害）が、個人の内部要因である心身機能・身体構造の障害（機能障害）にのみ由来するのではなく、個人の外部要因である環境因子と内部要因である機能障害の相互作用から発生してくるという見方を提示したことにある。この環境因子の視点は、その後 2006 年に国連総会で採択された障害者権利条約の障害概念にも社会的障壁という形で反映されている。

このように ICF は障害の発生に関連する多要因を包括する視点を持っている。そのため発達障害支援に求められる多領域連携の実現に向けた作業の枠組みとして ICF 図式は高い有用性を持っている。一方、図式は概念レベルの表現であることから、上述したように、具体的な支援につながりづらいという課題があった。ICF には心身機能・構造、活動と参加、環境因子の各構成要素に具体的な評価項目が列挙されており、これらを活用すれば、具体的な支援計画に届く可能性があると考えられた。しかし、ICF の項目数は全部で約 1,500 項目と膨大であり、実践支援には使いづらい。そのため、今回の事業では、企画推進委員会の委員長が研究開発代表者として平成 27 年度から 29 年度にかけて実施した日本医療研究開発機構の委託研究により開発した ICF 情報把握・共有システム（安達,2018）を当市の早期療育支援事業に活用することとした。このシステム活用により ICF 項目を早期療育の現場で実践活用するとともに、ICF 項目に基づく具体的な情報把握と情報共有を支援計画の検討と実施につなげることを企図した。

本事業の目的は以下の 3 つである。

①「碧南市が実施する早期療育支援事業において、発達障害のライフコース支援に求められる多領域連携の初発点を実効性ある形で実現すること」

②「ICF 項目に基づく児の情報把握・共有および ICF 図式を実践支援に活用し、早期の発達障害支援における ICF の有用性を確認すること」

③「発達障害支援に求められる子育て支援から発達支援への滑らかなつながりの実現可能性を早期療育支援事業の中で確認すること」

3　事業の実施内容

(1) ICF 情報把握・共有ツールの概要

ICF 情報把握・共有ツールは、ICF の視点に基づく情報把握・共有パッケージ、パッケージを構成する情報把握・共有シート、情報把握・共有パッケージをインターネットで共有するためのクラウドシステム、クラウドシステムからダウンロードしたデータを整理表に展開するエクセルアプリケーションから構成される。以下、それぞれについての説明を記載する。

(2) ICF 情報把握・共有パッケージ

ア　情報把握・共有パッケージのシート構成

ICF 情報把握・共有パッケージは「医学的診断」(ICF の健康状態と対応)、「健康関連情報」(心身機能・構造と対応)、「活動と参加」、「環境因子」、「支援対象者情報」(個人因子に対応)の情報把握シートに支援経過を記録するシートとして「支援課題・情報・方針・結果」を加えた 6 シートで構成される。

医学的診断シートは①精神科疾患の主診断と併存診断、②精神科以外の疾患の主診断と併存診断、③医師の所見(診断と本人の状態像との関連)、④医学的治療方針(含：投薬内容)から成る。精神科以外の疾患を含めたのは、一般的な疾患の適応状態への影響を把握するためである。

健康関連情報シートは、①現在までの健診や医療受診に関する情報、②-1 専門的評価が必要と思われるエピソード、②-2 当該エピソードに関わる評価結果と所見、から成り、生育歴の把握とともに不適応への気づきが専門的評価につながる仕組みとなっている。

活動と参加シートは、ICF-CY（国際生活機能分類－小児・青少年に特有の心身機能・構造,活動等を包含－）の第 2 レベルを中心に第 3 レベルの項目を一部加えて構成するとともに、複数の項目をまとめて見出しと見出し説明を付記し、各項目にも簡単な説明文を付した。項目総数は 127、見出し総数は 58 である。

環境因子シートについても、複数項目をまとめて見出しと見出し説明、項目説明を付した。項目総数は 84、見出し総数は 43 となった。

支援対象者情報シートは、①性別と年齢、②同居者、③結婚、④職業、⑤資格、⑥宗教、⑦特技や趣味、⑧医療サービス利用経過、⑨学校教育の経過（特別支援の有無）、⑩福祉サービスの利用経過、から成る。本ツールはクラウド利用を前提とするため秘匿性の高い個人情報は除外した。

図３－１は、以上のパッケージ構成を ICF 図式に準ずる形で示したものである。

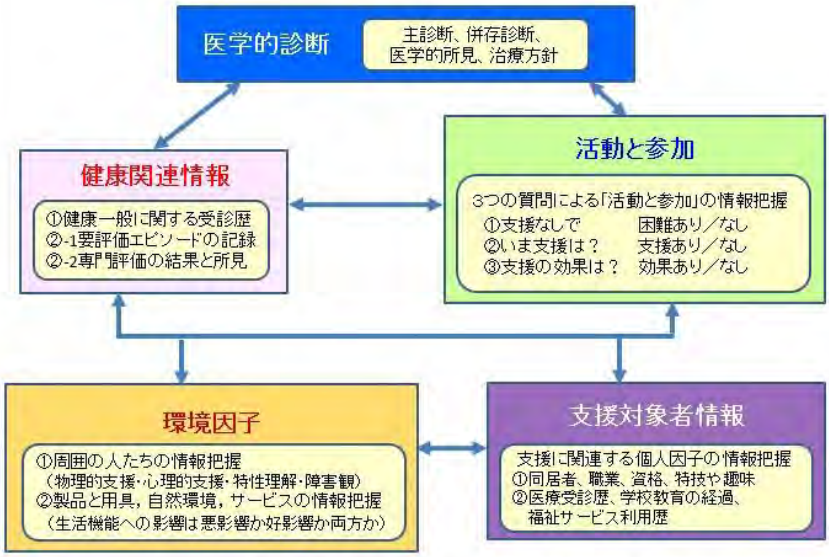

図３－１　情報把握・共有パッケージの構成

イ　活動と参加シート及び環境因子シートの情報把握手順と回答カテゴリー

活動と参加シートでは、各項目に対する３つの質問を通じた情報把握が行われる手順とした。質問１が「支援なしの場面で：1)困難あり、2)困難なし、3)詳細不明・非該当」の３択、質問２が「いま支援があるかどうか：1)支援あり、2)支援なし、3)スキップ」の３択、質問３が「支援の効果は：1)効果あり、2)効果なし、3)スキップ」の３択である。これら３つの質問に対する回答パターンによって、各項目を図３－２に示す５つの回答カテゴリーに位置づけることができる。

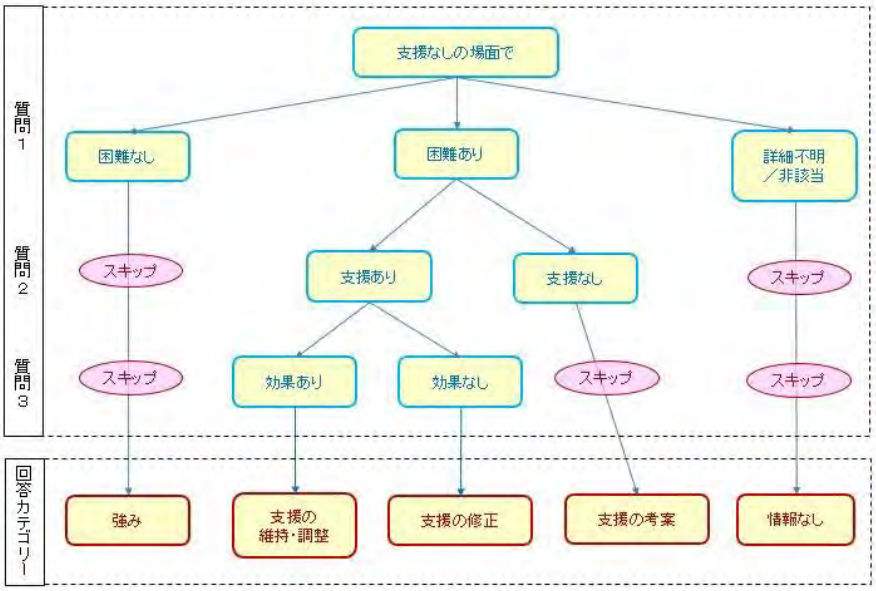

図３－２　活動と参加の情報把握手順と回答カテゴリー

環境因子シートについては、人に由来する環境因子を記述している「第 3 章 支援と関係」および「第 4 章 態度」の情報を把握するために知的･発達障害支援の観点から支援と態度の定義をそれぞれ考案した。定義は、支援を a)「物理的支援」(支援ツールなど具体物などによる支援や直接手助けするなどの身体的な支援)と b)「心理的支援」(ほめる、なぐさめるなど、心理的な安定につながる支援)の 2 視点、態度を c)「特性理解」(児者の困難性を特性の観点から理解すること)と d)「障害観」(障害への拒否的/受容的態度)の 2 視点の計 4 視点で構成した。情報把握に関わる選択肢は a)、b)、c)については「1)支援ニーズあり、2)支援ニーズなし、3)詳細不明・非該当」とし、d)については「1)抵抗感あり、2)抵抗感なし、3)詳細不明・非該当」とした。加えて当該項目に関わる支援対象者の具体的状況の補足情報記入欄を全項目に設けた。なお、この場合の「支援ニーズ」とは当該の人たちに対する支援ニーズである。例えば、物理的支援が不十分であれば、その充実に向けて当該の人たちを支援する必要があることを意味する。具体的には、養育者について「物理的支援と特性理解は十分なため支援は必要ないが、障害への抵抗感があるため心理的支援の充実に向けて支援の必要がある」といった情報把握ができる。このため、家族支援の方向性を検討していくことができる。

人以外の環境因子である「第 1 章 製品と用具」、「第 2 章 自然環境と人間がもたらした環境変化」、「第 5 章 サービス・制度・政策」は、生活への阻害因子であるか促進因子であるかの 2 視点で情報を把握する仕組みとした。ただしその表現は、生活への悪影響（阻害）、生活への好影響（促進）として、回答のしやすさを工夫し、「日常生活への悪影響が：1)あり、2)なし、3)詳細不明・非該当」、「日常生活への好影響が：1)あり、2)なし、3)詳細不明・非該当」という 2 つの質問を設定した。加えて、当該項目に関わる支援対象者の具体的状況を記載する補足情報欄を全項目に設けた。この情報把握手順により、例えば「音」の環境因子について「電気掃除機の音は阻害因子だが、繰り返す波の音は促進因子となる」といった情報把握ができる。

(3) パッケージを共有するためのクラウドシステム

クラウドシステム上でのツール構築により、インターネット環境とパソコンがあればどこでも把握情報の入力と閲覧が可能であり、データ入力の中断と再開も可能なシステム構成とした。クラウドアクセスのための ID は、管理者 ID と利用者 ID の 2

段構成となっており、また、クラウドシステムへのアクセス URL も管理者 URL と利用者 URL に分かれている。

管理者 URL に装備された機能は、ユーザー設定（利用者 ID および管理者 ID の発行)、入力データのダウンロード、パスワード変更（各ユーザーID のパスワード）である。利用者 URL に装備された機能は、クラウドへの情報入力である。複数の関係者による分担入力を可能とするため、入力途中での中断機能による中間登録機能を有し、すべての入力が完了した段階で完全登録を行うことによって、入力データがサーバーに固定される。

管理者 ID は利用者および管理者の両方の URL へのアクセスが可能である。利用者 ID は利用者 URL のアクセスに加え、当該利用者が情報入力を行ったことのある支援対象者のデータのみをダウンロードするために管理者 URL へのアクセスも可能となっている。

本クラウドシステムは、一般的な web ブラウザ（Chrome 推奨）で運用が可能であり、高いユーザビリティを有する。加えて、情報把握経過をクラウド上に保存できるため支援経過の履歴を確認することができる。また上述したように入力データを CSV ファイルにてダウンロードすることが可能なため、次に述べるエクセルアプリケーションの開発によって、把握された支援関連情報の利用可能性を広げることができる。

なお、本クラウドシステムは、ID とパスワードによる管理のほか、大手のシステム開発会社に委託して開発したものであり、当該会社が一括してサーバーを管理しているため高い情報セキュリティを有するものである。

(4) ダウンロードデータの整理表を展開するエクセルアプリケーション

エクセルアプリケーションは、クラウドからダウンロードした CSV ファイルを支援に利用可能なデータ整理表へと展開するものである。以下、医学的診断シート（表３－１)、健康関連情報シート（表３－２ａ，ｂ)、活動と参加シート（表３－３ａ～ｅ)、環境因子シート（表３－４ａ～ｆ)、支援対象者情報シート（表３－５）のそれぞれについて、整理表フォーマットを示す。なお、各表の記載情報は仮想ケースのサンプルデータによるものである。

ア　医学的診断シート

表３－１　医学的診断シート 整理表サンプル

医学的診断				
精神科疾患	主診断１		主診断２	
	"自閉症"		"注意欠陥多動性障害"	
	ICD-コード	ICD-版	ICD-コード	ICD-版
	"F84.0"	"10"	"F90.0"	"10"
	併存診断１		併存診断２	
	ICD-コード	ICD-版	ICD-コード	ICD-版
精神科以外の疾患	主診断１		主診断２	
	併存診断１		併存診断２	
医師の所見	自閉症と注意欠陥多動性障害の両症状が併存していることによって、状況理解の難しさが衝動性や不注意と相乗的に、本人の適応不全の背景となっている。			
医学的治療方針	情報処理の負荷が少ない、できるだけシンプルな環境において、本人が関心を示すテーマの活動の中で、注意をコントロールする感覚を体験してもらうことを大切にする発達支援が求められる。また、場面に応じて本人の困り方を保護者に伝えることも重要である。			

イ　健康関連情報シート

表３－２ａ　健康関連情報シート 記入欄Ａ 整理表サンプル

健康関連情報（記入欄A）	
A．健診や医療受診にかかわる情報（過去から現在までの情報）	
1．幼年期(０～４歳)	1歳6ヶ月健診では指摘がなかったが、3歳時健診で指摘あり。言葉の多少の遅れと、一人遊び、集団に入ろうとしないこと。
2．少年期(５～14歳)	就学時健診で、数や言葉など学習にかかわる基本的事項が十分ではないこと、および対人面の問題が把握された。就学は特別支援学級。
3．青年期(15～24歳)	非該当
4．壮年期(25～44歳)	非該当
5．中年期(45～64歳)	非該当
6．老年期(65歳以上)	非該当

表３－２ｂ　健康関連情報シート 記入欄Ｂ 整理表サン

健康関連情報（記入欄B_01-02）							
B．専門的評価が必要と思われるエピソード／専門職による評価結果と所見							
エピソード01	記入者ID	temp1423		記入日	2017.10.25		
エピソード内容	他児とのコミュニケーションがなかなか通じず、他児からの働きかけに対して場面に合わないことを言ったりする。						
専門評価01	評価者ID	temp0034	職種	心理職	評価法	絵画語彙発達検査	
	評価目的	言葉の発達				評価日	2018.03.15
評価結果と所見	知っている語彙は多い。ただし、同じ対象をある名称で呼称すると、別の名称で呼称することに時間がかかる。言葉の早期の切替に苦手さがありそう。						
エピソード02	記入者ID			記入日			
エピソード内容							
専門評価01	評価者ID		職種		評価法		
	評価目的					評価日	
評価結果と所見							

ウ　活動と参加シート

活動と参加シートのデータ整理表は、図２に示す回答パターンによるカテゴリー別に各カテゴリーの該当項目を示すものであり、各項目の補足情報も提示するものとした。表３－３ａ～ｅに、各回答カテゴリーの整理表サンプルを示す。

表３－３ａ　活動と参加 「強み」該当項目 整理表サンプル

【強み（支援なしで困難なし）】

	項目タイトル	支援なしで	いま支援は	支援効果は	補足情報
項目_45	d331）声による情報伝達	困難なし	スキップ	スキップ	②発声での要求や拒否は周囲の人も理解できる。
項目_56	d410）姿勢を変える	困難なし	スキップ	スキップ	
項目_57	d415）同じ姿勢を保つ	困難なし	スキップ	スキップ	
項目_58	d420）同じ姿勢で移動する	困難なし	スキップ	スキップ	
項目_59	d429）その他の姿勢の変換と保持	困難なし	スキップ	スキップ	
項目_60	d430）物(人)を持ち上げる・運ぶ	困難なし	スキップ	スキップ	足を使って物を動かすことはない。
項目_63	d445）手・腕の協調動作で物を扱う	困難なし	スキップ	スキップ	
項目_66	d450）歩行	困難なし	スキップ	スキップ	
項目_67	d455）移動すること	困難なし	スキップ	スキップ	
項目_68	d460）屋内・外の移動	困難なし	スキップ	スキップ	

表３－３ｂ　活動と参加　「支援の維持・調整」該当項目 整理表サンプル

【支援の維持･調整（支援効果あり）】

	項目タイトル	支援なしで	いま支援は	支援効果は	補足情報
項目_19	d160）何かに対する注意集中	困難あり	支援あり	効果あり	①物を示してもじっと見ようとしない。②物を揺らしたり、声かけしたりする。③多少見る回数と時間が長くなる。
項目_20	d161）課題(作業)完了までの注意持続	困難あり	支援あり	効果あり	①遊びなどの活動が続かない。②活動から離れようとしたときに、物を見せて次の活動に誘う。③活動が続くときもある。

表３－３ｃ　活動と参加　「支援の修正」該当項目 整理表サンプル

【支援の修正（支援効果なし）】

	項目タイトル	支援なしで	いま支援は	支援効果は	補足情報
項目_3	d120）目的をもって触る・嗅ぐ・味わう	困難あり	支援あり	効果なし	①目についた物を口でなめることが多い。舐めること自体が目的のように見える。②できるだけ物を散らかさないようにしている。③見えないものは舐めないが、見えると舐めてしまう。
項目_5	d130）まねをして学ぶ	困難あり	支援あり	効果なし	"①手遊びなどの真似はしない。②向かい合って拍手などの単純な行動は少し真似ができる。③それ以上の模倣はできない。 ①言葉の模倣もしない。②一音一音であれば、少し真似ができる。③それ以上の模倣はできない。"
項目_15	d1310-2）物を扱う遊びを通して学ぶ	困難あり	支援あり	効果なし	①積木などの物を並べる遊びはするが、それ以上の扱いにはならない。②積木を一緒に並べながら、積み方に変化を入れる。③神々立て積みを入れるなどすると、やろうとする。

表３－３ｄ　活動と参加　「支援の考案」該当項目 整理表サンプル

【支援の考案（困難ありで支援なし）】

	項目タイトル	支援なしで	いま支援は	支援効果は	補足情報
項目_1	d110）目的をもって見る	困難あり	支援なし	スキップ	①注意深く物を見ることをせず、目移りが激しい。一方、興味のあるTVキャラクターなどはじっと見ている。
項目_2	d115）目的をもって聞く	困難あり	支援なし	スキップ	①名前を呼んでも反応しないことが多い。一方、お菓子の包み紙を開ける音はすぐに察知して振り向く。
項目_6	d132）知らないことを質問する	困難あり	支援なし	スキップ	
項目_7	d133）ことばの習得と使用	困難あり	支援なし	スキップ	①好きなお菓子の名前は覚えている。
項目_10	d137a）物の特徴の概念学習	困難あり	支援なし	スキップ	①まだまったくできないが、おやつは大きい方を取る。
項目_11	d137b）心の状態の概念学習	困難あり	支援なし	スキップ	②できない。
項目_16	d1313-4）見立てやフリを通して学ぶ	困難あり	支援なし	スキップ	①まったくやろうとしない。
項目_25	d175）問題を解決すること	困難あり	支援なし	スキップ	①遊びの中で物がうまく操作できずにうまく行かなくなると癇癪を起こす。
項目_34	d240）ストレスを伴う作業(活動)遂行	困難あり	支援なし	スキップ	①はやくしなさいと言っても、やろうとしない。何度も言うと、癇癪を起こす。

表３－３ｅ　活動と参加　「情報なし」該当項目 整理表サンプル

【情報なし（詳細不明・非該当）】

	項目タイトル	支援なしで	いま支援は	支援効果は	補足情報
項目_4	d129）目的を持つその他の感覚経験	情報なし	スキップ	スキップ	
項目_8	d134）代替・補足的言語手段の習得と使用	情報なし	スキップ	スキップ	
項目_9	d135）繰り返して練習する	情報なし	スキップ	スキップ	
項目_12	d140）読むことの理解と習得	情報なし	スキップ	スキップ	
項目_13	d145）書くことの理解と習得	情報なし	スキップ	スキップ	
項目_14	d150）計算の理解と習得	情報なし	スキップ	スキップ	

エ　環境因子シート

環境因子シートのデータ整理表は、回答パターンに基づいて、環境因子としての周囲の人たち、悪影響と好影響が見られる項目、悪影響が見られる項目、好影響が見られる項目、影響が見られない項目、情報なし（悪影響・好影響の再確認）の各カテゴリーに該当する項目を示すものであり、各項目の補足情報も提示するものとした。表３－４ａ～ｆに、各回答カテゴリーの整理表サンプルを示す。

表３－４ａ　環境因子　周囲の人たち　整理表サンプル

【周囲の人たち】

	項目タイトル	物理的支援	心理的支援	補足情報	特性理解	障害観	補足情報
項目_1	e3-410）家族や近い親族	助言が必要	助言は不要	"①トイレの手伝い、衣服の着脱など身体的支援が行われている。自立に向けての環境調整の工夫が必要。 ②両親とも、児がうまくできた場合には、必ず、ほめている。祖父母はよくわからないようだが、児のことを受けとめてはいる。"	助言が必要	抵抗感なし	①特性の観点から、児の生活の様子を捉え返す機会が必要。
項目_2	e3-415）親族	詳細不明	詳細不明		詳細不明	詳細不明	
項目_3	e3-420）友人	詳細不明	詳細不明		詳細不明	詳細不明	
項目_4	e3-425）知人、同僚、地域の人など	詳細不明	詳細不明		詳細不明	詳細不明	
項目_5	e3-430）教師や雇用主など上の立場の人	詳細不明	詳細不明		詳細不明	詳細不明	
項目_6	e3-435）組織の中で下の立場にある人	詳細不明	詳細不明		詳細不明	詳細不明	
項目_7	e3-440）対人サービス提供者	詳細不明	詳細不明		詳細不明	詳細不明	
項目_8	e345,e445）一時的に関わる人	詳細不明	詳細不明		詳細不明	詳細不明	
項目_9	e355-450）医療・保健・福祉の専門職	詳細不明	詳細不明		詳細不明	詳細不明	
項目_10	e360-455）その他の専門職	詳細不明	詳細不明		詳細不明	詳細不明	
項目_11	e3-498-9）その他の周囲の人たち	助言は不要	助言は不要		助言は不要	抵抗感なし	

表３－４ｂ　環境因子　好悪両影響の因子　整理表サンプル

【悪影響と好影響の両側面を検討】

	項目タイトル	悪影響	好影響	補足情報
項目_25	e465）社会全体の価値観、習慣、慣行、宗教教義など	あり	あり	①療育を特別な子育てと感じやすい部分がある　②どんなこどもでも受け入れて育てていくという信念がある。
項目_32	e1200）屋内外の移動のための乗り物や公共の交通手段（改造や特別な設計なし）	あり	あり	①三輪車はまだ乗れない、バスは振動が嫌で乗れない。②自家用車であれば乗れる。

表３－４ｃ　環境因子　悪影響の因子　整理表サンプル

【悪影響の側面を検討】

	項目タイトル	悪影響	好影響	補足情報
項目_26	e110 a）食べ物や飲み物	あり	なし	①カレーなど、いろいろな具が混ざっている物は食べづらい。
項目_47	e165）資産	あり	なし	①家庭の経済状況が多少不安定。
項目_49	e240）光	あり	なし	①まぶしい光や明るすぎる場所は苦手で目をつぶって開けようとしない。
項目_50	e250）音	あり	なし	①突然の大きな音や高い金属音は苦手で、しばらく耳を塞いでいる。
項目_53	e2251）湿度	あり	なし	①梅雨時など湿度が上がってくるとイライラし始めることが多い。
項目_56	e255）振動	あり	なし	①バスの揺れや信号でスピードが落ちて止まることが苦手で乗ろうとしない。
項目_79	e585）教育と訓練の関連サービス	あり	なし	①本児を受け入れてくれる幼稚園がなかなか見つからない。

表３－４ｄ　環境因子　好影響の因子　整理表サンプル

【好影響の側面を検討】

	項目タイトル	悪影響	好影響	補足情報
項目_30	e11520）一般的な遊び用の製品と用具（改造や特別な設計なし）	なし	あり	②くるくるチャイムやイタズラボックスが大好きで、集中して遊んでいられる。
項目_34	e1250）情報の受信や発信、コミュニケーションのための製品や用具（改造や特別な設計なし）	なし	あり	②幼児向けのテレビを見て、歌などを覚えている。
項目_36	e1300）学習のための一般的な製品と用具（改造や特別な設計なし）	なし	あり	②タブレットの動く絵本が好きで言葉を覚えたりしている。
項目_55	e2253-5）天気の状態や四季の変化	なし	あり	①春と秋は比較的落ちついて過ごせる。

表３－４ｅ　環境因子　影響なしの因子　整理表サンプル

【当該因子の影響なし】

	項目タイトル	悪影響	好影響	補足情報
項目_28	e1150）日常生活で使う一般的な製品と用具（改造や特別な設計なし）	なし	なし	
項目_44	e155）自宅の暮らしやすさや安全性（設計や設備について）	なし	なし	
項目_45	e150）公共の建物の使いやすさ（設計や設備について）	なし	なし	
項目_46	e160）屋外環境の整備状況（道路や街灯、公園の整備など）	なし	なし	
項目_48	e198-9）その他の製品と用具	なし	なし	
項目_51	e260）空気	なし	なし	
項目_52	e2250）気温	なし	なし	
項目_54	e2252）気圧	なし	なし	
項目_57	e245）昼夜の移り変わりや月の満ち欠け	なし	なし	

表３－４ｆ　環境因子　情報なしの因子　整理表サンプル

【悪影響・好影響の有無を再確認】

	項目タイトル	悪影響	好影響	補足情報
項目_23	e350）ペットや家畜など	詳細不明	詳細不明	
項目_24	e460）団体やグループの障害観	詳細不明	詳細不明	
項目_27	e110 b）薬や栄養補助剤	詳細不明	詳細不明	いま、薬は飲んでいない。
項目_29	e1151）日常生活での使いやすさを支援するために工夫・改造された製品と用具	詳細不明	詳細不明	
項目_31	e11521）遊びやすさを支援するために工夫・改造された製品と用具	詳細不明	詳細不明	
項目_33	e1201）屋内外の移動や公共交通の利用を支援するために工夫・改造された製品や用具	詳細不明	詳細不明	
項目_35	e1251）情報の受信や発信、コミュニケーションを支援するために工夫・改造された製品と用具。	詳細不明	詳細不明	

オ　支援対象者情報シート

表３－５　支援対象者情報　整理表サンプル

支援対象者情報												
同居者	同居者1		同居者3		同居者5	家族の状況のまとめ						
	"父"		"妹（2歳2ヶ月）"									
	同居者2		同居者4		同居者6							
	"母"											
家族	未婚	兄弟	情緒あり	脱肩	未就園	仕事内容						
資格	なし	資格1	資格2	資格3	資格4	資格5	資格6					
趣味	あり	"文字合わせブロックが好きで、これがあればずっと一人で遊んでいられる。"				趣味や趣味のまとめ						
		"ジグソーパズルが得意。集中しやすい。"										
		"図鑑や小学校低学年向けの本からいろいろな言葉を覚えていっている。"										
医療サービス利用歴	0~4歳	受診あり	補足)	"4歳6ヶ月の時に医療機関を受診。自閉症の診断があった。"		医療利用歴のまとめ						
	5~14歳	非該当	補足)									
	15~24歳	非該当	補足)									
	25~44歳	非該当	補足)									
	45~64歳	非該当	補足)									
	65歳~	非該当	補足)									
学校教育（特別支援教育）の経過	幼保・園	特支なし	補足)			学校教育のまとめ						
	小学校	非該当	補足)									
	中学校	非該当	補足)									
	高校	非該当	補足)									
	専門学校・大学	非該当	補足)									
福祉サービスの利用経過	幼保・園	利用なし	補足)			福祉サービスのまとめ						
	小学校	非該当	補足)									
	中学校	非該当	補足)									
	高校	非該当	補足)									
	専門学校・大学	非該当	補足)									
福祉サービスの利用経過（学校教育後）	幼保・園	利用なし	補足)			福祉サービスのまとめ						
	小学校	非該当	補足)									
	中学校	非該当	補足)									
	高校	非該当	補足)									
	専門学校・大学	非該当	補足)									
福祉サービスの利用経過（学校教育後）	事業所名1		事業名・制度名1		事業所名2		事業名・制度名2					
	事業所名3		事業名・制度名3		事業所名4		事業名・制度名4					
	事業所名5		事業名・制度名5		事業所名6		事業名・制度名6					
	事業所名7		事業名・制度名7									
支援対象者情報全体のまとめ												

(5) 情報共有フォーマットを生成するためのエクセルアプリケーション

情報共有フォーマットとは、（４）で記載した、各情報把握・共有シートの整理表を ICF 図式に準じて配置するためのアプリケーションである。情報共有フォーマットを概観することによって、ICF 情報把握・共有パッケージで得られた支援関連情報を包括的に捉え、支援対象児者の全体像を検討することができる。なお、本アプリケーション（４）で述べた各シートのデータ整理表のデータを反映するために、情報共有フォーマットを生成するためには、（４）で述べた、各シートのデータ整理表を、先行して生成しておく必要がある。図３－３に、情報共有フォーマット（サンプルデータ）を示す。

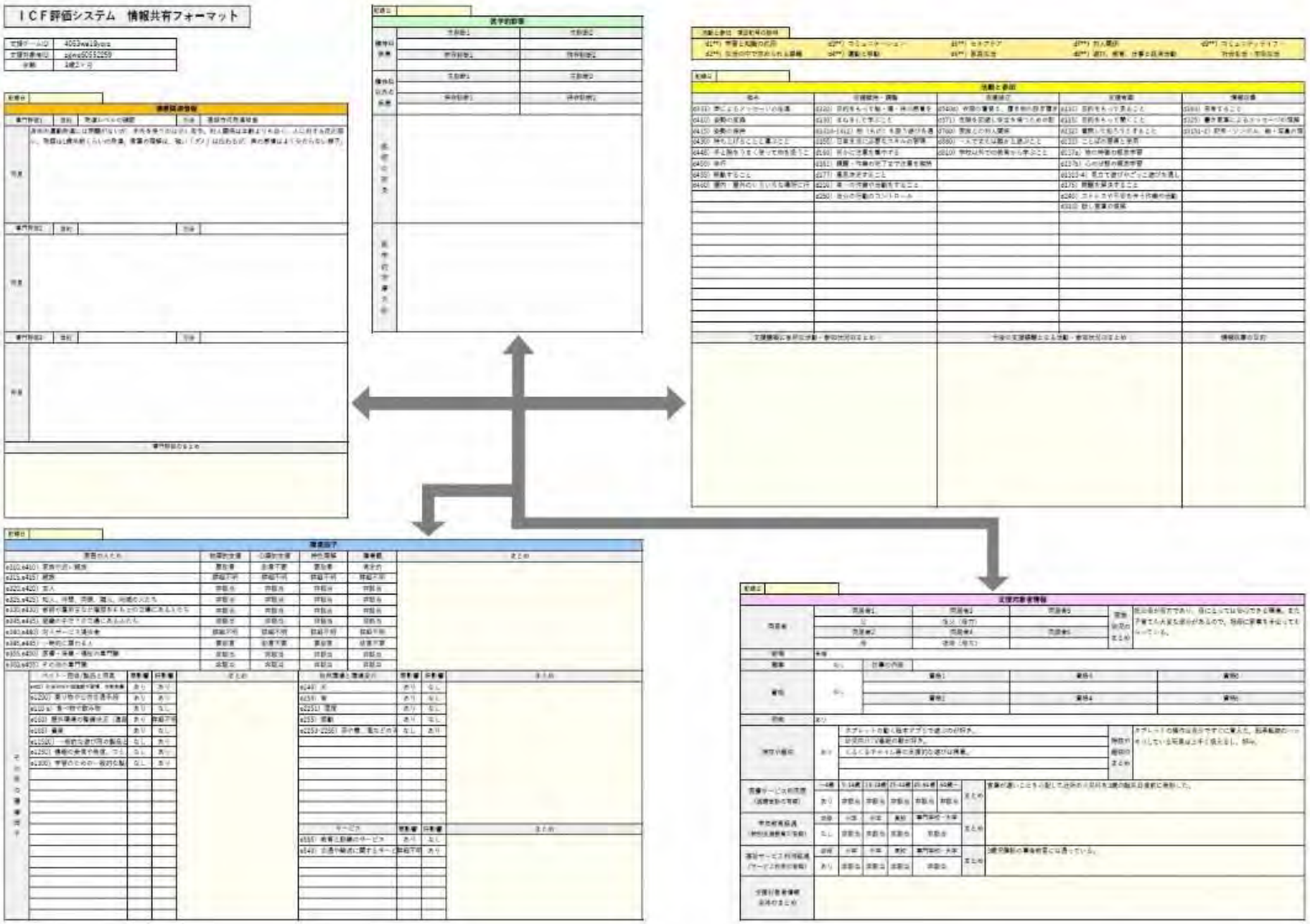

図３－３　情報共有フォーマット（サンプルデータ）

４　モデル事業の実施経過

(1) モデル事業の実施単位

ア　親子支援事業（早期療育親子支援事業「のんのん」）

子どもの発達に不安を持つ保護者とその子どもに対し、子どもの成長を促し、保護者が子どもの個性にあった育て方を学び、子育ての困難の解消を図るため、平成３０年７月から幼稚園の空き教室と子育て支援センターで早期療育親子支援事業を開始した。

(ｱ) 対象　発達が気になる２、３歳の子どもとその保護者

(ｲ) 参加回数　週１回（５ヶ月間）　年間５クール実施

(ｳ) 内容　親子活動、設定療育、親のグループワーク等

(ｴ) スタッフ　保育士(3 名)、看護師(1 名)、臨床心理士（1 名)、作業療法士（巡回支援員１名）

イ　親子通園施設（にじの学園）

心身に発達の遅れや障害を持つ幼児とその保護者が共に参加し、集団療育や親子遊びを通して、幼児の日常生活及び集団生活への適応能力の増進を図るもの。（市の単独事業で児童発達支援ではない。）

(ｱ) 対象　心身に発達の遅れや障害を持つ就学前の子どもとその保護者

(ｲ) 通園頻度　週１～４回（年齢により通園頻度が異なる）

(ｳ) 内容　親子活動、設定療育、親のグループワーク等

(ｴ) スタッフ　(常勤)保育士(7 名)、(非常勤) 言語聴覚士(1 名)、
作業療法士(1 名)、臨床心理士(1 名)、理学療法士(1 名)

(2) 利用者への参加協力依頼と参加協力親子

参加協力者へは事業説明の後、参加協力同意書に記名を依頼した。

参加協力親子

ア　親子支援事業（早期療育親子支援事業「のんのん」）

４名（年齢３歳）（４名とも病院受診、診断名なし）

イ　親子通園施設（にじの学園）

３名（年齢４歳２名、５歳１名）（３名とも発達障害の診断名あり）

(3) 事業の年間実施計画と実際の計画実施

図 4－1ａ～ｃに示すのは、モデル事業の年間実施計画（実施前予定及び実際の計画実施）である。

ア　６月～９月

６月～９月の実施計画を図４－１ａに示す。

６月は、ＩＣＦの詳細について学習する必要性があるため、企画推進員の予定者と事業に参加する支援者を対象に、ＩＣＦの基本的な理解に加えて、ＩＣＦ情報把握・共有システムについての事前研修会を実施する。

７月～８月は、各月に企画・推進委員会を開催するとともに、７月にＩＣＦ情報把握・共有システムの使用法の説明と使用の練習を行い、にじの学園は８月までに情報把握と共有を実施、のんのんは情報把握の練習を行う。８月にはにじの学園の第１回支援会議で支援計画を立てるとともに、会議に基づいた支援を開始。のんのんは８月末までに支援チームを形成し、９月に協力児決定とする。

愛知県碧南市発達障がい児者地域生活支援モデル事業事業計画	平成30年			
	6月	7月	8月	9月
	6月18日	7月13日	8月17日	
委員長の動き	午前）現場参加 午後）事前研修 （含：エクセルアプリの使用法）	7月12日）現場支援者にエクセルアプリの使用法説明 午前）現場参加 午後）企画･推進委員会	午前）現場支援者と支援会議 午後）企画･推進委員会	検討）必要に応じてこの間にスカイプ会議
企画・推進委員会 （全5回）	**事前研修** ＞事業参加者ほぼ全員 プレ企画･推進委員会 ＞事業の全体フレーム共有	にじ）支援会議（8月）の準備と持ち方の検討 親子）ICF評価練習開始に際しての課題確認･解決方法の検討。	にじ）午前中に立てた支援計画の確認･修正点の洗い出し。 親子）観察･情報把握の実施から出てきた課題の確認･解決策の検討	
にじの学園予定 （母子療育）	6月18日の研修後） **支援チーム体制の確定** >対象ケース確定 ＞チームリーダー チームメンバー決定 ＞情報把握・観察の開始	7月13日までに） **情報把握・観察の課題点確認** ＞チームで課題点をチェック ＞企画･推進委員会に課題提示 8月の支援会議に向けて課題の確認と整理	8月17日） **支援会議（支援計画）** >把握情報の相互共有 >支援計画構築・役割分担 **支援スタート** >支援経過の記録 >支援効果の継続的評価	支援計画に基づく 支援の実施を継続
にじの学園実施結果 （予定と違う部分のみ記載）			**8月17日） 支援会議１ケース（支援計画）**	**９月上旬） 支援会議２ケース（支援計画）**
のんのん予定 （親子支援教室）		7月13日に先行して） **観察･情報把握の練習開始** ＞うさぎ(3歳)･わんわん(2歳)を 対象とする ＞ICF評価システムを活用する	8月17日） （支援会議に参加） **ICF評価練習の振り返り** 8月末までに） **情報把握・共有・支援体制の 決定（10月～の体制）** ＞支援チームリーダー ＞支援チームメンバー	9月末までに） きりん（3歳）の対象児決定
のんのん実施結果 （予定と違う部分のみ記載）			**８月末までに 対象児の決定** うさぎ（３歳）２名・わんわん（２歳）２名	**９月末までに情報把握終了**

図４－１ａ　年間の実施計画の流れ(1)

イ　１０月～１２月

１０月～１２月の実施計画を図４－１ｂに示す。

１０月は、にじの学園では、第１回支援会議で立てた支援計画を継続実施し、のんのんでは、協力児の情報把握を開始する。

１１月～１２月は、にじの学園では、把握情報の共有と１２月の支援会議の準備。のんのんでは、他協力児の情報共有を開始し、情報把握に係わる課題を確認する。企画推進委員長は必要に応じてスカイプ会議で助言。１２月に支援会議と企画・推委員会を開催する。併せて質問票による事業評価を実施する。

愛知県碧南市発達障がい児者地域生活支援モデル事業事業計画	平成30年		
	10月	11月	12月
			12月27日
委員長の動き	検討）必要に応じてこの間にスカイプ会議	エクセルアプリの使用法について必要に応じて助言	午前）支援会議 午後）企画･推進委員会
企画・推進委員会 （全5回）			にじ）午前中の支援会議の報告を受け、事業成果を評価。 成果まとめ作成の方向性を意見交換・確認。 親子）途中チェックで出てきた課題の確認と解決策検討
にじの学園予定 （母子療育）	支援計画に基づく 支援の実施を継続	11月中旬～） **支援経過の振り返り** ＞観察･情報把握 ＞システムへの情報入力 ＞入力完了後、把握データ整理 ＞整理データの確認 ＞12月の支援会議への準備	12月初め） **支援会議（情報共有）** ＞メンバーから担当項目についての報告 ＞チーム全体で支援効果の確認 ＞リーダーまとめ ＞支援計画の調整
にじの学園実施結果 （予定と違う部分のみ記載）			**12月中下旬） 支援会議2名**
のんのん予定 （親子支援教室）	10月1日から） きりん（3歳） 観察・情報把握スタート 10月末までに） いちご(2歳)の対象児決定	11月1日から） いちご(2歳) 観察・情報把握スタート 11月下旬） きりん（3歳） 観察・情報把握作業の途中チェック ＞作業に関わる課題の共有と解決策の検討	12月中旬から） きりん 支援経過の振り返り ＞システムへの情報入力 ＞入力完了後、把握データ整理 ＞整理データの確認 ＞２月の支援会議への準備 １２月下旬） いちご 観察・情報把握の途中チェック ＞課題の共有 ＞解決策の検討
のんのん実施結果 （予定と違う部分のみ記載）	**10月下旬） 支援会議2名（支援計画）**	**11月中旬） 支援会議2名（支援計画）**	**支援計画に基づく支援の実施を継続**

図４－１ｂ　年間の実施計画の流れ（2）

ウ　１月～３月

平成３１年１月～３月の実施計画を図４-１ｃに示す。

１月～２月は、にじの学園では、支援の継続。のんのんでは、把握情報の共有と２月の支援会議への準備を経て、支援計画の構築につなぐ。企画推進委員会を２月に開催し、この時点までの事業成果の確認、事業報告書および他地域への普及方法を検討。にじの学園、のんのんともにＩＣＦ情報把握・共有システムの活用成果を反映させた引継ぎ書類を作成。

２月～３月は、事業全体の成果を、経過全体を振り返る質問票により評価。企画推進委員会を開催し、事業報告書まとめの確認を実施。

愛知県碧南市発達障がい児者地域生活支援モデル事業事業計画	平成31年		
	1月	2月	3月
		2月1日	3月15日
委員長の動き		午前）事業報告書の検討 午後）企画･推進委員会	午前）事業報告書の検討 午後）企画・推進委員会
企画・推進委員会 （全5回）		にじ･親子） 事業まとめの具体案提示 他地域への普及方法検討 親子）	にじ･親子） **事業まとめの全体共有** ＞支援に対するICFシステムの効果 ＞全体経過の振り返り ＞他地域への普及方策のまとめ
にじの学園予定 （母子療育）	調整済みの支援計画に基づく支援の実施を継続	2月中旬） **年度末に向けての課題確認** 2月末頃） **年明けからの支援の振り返り** ＞システムへの情報入力 ＞入力完了後、把握データ整理 ＞整理データの確認 ＞引継ぎ書類への反映検討	3月15日） **支援経過全体の振り返り** ＞対象児の変化 ＞引継ぎ書類の内容 ＞事業に対する保護者の評価 ・・・等々
にじの学園実施結果 （予定と違う部分のみ記載）	**1月下旬）** **支援会議1ケース**		
のんのん予定 （親子支援教室）	1月中旬から） **いちご** **支援経過の振り返り** ＞システムへの情報入力 ＞入力完了後、把握データ整理 ＞整理データの確認 ＞2月の支援会議への準備	2月中旬） **いちご･きりん支援会議** ＞メンバーから担当項目についての報告（情報共有） ＞チーム全体で支援効果の確認 ＞リーダーまとめ ＞3月末までの支援内容確認 ちゅーりっぷ**支援の振り返り** ＞システム情報入力 ＞整理データの確認	3月15日） **支援経過全体の振り返り** ＞対象児の変化 ＞引継ぎ書類の内容 ＞事業に対する保護者の評価 ・・・等々
のんのん実施結果 （予定と違う部分のみ記載）	**支援計画に基づく** **支援の実施を継続**	**支援計画に基づく** **支援の実施を継続**	

図４－１ｃ　年間の実施計画の流れ（3）

エ　計画の実施について

図４－１ａ～ｃに示す通り、ほぼ計画通りに進行・完了した。のんのんでの実践は、むしろ、計画よりも早く進み、余裕を持って支援会議を開催することができた。引継ぎ書類については、のんのんではＩＣＦ情報把握・共有システムの活用成果を反映させた個別支援計画を引継ぎ書類とした。

(4)　ＩＣＦ情報把握・共有システムの実践活用

図の４－２に実践活用の手順を示す。

ア　ICF情報把握・共有システムによる情報把握と情報共有

(ｱ) チームで情報収集の役割分担

(ｲ) ICF情報把握シートにて情報収集

(ｳ)ICF情報把握データ整理表で全体像を把握

イ　支援検討項目についての絞込み

ウ　第１回支援会議の事前準備（支援会議資料の作成）

エ　第１回支援会議の開催および支援計画の検討

オ　支援計画の実施とICF情報把握・共有システムによる情報の再把握と再共有

カ　第２回支援会議の事前準備

キ　第２回支援会議の開催および支援計画の検討

図４－２　ＩＣＦ情報把握・共有システムの実践活用の流れ

ア　ＩＣＦ情報把握・共有システムによる情報把握と情報共有

(ｱ) 支援チームによる情報収集の役割分担

ａ親子支援事業（早期療育親子支援事業「のんのん」）

(a) 支援チームの構成

ＩＣＦシステムによる情報把握では、活動と参加シートについては、幼

児期（３歳）には非該当になると思われる項目（４６項目）を予め除外し残り８１項目について、協力児１人に対し項目ごとに担当者を決め情報収集を実施した。除外項目には、実生活で読むこと、実生活で書くこと、集団での複数作業・活動、ディスカッション、健康に注意すること、住居・家具・家電の入手、調理をすること、家族や他者の世話、などを選択した。

環境因子シートについては、活動と参加と同様に予め１９項目を除外し残り６５項目を担当者が情報収集をした。除外項目には、友人の物理的支援、心理的支援、学習場面や仕事の場面で使う製品と用具、建築、電気・ガス・水道、土地開発、労働と雇用などを選択した。また、初めは関係性の高い項目から情報収集をし、必要性の低い項目（宗教活動に関すること、生活圏の地形や水系、住宅供給の関連サービス、交通・輸送の関連サービスなど）の情報収集は先送りした。

支援チーム構成を表４－１に示す。保護者を含む７名程度で構成した。

表４－１　支援チーム構成（親子支援事業）

	対象児氏名		A
	立場	職種等	所属
1	リーダー	保育士Ａ	のんのん
2	メンバー	保育士Ｂ	のんのん
3	メンバー	保育士Ｃ	のんのん
4	メンバー	保育士Ｄ	のんのん
5	メンバー	看護師	のんのん
6	メンバー	臨床心理士	のんのん
7	メンバー	母親	保護者

(b) 各情報把握シートへの回答

各情報把握シートへの回答者を表４－２に示す。活動と参加は項目数が多いため、さらに表４－３に示す分担体制とした。環境因子に関してはリーダーが情報収集をし、家庭でしか把握できない項目は、リーダーが要約して保護者に聞き取りを実施した。

表４－２　各情報把握シートへの回答者（親子支援事業）

親子支援事業 各情報把握シートへの回答者	
医学的診断シート	なし
健康関連情報 記入欄Ａ	保護者（支援者の聞き取り）
健康関連情報記入欄Ｂ１	なし
健康関連情報記入欄Ｂ２	なし
活動と参加	支援チームメンバー＆情報把握分担表
環境因子	支援チームメンバー＆情報把握分担表
支援対象者情報	保護者（支援者の聞き取り）

表４－３　活動と参加の役割分担表（親子支援事業）

【活動と参加】　領域一覧（章）

	担当
第1章　学習と知識の応用	看護師
第2章　生活の中で求められる課題	保育士Ｂ
第３章　コミュニケーション	保育士Ｃ
第４章　運動・移動	保育士Ｄ
第５章　セルフケア	保育士Ａ
第６章　家庭生活	保育士Ｂ
第７章　対人関係	保育士Ａ
第８章　遊び、教育、仕事や経済活動	保育士Ａ
第９章　コミュニティライフ・社会生活・市民生活	保育士Ｄ

b 親子通園施設（にじの学園）

(a) 支援チームの構成

ＩＣＦシステムによる情報把握では、活動と参加シートについては、幼児期（４歳、５歳）には非該当になると思われる項目（２８項目）を予め除外し残り９９項目について、協力児１人に対し項目ごとに担当者を決め情報収集を実施した。除外項目には、健康に注意すること、住居・家具・家電の入手、調理をすること、家族や他者の世話、仕事の獲得・維持・終了、お金の使用や貯蓄などを選択した。

環境因子シートについては、活動と参加と同様に予め１３項目を除外し残り７１項目を担当者が情報収集をした。除外項目には、仕事の場面で使う製品と用具、建築、電気・ガス・水道の関連サービス、司法の関連サービス、土地開発、労働と雇用などを選択した。

残りの項目について協力児１人に対し項目ごとに担当者を決め情報収集を実施した。

支援チーム構成を表４－４に示す。保護者、主治医や児童発達支援事業所の児発管など、にじの学園の支援者以外も含む９名程度で構成した。（構成メンバーは協力児により若干異なる。）

表４－４　支援チーム構成（親子通園施設）

支援チーム構成			
	対象児氏名		B
	立場	職種等	所属
1	リーダー	保育士Ａ	にじの学園
2	メンバー	保育士Ｂ	にじの学園
3	メンバー	保育士Ｃ	にじの学園
4	メンバー	言語聴覚士	にじの学園
5	メンバー	作業療法士	にじの学園
6	メンバー	臨床心理士	にじの学園
7	メンバー	主治医	病院
8	メンバー	児発管	児童発達支援事業所
9	メンバー	母親	保護者

(b) 各情報把握シートへの回答

表４－５に、各情報把握シートへの回答者を示す。活動と参加、環境因子は項目数が多いため、表４－６、表４－７に示す分担体制とした。

親子支援施設では、メインとサブの担当を決め、メインの担当者が情報を収集したものをクラウドシステムに入力した。サブの担当者は情報を収集し、紙ベースで情報を保管し、支援会議の際に活用した。保護者へは、事前に情報シートを紙で渡して記入を依頼し、保育士がそれをもとに聞き取りを行った。

表４－５　各情報把握シートへの回答者（親子通園施設）

親子通園事業 各情報把握シートへの回答者	
医学的診断シート	主治医
健康関連情報 記入欄Ａ	保護者（支援者の聞き取り）
健康関連情報記入欄Ｂ１	保護者
健康関連情報記入欄Ｂ２	なし
活動と参加	支援チームメンバー＆情報把握分担表
環境因子	支援チームメンバー＆情報把握分担表
支援対象者情報	保護者

表４－６　活動と参加の役割分担表（親子通園施設）

【活動と参加】　領域一覧（章）		
	メイン	サブ
第1章　学習と知識の応用	保育士Ｂ	児発管
第2章　生活の中で求められる課題	児発管	保育士Ｂ
第３章　コミュニケーション	言語聴覚士	児発管
第４章　運動・移動	作業療法士	保育士Ｂ
第５章　セルフケア	保護者	児発、保護者
第６章　家庭生活	保護者	保育士Ａ
第７章　対人関係	保育士Ｂ	児発、保護者
第８章　遊び、教育、仕事や経済活動	保護者	保育士Ｂ、保護者
第９章　コミュニティライフ・社会生活・市民生活	保護者	保育士Ａ

表４－７　環境因子の役割分担表（親子通園施設）

【環境因子】一覧	対象児氏名	B
	メイン	サブ
１．物理的支援と心理的支援、特性理解と障害観：家族や親族	保護者	保育士Ｂ
２．物理的支援と心理的支援、特性理解と障害観：友人や知人	保護者	保育士Ｂ
３．物理的支援と心理的支援、特性理解と障害観：上下関係にある人たち	保育士Ｂ	家庭
４～８．物理的支援と心理的支援、特性理解と障害観	保護者	保育士Ｂ
９．心理的支援：ペットや家畜など	保護者	保育士Ｂ
１０．障害観：団体やグループ	保護者	保育士Ｂ
１１．障害観：社会全体の価値観、習慣、宗教教義など	保護者	保育士Ｂ
１２．食べ物や飲み物、薬や栄養補助剤	保護者	保育士Ｂ
１３．個人が日常生活や遊びで使う製品と用具	保護者	保育士Ｂ
１４．屋内外の移動のための製品と用具、公共交通機関	保護者	保育士Ｂ
１５．情報の受信や発信、コミュニケーションのための製品と用具	保護者	保育士Ｂ
１６．学習場面や仕事の場面で使う製品と用具	保育士Ｂ	家庭
１７．文化活動・レクリエーション・宗教活動のための製品と用具	保護者	保育士Ｂ
１８．自宅の暮らしやすさや安全に関わる製品と用具	保護者	保育士Ｂ
１９．生活圏にある公共の建物や屋外環境にかかわる製品と用具	保護者	保育士Ｂ
２０．保有している資産	保護者	保育士Ｂ
２１．製品と用具：その他	保護者	保育士Ｂ
２２．光、音、匂いなど	保育士Ｂ	児発
２３．気温、湿度、気圧、天候や四季の変化	保育士Ｂ	児発
２４．振動や揺れ	保育士Ｂ	児発
２５．昼夜の移り変わりや月の満ち欠け	保護者	保育士Ｂ
２６．自然災害や人的災害	保護者	保育士Ｂ
２７．地理的条件、人口の変動、生活圏内の動植物	保護者	保育士Ｂ
２８．自然環境と人間がもたらした変化：その他	保護者	保育士Ｂ
２９～４３．サービス	保護者	保育士Ｂ

イ　支援検討項目についての絞込み

ＩＣＦ情報把握･共有システムは協力児の状態像を多くの視点で包括的に捉えることができるが、同時に、支援検討の対象となる項目数も多くなる。それらすべての項目に支援を検討することは､支援計画の構築及び実施において現実的な選択とは言えない。そのため、本事業では、支援会議に先立って、支援を検討する項目を絞り込む作業を行った。以下、事業実施単位毎に、支援検討項目の絞り込みについて記載する。

(ｱ) 親子支援事業（早期療育親子支援事業「のんのん」）

活動と参加シートによる把握情報をエクセルアプリケーション（３．ICF 情

報把握・共有ツール　（４）ダウンロードデータの整理表を展開するエクセルアプリケーションを参照）でデータ整理表に展開して得られた「支援の修正」項目を確認し、以下の、ａ，ｂ，ｃ，ｄの４つの視点で、支援検討項目の絞り込みを行った。なお、これら４つの視点は、絞り込みの大凡の手順を現しているが、協力児の状況に応じて手順を前後するなどして、調整を図った。

ａ　支援の修正によって生活機能の改善が見込めそうな項目を選択する。

ｂ　支援の修正は難しいが生活機能の改善が強く求められる項目を選択する。
※a、bについては、発達段階を踏まえて考慮する。(同じ章でできていないところは、発達の基礎になる部分から選択する。関連する章についても確認し、発達の基礎となる部分から選択する。)

ｃ　絞り込み項目構成は「aを多く、bを少なく」して支援修正の負担を大きくしすぎない。

ｄ　総項目数については、親子支援事業では、保護者が自分の子どもに対し発達の困難さがあるのかどうなのかと迷っている状態であるため、保護者の状況等（子どもの状態の受け止め具合や保護者自身の理解度、保護者の精神状態等）も勘案し、まずは少なめ(２～４項目)に設定し支援修正の負担を大きくしすぎない。

(ｲ) 親子通園施設（にじの学園）

活動と参加シートによる把握情報をエクセルアプリケーションでデータ整理表に展開して得られた「支援の修正」と「支援の考案」項目を確認し、以下のａ，ｂ，ｃ，ｄの４つの視点で、支援検討項目の絞り込みを行った。

ａ　支援を考案できそうな、比較的取り組みやすい項目を選定する。

ｂ　支援の考案によって生活機能の改善が見込めそうな項目を選定する。

ｃ　絞り込み項目構成は「aを多く、bを少なく」して支援修正の負担を大きくしすぎない。

ｄ　総項目数は、支援の修正と合わせて保護者や協力児に負担のない範囲に収めて実行可能性を確保する。

ウ　第１回支援会議の事前準備（支援会議資料の作成）

図４－３に示すのは、支援検討対象となった１つの項目に関わる支援会議資料（親子支援事業）の一例である。本資料は、支援会議を実施し、支援方法を導出し、記載したものとなっている。なお、支援会議資料は、親子支援事業の保育士が中心になって支援チーム全体で作成した。

注）本資料の報告書記載については、保護者への説明を行い同意を得ている。

項目タイトル	選択理由	補足情報	具体的な手がかり	課題	支援の方向性	支援方法	いつ・誰が
項目1 d110) 目的を持って見る a	注目できる時間を長くするにはどうしたらいいか考えていきたい。	″①視覚優位なためリーダーに気づくまでに時間がかかりやすい。 ②全体の指示のみでなく個別的に注目するところを指をさしたり、絵カードで伝える。動いているときは人を見るように身体を止める。 ③目的に気づくことができれば見ることができるが、体を止めないとなかなか注目できない。″ b	・項目3 d120 机の上(目の前)に粘土があれば触れて遊ぶことができる。 ・項目5 d130 足型でピッと止まることができる。 ・項目30 d230 次の活動が分かると自分で戻り座ることができる。 ・項目38 d310 メリハリのある声掛けやハッとするような声をかける。 ・項目39 d3150 ほめられることで人を見るようになった。 ・項目47 d332 体を止めると注目し身振り、手ぶりは真似する。 ・環境項目36 e1300 見たことのある絵本を持ってきて、色を指差す、アルファベットを見て「字」と言う。 c	周りに気が散りやすい。 d	気付いて注目をさせる	①動いてしまう時は足型を置いて、待つ場所を分かりやすくする。(並ぶとき等) ②活動内容を事前に実物(粘土やクレヨン等)を使って見せ、見通しを持てるようにする。 ③同じ絵本を繰り返し見る機会を増やし、注目する時間を延ばす。 ④全体で説明して入りにくいときは、傍で話して伝えるようにする。 ⑤具体的に行動をほめる。 e	f

図４－３　支援会議資料の一部（親子支援事業：３歳　男児）

(ｱ) 親子支援事業（早期療育親子支援事業「のんのん」）

以下、支援会議資料の作成手順を記載する。なお、下線部分と各手順のアルファベットは図４－３の記載欄タイトルおよび図下部の丸囲みアルファベットと対応している。

ａ　支援検討対象の<u>項目タイトル</u>と<u>選択理由</u>を記入する。

ｂ　絞り込んだ項目の<u>補足情報</u>(クラウドに入力されている補足情報欄の記載内容）を支援会議資料に記入し、支援修正に必要な基本情報を確認する。図４－３に示すように、①困難の状況、②支援の内容、③支援の効果を記載するが、③の支援の効果は十分な結果が得られていない。そのため、次のｃの手順で支援を修正するための手がかりを得ていく。

c　支援修正アイデアを得るための具体的な手がかりの検討

支援検討対象の項目内容と関連する「活動と参加」および「環境因子」の他の項目から支援のヒントを探す。具体的な検討手順例を図４－３の内容に沿って、以下に示す。

(a) 活動と参加シートの把握情報については、「見ること」が関わる内容、「見ること」とほぼ同じ機能が関係していると思われる内容ので、困難さの軽い、あるいは認められない項目をリストアップする。

(b) リストアップは「強み」や「支援の維持・調整」の項目から探していく。この手順を効率よく進めるために、活動と参加の把握情報を展開した整理表で、本児の強みやできている部分にマーカーなどでチェックをしておく。また、その他の項目にも手がかりが記載されている場合があるので、確認していく。

(c) リストアップした項目の補足情報を項目番号と合わせて具体的な手がかり欄に記載する。リストアップした項目の補足情報に記載されている支援の内容や記載エピソードから当該項目がよい状態にある理由を検討し、支援のヒントや手がかりとなる内容を確認する。

(d) 「環境因子シート」の把握情報については、支援修正項目の達成に好影響や悪影響をもたらす「環境因子」項目の確認をし、それらの項目について好影響因子の提供あるいは悪影響因子の除去・低減を検討する。また、それに関連する「周囲の人たち」項目については、助言あるいは傾聴などのアプローチを検討する。

d　上記のプロセスを経た後に、支援検討対象となった項目に対する課題と支援の方向性を確認する。

e　支援検討対象となった項目に対する支援方法（案）を、（ｂ）、（ｃ）での検討をベースに考案していく。

f　「いつ・誰が」の欄はこの時点では空欄で記載なし。

(ｲ) 親子通園施設（にじの学園）

親子支援事業（早期療育親子支援事業「のんのん」）と同様。

但し、親子通園施設（にじの学園）では、支援案の考案の際に医学的診断情報シートも参考にした。医学的診断シートの参考手順は以下のとおり。

ａその支援修正、支援考案項目の課題は障害特性に由来するものかどうか。

ｂ障害特性に適した支援方法をその支援修正、支援考案項目に利用できるか。

エ　第１回支援会議の開催および支援計画の検討

(ｱ) 親子支援事業（早期療育親子支援事業「のんのん」）

ａ　支援会議開催状況

表４－８に４名の協力児に関わる支援会議の詳細を示す。支援会議には、事業単位のスタッフに加えて、作業療法士や臨床心理士などの関連専門職、さらに協力児の保護者も参加した。検討項目数は協力児によって異なるが、２～４項目であり、支援会議の所要時間は１時間～１時間３０分であった。

表４－８　４名の協力児にかかわる支援会議（親子支援事業）の詳細

	協力児A	協力児B	協力児C	協力児D
情報収集時期	平成30年9月上旬～9月末	平成30年9月上旬～9月末	平成30年9月中旬～10月上旬	平成30年9月中旬～10月上旬
支援案等会議資料作成	10月中旬	10月中旬	10月下旬	10月下旬
開催時期	平成30年10月25日	平成30年10月29日	平成30年11月1日	平成30年11月9日
参加者	保護者(母親）、保育士、看護師、作業療法士、保健師	保護者(母親）、保育士、看護師、作業療法士、保健師	保護者(母親）、保育士、保健師	保護者(母親）、保育士、看護師、作業療法士、臨床心理士、保健師
所要時間	１時間３０分	１時間３０分	１時間	１時間３０分
検討項目数	４項目	３項目	２項目	３項目

ｂ　会議の進め方

支援会議参加者は、事前に健康関連情報、活動と参加、環境因子、支援対象者情報の全ての情報を確認した。また、支援会議において初めに情報共有フォーマットで協力児の状況の共有を行い、その後支援会議資料に基づき協議した。

支援会議は、図４-３に例示したものと同様の支援会議資料に基づいて、支援会議資料の内容を確認しつつ、支援会議資料作成時点と支援会議開催時点の間に観察された協力児の発達上の変化を補足する形で開催された。支援会議

では、図４－３の最右欄にある「いつ・誰が」への記載内容を決定し、支援チームメンバーの責任に基づいて支援を実行できることを保障した。以下、支援会議を進める手順を記載する。なお、各手順のアルファベットは図４－３の記載欄タイトルおよび図下部の丸囲みアルファベットと対応している。

(a) 検討項目、選択理由の確認

(b) 補足情報から支援会議までの変化の確認

補足情報入力時点から支援会議開催までに１か月ほど経過しているため、その間の変化がみられれば報告し共通理解をする。

また、うまくいった時、いかなかった時の理由についての意見交換を参加者で行う。

(c) 「具体的な手がかり」に対する質疑、具体的な手がかりの追加

項目ｃの「具体的な手がかり」について、うまくいった（できる）時、うまくいかなかった(できない)時の理由について参加者で意見交換する。

(d) 課題、支援の方向性に関しての検討

(e) 支援案についての検討、支援案の追加

(f) いつ・誰が実施するかを決定

以上の手順で進めた支援会議で出された主な意見を図４－４に示す。

	情報入力後からの変化	具体的手がかりの確認	課題	支援の方向性	支援案についての主な意見	いつ・誰が
支援会議での主な意見	（保育士） ・保育士の真似をするようになった。 ・何か始まるという期待が持てるようになった。 （看護師） ・朝の受入で駆け寄って止まり、「先生」と言うようになった。 ・最初は人へのきづきが弱かったが、最近は保育士に関心を持つようになった。 （保護者） ・姉の姿をみて、踊りを一緒にするようになった。 ・「今日は、買い物で手をつないでいくよ」などと前もって伝えておくと出来ることが増えてきた。ただし、その場で伝えても、気になる物が目に入ってしまうから難しくなる。事前に言うのが有効。	・（保健師）「具体的な手がかり」について療育項目３９「視覚の刺激を少なくすることで集中できる」も追加するとよい。 ・（保健師）また、その「視覚の刺激を少なくする」とは具体的にどのような支援か？⇒（保育士）伝えたいときには、本人を壁の方に向け座らせるなど、他の子どもが少ないところで話すと注目できるのでそのようにしている。		・（OT）選択理由は注目できる時間を長くするとあるが、支援の方向性は気づかせるとなっている。どちらをやっていくか。⇒（保育士）最初は気づかせたかったが、最近は気づいているので注目できる時間を長くしたい。	（保育士）支援方法⑤の声かけの具体例は、短い言葉で「座れたね」「描けたね」と行動と言葉が一致できるようにしている。 （保護者）「座れたね」「描けたね」がほめ言葉だとは思わなかった。 （OT）慣れて楽しくなると多少刺激の多い療育でもできる。新しいことをする時は気がそれない所でやるとよい。 （保護者）絵本は家で読んであげる機会が少ないが、寝る前の布団で読むとおもちゃがないので刺激が少なくてよいと思った。やってみようと思う。 （OT）粘土やクレヨンは座れる。感覚遊びであり、終わりがわかりやすいものは最後までやれる。１つ終わり度に、先生が「できた」とほめると集中できるのではないか。 （保護者）歩く時に手をギュッギュッと握りながら歩くと最後まで手をつなげる。また、遊びの「終わり」を伝えていくのは家でもやっていきたい。 （保健師）母がやっていることはどれも良い方法で関わりがとてもうまい。	①～⑥はのんのんで支援員が実施。⑦⑧は家で母親が実施。

図４－４　支援会議での主な意見（親子支援事業：一部抜粋）

図４－４に示すように、支援会議の参加者で意見交換や質疑応答が行われる中で、情報入力後からの変化（最近の児の状況）が確認され、新たな具体的手がかりが追加され、支援の方向性の微調整、支援案が精緻化されている。会議に参加した保護者が児のほめ方を新たに見いだしている様子も認められている。

図４－５に示すのは、支援会議で検討され確定した支援方法および支援方法の実施をいつ・誰が行うか、である。

支援方法	いつ・誰が
①動いてしまう時は足型を置いて、待つ場所をわかりやすくする。（並ぶ時など） ②活動内容を事前に実物（粘土やクレヨン等）を使って見せ、見通しを持てるようにする。 ③同じ絵本を繰り返し見る機会を増やし、注目する時間を延ばす。 ④全体で説明して入りにくい時は、傍で話して伝えるようにする。 ⑤具体的に行動をほめる。 ⑥１つ１つ遊びが終わった後にほめ、終わりを期待させる。 ⑦（家で）寝る前（刺激が少ない布団の上）に絵本を読む。 ⑧歩く時に手を揺らしたり、歌いながら感覚を入れていく。 **※下線部分は支援会議で追加された支援方法**	①～⑥はのんのんで支援員が実施 ⑦⑧は家で母親が実施

図４－５　支援会議で検討され確定された支援方法

(ｲ) 親子通園施設（にじの学園）

a　支援会議開催状況

表４－９に３名の協力児に関わる支援会議の詳細を示す。支援会議には、事業単位のスタッフに加えて、言語聴覚士や並行利用している児童発達支援事業所の児発管などの関連専門職、さらに協力児の保護者も参加した。支援会議参加者は、事前に医学的診断、健康関連情報、活動と参加、環境因子、支援対象者情報の全ての情報を確認した。また、支援会議において初めに情報共有フォーマットで協力児の状況の共有を行い、その後支援会議資料に基づき協議した。検討項目数は協力児によって異なるが、５～６項目であり、支援会議の所要時間は大凡２時間であった。

表４－９　３名の協力児にかかわる支援会議（親子通園施設）の詳細

	協力児E	協力児F	協力児G
情報収集時期	平成30年７月中旬～8月上旬	平成30年7月中旬～8月中旬	平成30年７月中旬～８月下旬
支援案等会議資料作成	８月上旬	8月下旬	9月上旬
開催時期	平成30年8月17日	平成30年9月7日	平成30年9月13日
参加者	保護者(両親）、保育士、言語聴覚士、保健師、オブザーバー（安達委員長）	保護者(両親）、主治医、児童発達支援事業所児発管、保育士、言語聴覚士、保健師	保護者(母親）、保育士、言語聴覚士、保健師
所要時間	２時間	２時間	２時間
検討項目数	５項目	６項目	５項目

b　会議の進め方

にじの学園では、主治医の医学的診断の情報もあり、支援内容の検討の際に参考にした。その他の進め方は、親子支援事業（早期療育親子支援事業「のんのん」）と同じであった。

オ　支援計画の実施とＩＣＦツールによる情報の再把握と再共有

(ｱ) 親子支援事業（早期療育親子支援事業「のんのん」）

支援計画の基づき、親子支援事業の中での自由遊びや設定療育、家庭におい

て支援方法を実施。11月に支援会議を実施後、親子支援事業が２月までのため、年度内の情報の再把握は実施していない。

(ｲ) 親子通園施設（にじの学園）

第１回支援会議の支援計画に基づき、親子通園施設の中で自由遊びや設定療育、家庭等において、支援会議で確定した支援方法を実施した。支援実施後の協力児の変化を把握し、支援をＰＤＣＡサイクルに載せていくため、情報の再把握・再共有を実施した。

情報の再把握・再共有の手順は、１回目の情報把握・共有と同じである。

カ　第２回支援会議の事前準備

親子通園施設（にじの学園）

(ｱ) 第２回支援会議までの事前準備経過

表４－１０に３名の協力児の１回目と２回目の支援会議の経過を示す。今回は、モデル事業の限られた期間の中で２回の支援会議を開催したため、４ヶ月の期間を措いての開催となっている。

表４－１０　３名の協力児(親子通園施設)の第２回支援会議の経過

	協力児E	協力児F	協力児G
1回目情報収集時期	平成30年７月中旬～8月上旬	平成30年7月中旬～8月中旬	平成30年７月中旬～８月下旬
支援案等会議資料作成	8月上旬	8月下旬	9月上旬
第１回支援会議開催時期	平成30年8月17日	平成30年9月7日	平成30年9月13日
２回目情報収集時期	平成30年10月中旬～11月中旬	平成30年11月下旬～12月下旬	平成30年10月下旬～11月下旬
支援案等会議資料作成	12月上旬	1月上旬	12月中旬
第２回支援会議開催時期	平成30年12月14日	平成31年1月25日	平成30年12月21日
検討項目数	５項目	４項目	４項目

(ｲ) 第１回支援会議後、第２回支援会議に向けた作業

a　第１回支援会議で決定した支援を実施しつつ、ＩＣＦシステムによる情報把握と共有を進める。

b　第２回支援会議に向けて、支援方法を考案した支援検討対象の項目及びそ

の他の項目で、児の状態に変化のあった部分の補足情報を更新する。

c　第２回支援会議資料を作成する。

図４－６に示すのは、第２回支援会議資料である。資料は「１回目会議後の支援実施の経過中に把握された情報と新たな手がかり」と「１回目に立てた支援の実施結果と支援の方向性・修正案」の２つから構成されている。なお、各手順のアルファベットは図４－６の記載欄タイトルおよび図下部の丸囲みアルファベットと対応している。

(a) 支援検討対象項目の補足情報について前回に付加する内容を確認・補足して、今回の補足情報欄に記載する。

(b) 支援検討対象の項目の支援に関連する具体的な手がかりを、その他のＩＣＦデータからリストアップする。

(c) 第１回支援会議で決定した支援の結果を記載する。

(d) 第１回支援会議で決定した支援を実施した結果、当該の支援方法がうまくいく条件、うまくいかない条件を記載する。

(e) 支援の実施およびその期間中の児の状態像の変化によって、第１回目と課題や支援の方向性を修正する場合には、修正した内容を記載する。

(f) 「支援を実施した結果の検討」を反映させた支援の修正案を記載する。

5歳３ヶ月							
1回目会議後の支援実施の経過中に把握された情報と新たな手がかり		1回目に立てた支援の実施結果と次の支援の方向性・修正案					
今回の補足情報	具体的な手がかり	支援の結果	結果の検討	次への課題	支援の方向性	修正案	いつ・誰が
″①場面ごとの言葉を覚え発するが、相手の言葉のオウム返しが主。声の大きさの調整ができず大きな声で要求する。 ②場面ごとの決まった言葉を、ゆっくりはっきり短く伝える。発語が場面に合った時は、保育士が喜ぶ姿を見せる。場面にあった言葉の語頭を知らせる。 ③完全ではないが促しにより言える時もある。自分から「あー」という声を楽しんで出すようになってきた。 話しかけられたら、その場で受け答え（はい、いいえ）が出来る時も増えてきた。 ※下線部は 前回からの付加部分 a	・d115）少しずつ場面ごとの言葉を使おうとする。 ・d133)繰り返し行うことで遊びのフレーズ（トランポリン⇒「ピョンピョン」、フレキサー⇒「ゆらゆら」、お花紙⇒「ゆらゆら」など）が出てきている。 ・d177)好きな遊びに限り意思決定し、写真カードや音声模倣で意思を表す。 ・d230)繰り返し行うことで見通しが持てるようになった。 ・d3150) 安心できる場所や好きな歌は、大人の表情を見ることが増えた。 ・d320)サインより決まった言葉がけのほうが入りやすい。 ・d330)経験が何回もある場面と状況であれば、具体的に言葉で表現できるようになってきた。 ・d550)給食の写真カードを見せると「食べたい」というようになった。 ・d560)お茶を飲む、飲まないの意思をはっきりと表すことが増えた。 ・d129)感覚遊びに集中している時には、簡単な指示も入らない。 ・d137a)新しいものには戸惑い、行動を起こせなかったり大きな声がでる。 ・d137b)要求が叶わないと怒り、気持ちを引きずるようになった。場面を変える事で気持ちが変わる。 b	結果としての事実 ①繰り返し楽しみながらやることで、見通しが持て、場面ごとのフレーズ（「ピョンピョン」「ゆらゆら」「パタパタ」）を使おうとするようになった。 ②③好きな遊びや給食では写真カードを見せると意思を表す。 c	結果からまとめられた支援がうまくいく条件。うまくいかない条件。 ①うまくいく条件：好きな遊び、繰り返す、決まった言葉がけ ②うまくいかない条件：感覚遊びに集中している時、新しいもの、新しいこと、要求が叶わない時 d	第1回目と課題や支援の方向性が変わったら記入する。 ・要求が強い時は、思いを言葉にするようになったが、曖昧な時もある。 e	・思いを自分なりの方法で表現する。	結果の検討を反映させた支援案の改 ①毎日の活動で、挨拶や返事を楽しみながら行っていく。 ②新しいことには言葉に合わせ絵・写真カードなどを利用し、見通しが持てるようにする。 ③好きな歌や言葉のフレーズを利用し、大人に働きかける方法を知らせる。 f	

図４－６　第２回支援会議資料（親子通園施設）

キ　第２回支援会議の開催および支援計画の検討　親子通園施設（にじの学園）

(ｱ) 支援会議開催状況

表４－１１　３名の協力児の第２回支援会議開催状況（親子通園施設）

	協力児E	協力児F	協力児G
第２回支援会議開催時期	平成30年12月14日	平成31年1月25日	平成30年12月21日
参加者	保護者(両親）、保育士、言語聴覚士、臨床心理士、作業療法士、保健師	保護者(両親）、児童発達支援事業所児発管、保育士、臨床心理士、作業療法士、保健師	保護者(母親）、保育士、作業療法士、保健師
所要時間	２時間	２時間	２時間
検討項目数	５項目	４項目	４項目

(ｲ) 支援計画の検討プロセス

図４－７に示すのは、第２回支援会議における支援計画の検討プロセスである。第２回支援会議では、第１回支援会議の支援方法考案の振り返りから始まり、現在の協力児の状態像を確認しつつ、会議参加者の意見交換を通じて、支援計画を検討した。なお、各プロセスに付した番号は図４－７の丸囲み番号と対応している。

a　第１回目の支援会議での課題を確認する。(①)

b　第１回目の支援方法を確認する。(②)

c　第１回目に立てた支援の結果について確認する。(③)

d　それぞれの機関や支援者より、支援の結果の追加情報などを共有する。支援の結果についての疑問点について確認をする。(④)

e　支援の結果からまとめられた、うまくいく条件、うまくいかない条件を共有する。(⑤)

f　うまくいく条件､うまくいかない条件の追加項目があるか検討する｡(⑥)

g　提出された支援案について、案の修正や追加等を検討する。(⑦)(⑧)

① 支援会議資料(一部抜粋)

	1回目の会議				
項目タイトル	選択理由	課題	支援の方向性	支援方法	いつ・誰が
d530)排泄、生理のケア	・家庭では、母の促しにより排尿できる時がある。 家庭以外の場所でも排泄できるようになって欲しい。	・家以外のトイレに抵抗を示す。 ・安心しないと排泄できない。 1	・母と一緒にトイレに行く、座る、と段階付け行っていく。	①プラスの言葉がけをし、根気良くトイレに誘う。 ②言葉をフレーズに乗せて伝える。 ③言葉がけに合わせ、写真カードやマカトン法を見せていく。 ④排泄ができた時は、大人が喜ぶ姿を見せる。 ⑤歌や、音の出る絵本、アプリで画像を見せる。 2	①～⑤ にじの学園 母

(A) 1回目から2回目までの情報把握の内容		(B) 1回目に立てた支援の実施結果等(にじでの検討案)				(A)と(B)より
今回の補足情報	具体的な手がかり	支援の結果	結果の検討	次への課題	支援の方向性	修正案
①園では排尿のサイン(足をクロスしたりソワソワする)があるが、トイレに行っても出さずに我慢し、家で漏らしてしまう。 ②トイレに行く他児の動きを目で追う姿が出てきたため、言葉がけに合わせ、マカトン法を使用しトイレに誘う。 ③トランポリンでジャンプをしたことがきっかけで園で排尿できた。それを機に数回排尿が見られた。家ではトレーニングパンツの中で出てしまう。パンツが濡れたのが嫌で、その場で脱ぐ。 これらの情報は、支援会議で修正案を議論し、確定していく経過(6→7)の中で参考として活用している。	d230) 繰り返し行うことで見通しが持てる。 d115) 少しずつ場面ごとの言葉を使おうとする。 d320)マカトンなどのサインより決まった言葉がけのが入りやすい。 d720)少しずつ関係が深まってきて気持ちを許す大人が増えた。 d260)歌や音楽が好きで注目できる。	①～③見通しが持てると写真カードを見せなくても、保育士の言葉がけとマカトンサインが入り、母に促されトイレに行くことができるようになった。 ④促されトイレに行くと、お腹に力を入れて出そうとする事が増えた。母に褒められるとニヤッと笑みが出た。ズボンの上げ下ろしは、取り掛かりの言葉がけで行うことができる。 ⑤アプリは使用していない。 3	**①うまくいく条件**：フレーズに乗せた言葉がけ。安心できる人や場所。 **②うまくいかない条件**：騒がしい場所。気を許していない人。音や、物、景色など、好きな感覚刺激が入ってきた時。泣き声などの不快な音刺激。 5	・排尿できる時とできない時がある。 下線部の⑤と⑥は支援会議での議論を経て付加された支援修正案	・安心できる母や保育士とトイレに行き排尿しようとする。	①プラスの言葉がけをし、根気良くトイレに誘う。 ②言葉をフレーズに乗せて伝える。 ③言葉がけに合わせ、マカトン法を見せていく。 ④排泄ができた時は、静かに児の反応を待ちほめる。 ⑤排尿のサインを見逃さずトイレに連れて行く。 ⑥静かなトイレを選び、連れていく。 ⑦排便時、腕をささえる机などを用意する。 ⑧便座カバーと足台を使用する。 8

② 支援会議での主な意見

情報入力後からの変化	具体的な手がかりについて	支援の結果について	結果の検討について	修正案について
・にじの学園でも成功するようになった。 ・排便時は便秘の時は成功したが、他は難しい。 ・排便時は家ではよつばいになり行っている。 ・にじの便座が冷たいのでお尻を浮かして座る。 この情報は、支援会議で修正案を議論し、確定していく経過(6→7)の中で参考として活用している。		・排尿のタイミングは?⇒決まっていない。冷えると細切れにでる。 ・水分量は?⇒きまっていない。日によって違う。 ・にじの学園でのトイレはなるべく他児のいない静かなトイレに連れていく。 ・トイレでの排便様子は?⇒便座に手を押し当てて力を入れている。 4	**うまくいく条件の追加**：静かなトイレ **うまくいかない条件の追加**：便座の冷たさ 6	(心理士) にじの学園ではがんばっていて、家での本児とは違うと思う。緊張した場面だと成功してるのではないか。まずは、にじの学園でできているのをほめていくとよい。 (家族) 家では他の兄弟がいて、騒がしい環境というのもできない一因でもあると思う。 (にじ) にじでは子どもの少ないトイレに連れていくようにする。 (OT)筋肉をたくさん使うと便を出せることはわかってきている。出す感覚はつかめてきている。排尿がでたら本児からアクションが出るまで待つとよい。お腹に力を入れやすくするために、腕をささえる机や足台などがあるとよい。 (保育士) 便座にクッションシートを張ってみようと思う。家でも同様のものがはれるといい。 (家族) シートの色や柄はどのようなものがよいか。 (ST)柄に気をとられないようにするため、シンプルなものがよい。 7

図４－７　第２回支援会議の資料及び主な意見の抜粋

(5) モデル事業の成果を検証する方法

ア　ＩＣＦ情報把握・共有システムの活用にかかわる質問票

ＩＣＦ情報把握･共有システムに対する早期療育事業における活用の有用性や実践支援へのインパクトを評価することを目的として､事業参加者を対象に質問票を実施した。以下、今回の事業で実施した質問票を図４－８から図４－１３ｂに示す。

ICF 情報把握・共有シートは、主に活動と参加シート、環境因子シートを活用したため、これらに対応する質問票を実施している。なお情報把握・共有シートの質問票には記入者用と閲覧者用があるが、以下に示すのは記入者用である。閲覧者用の質問票では、記入の労力に関する質問を伏せているが、その他の質問項目は記入者用と同じである。

A0-1.（t-leader）「支援チーム形成・パート分担・入力チェック」質問紙　（チームリーダー用）

回答者記号（　　）

＞＞回答前に確認して下さい＜＜

本評価シートにかかわる支援チーム形成は　□ 初回評価　□ 再評価　のチーム形成　です。

1．あなたの役割と立場について該当する□にチェック☑して下さい。

1）支援チーム内の役割は　□チームリーダー　です。　（確認のためチェック願います）

2）立場は　当事者　：　□家族　□本人

支援者　：　□医師　□コメディカル　□福祉職　□教育職　□その他

（支援者の方は職名(医師は診療科)を記載ください：　　）

2．どんな人たちが支援に携わっているか、その人たちの所属や職種を把握する労力について

該当する□にチェック☑して下さい。

少ない　□ ----- □ ----- □ ----- □ ----- □　多い

3．「活動と参加」および「環境因子」の入力パート分担の検討と入力の依頼に要した労力について

該当する□にチェック☑して下さい。

1）「活動と参加」シートについて

a)分担検討　少ない　□ ----- □ ----- □ ----- □ ----- □　多い

b)入力依頼　少ない　□ ----- □ ----- □ ----- □ ----- □　多い

c)検討・依頼をしていなければその理由　（　　）

2）「環境因子」シートについて

a)分担検討　少ない　□ ----- □ ----- □ ----- □ ----- □　多い

b)入力依頼　少ない　□ ----- □ ----- □ ----- □ ----- □　多い

c)検討・依頼をしていなければその理由　（　　）

4．情報入力方法（独力 あるいは インタビュー）毎の人数について

1）あなた(リーダー)を含めた支援チームの人数を記入ください。　（　　）名

2）支援チームメンバーのうち、

a）情報入力をすべて委任する形で依頼した人たちの人数。　（　　）名

b）リーダーがインタビューしながら情報入力した人たちの人数。　（　　）名

5．情報入力完了後の入力情報チェックについて　**(注：分担入力がすべて完了した後に回答して下さい)**

1）個人情報の混在など不適切情報のチェックに要した労力について。

少ない　□ ----- □ ----- □ ----- □ ----- □　多い

2）「労力が多い」と回答された方、その理由をお書きください。

図４－８　支援チーム形成・パート分担・入力チェック　チームリーダー用

A0-2.（t-member）「支援チーム形成・パート分担・入力チェック」質問紙　（チームメンバー用）

回答者記号（　　）

>>回答前に確認して下さい<<

a）本評価シートにかかわる支援チーム形成は　□ 初回評価　□ 再評価　のチーム形成　です。

b）情報記入の方法は　□自分で記入した　□インタビューに答えた。

1．あなたの役割と立場について該当する□にチェック☑して下さい。

1）支援チーム内の役割は　□チームメンバー　です。　（確認のためチェック願います）

2）立場は　当事者　：　□家族　□本人

支援者　：　□医師　□コメディカル　□福祉職　□教育職　□その他

（支援者の方は職名(医師は診療科)を記載ください：　　）

2．支援チーム全体で支援対象児者の支援関連情報を把握・共有することについて

1）支援チームをリーダーとメンバーで構成することは連携支援の実現に効果的だと思いますか？　該当する□にチェック☑して下さい。

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

2）支援チームで分担して支援関連情報を把握することは連携支援の実現に効果的だと思いますか？　該当する□にチェック☑して下さい。

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

3．「活動と参加」および「環境因子」の入力パート分担について該当する□にチェック☑して下さい。

1）「活動と参加」であなたが分担した項目は自分の経験や専門にあっていると思いますか？

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

2）「環境因子」であなたが分担した項目は自分の経験や専門にあっていると思いますか？

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

3）情報入力の方法（回答前確認b）で回答した方法）は自分にあっていると思いますか？

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

4．個人情報に留意しながら情報を入力することについて

1a）個人情報の混入などを回避しながらの入力作業はかなり労力を使いましたか？

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

1b）「そう思う・多少そう思う」と回答された方へ。個人情報の混入を回避することが難しいと感じた入力場面を具体的に記載してください。

2）リーダーが個人情報等の不適切情報の最終チェックをすることは必要不可欠だと思いますか？

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

図４－９　支援チーム形成・パート分担・入力チェック　チームメンバー用

（シート記入者用）

A 3rev4.「活動と参加」シートの記入者への質問票

回答者記号（　　）

＞＞回答前に確認・チェック☑して下さい＜＜

a）情報記入の方法は　□自分で記入した　□インタビューに答えた。

b）わたし（回答者）が実施した記入タイプは　□ 初回実施　□ 再実施　です。

(注：質問２はチェックに応じて、初回実施と再実施の両方またはいずれかに回答して下さい)

1．あなたの役割と立場について該当する□にチェック☑して下さい。

1）支援チーム内の役割は　□チームリーダー　□チームメンバー

2）立場は　当事者　：　□家族　□本人

支援者　：　□医師　□コメディカル　□福祉職　□教育職　□その他

（支援者の方は職名(医師は診療科)を記載ください：　　）

2．「活動と参加」シートの**担当部分の記入(あるいはインタビューへの回答)**にかかった労力について該当する□にチェック☑ 願います。

1）初回実施と再実施にどの程度の労力が必要だったかを５段階(少ない～多い)で評価して下さい。

a)初回実施　少ない　□ ----- □ ----- □ ----- □ ----- □　多い

b)再実施　少ない　□ ----- □ ----- □ ----- □ ----- □　多い

3．「活動と参加」シート全体による情報の把握について該当する□をチェック☑して下さい。

(注：回答者がご本人の場合には、「対象児者」を括弧内の「自分自身」と読み替えてください)

1）本シートの活用で改めて気づいた「対象児者(自分自身)ができていること」があった。

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

2）本シートの活用で改めて気づいた「対象児者(自分自身)ができていないこと」があった。

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

3）本シートの活用で改めて気づいた「対象児者(自分自身)に有効な支援」があった。

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

4）本シートの活用で改めて気づいた「対象児者(自分自身)に必要な支援」があった。

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

5）本シートの活用で改めて気づいた「対象児者(自分自身)が身につけるべきスキル」があった。

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

6）本シートによって把握された情報全体によって、現在および今後の支援計画はさらによい支援計画となっていく。

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

⇩

裏面の質問に続けてお答え下さい

図４－１０ａ　「活動と参加」シートの記入者への質問票（表）

7) 前の質問（6）で「そう思う」「多少そう思う」と回答された方にお尋ねします。
どのような点で現在および今後の支援計画がさらによくなっていくと思うか、具体的に記載下さい。

8) 支援に携わる人たちが、シートで把握された情報全体を共有すれば、多職種連携による支援が効果的に実現されていく。

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

9) 前の質問（8）で「そう思う」「多少そう思う」と回答された方にお尋ねします。
多職種連携による支援が効果的に実現されていくと思う理由を具体的に記載下さい。

10) 本シートによる情報把握と引き継ぎが早期から継続されれば、二次障害につながる適応不全を事前に回避していけるだろう。

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

11) 前の質問（10）で「そう思う」「多少そう思う」と回答された方にお尋ねします。
適応不全の事前回避がどのような形で実現されていくと思うか、具体的に記載下さい。

12) 本シート全体による情報の把握は、担当部分の記入(あるいはインタビューへの回答)に要した労力に見合うものでしたか？

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

13) 本シート全体による情報把握は発達障害への気づきにつながると思いますか？

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

14) 本シートの活用に際して把握された「改善すべき課題」があれば、具体的に記載下さい。

図４－１０ｂ　「活動と参加」シートの記入者への質問票（裏）

（シート記入者用）

A 4 rev4.「環境因子」シートの記入者への質問票

回答者記号（　　）

＞＞回答前に確認・チェック☑して下さい＜＜

a）情報記入の方法は　□自分で記入した　□インタビューに答えた。

b）わたし（回答者）が実施した記入タイプは　□ 初回実施　□ 再実施　です。

（注：質問２はチェックに応じて、初回実施と再実施の両方またはいずれかに回答して下さい）

1．あなたの役割と立場について該当する□にチェック☑して下さい。

1）支援チーム内の役割は　□チームリーダー　□チームメンバー

2）立場は　当事者　：　□家族　□本人

支援者　：　□医師　□コメディカル　□福祉職　□教育職　□その他

（支援者の方は職名(医師は診療科)を記載ください：　　）

2．「環境因子」シートの**担当部分の記入(あるいはインタビューへの回答)**にかかった労力について該当する□にチェック☑ 願います。

1）初回実施と再実施にどの程度の労力が必要だったかを５段階で[少ない～多い]評価して下さい。

a)初回実施　少ない　□ ----- □ ----- □ ----- □ ----- □　多い

b)再実施　少ない　□ ----- □ ----- □ ----- □ ----- □　多い

3．「環境因子」シート全体による情報の把握について該当する□をチェック☑して下さい。

(注：回答者がご本人の場合には、「対象児者」を括弧内の「自分自身」と読み替えてください)

1) 本シートの活用で改めて気づいた「対象児者(自分自身)の生活に影響する環境因子」があった。

a)「周囲の人たちにかかわる環境因子」について

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

b)「製品と用具、自然環境、サービスにかかわる環境因子」について

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

2) 本シートの活用で改めて気づいた「対象児者(自分自身)の生活しやすさにつながる環境因子」があった。

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

3) 本シートの活用で改めて気づいた「対象児者(自分自身)の生活しづらさにつながる環境因子」があった。

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

4) 本シートの活用で改めて気づいた「対象児者(自分自身)に必要な環境調整支援」があった。

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

5) 本シートによって把握された情報全体によって、現在および今後の支援計画はさらによい支援計画となっていく。

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

⇩

裏面の質問に続けてお答え下さい

図４－１１ａ　「環境因子」シートの記入者への質問票（表）

6）前の質問（5）で「そう思う」「多少そう思う」と回答された方にお尋ねします。
どのような点で現在および今後の支援計画がさらによくなっていくと思うか、具体的に記載下さい。

7）支援に携わる人たちが本シートで把握された情報全体を共有すれば多職種連携による
支援が効果的に実現されていく。

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

8）前の質問（7）で「そう思う」「多少そう思う」と回答された方にお尋ねします。
多職種連携による支援が効果的に実現されていくと思う理由を具体的に記載下さい。

9）本シートによる情報把握と引き継ぎが早期から継続されれば、二次障害につながる適応不全を
事前に回避していけるだろう。

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

10）前の質問（11）で「そう思う」「多少そう思う」と回答された方にお尋ねします。
適応不全の事前回避がどのような形で実現されていくと思うか、具体的に記載下さい。

11）本シート全体による情報の把握は、担当部分の記入(あるいはインタビューへの回答)に要した
労力に見合うものでしたか？

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

12）本シート全体による情報把握は発達障害への気づきにつながると思いますか？

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

13）本シートの活用に際して把握された「改善すべき課題」があれば、具体的に記載下さい。

図４－１１ｂ　「環境因子」シートの記入者への質問票（裏）

A7rev2.（team 共通）「支援計画検討会議の質・チーム協働」の質問紙　（チームリーダー・メンバー共通）

回答者記号（　　）

＞＞回答前に確認して下さい＜＜

本評価シートにかかわる支援チーム形成は　□ 初回評価　□ 再評価　のチーム形成　です。

1．あなたの役割と立場について該当する□にチェック☑して下さい。

1）支援チーム内の役割は　□チームリーダー　□チームメンバー　です。

2）立場は　当事者　：　□家族　□本人

支援者　：　□医師　□コメディカル　□福祉職　□教育職　□その他

（支援者の方は職名(医師は診療科)を記載ください：　　）

2．今回の支援チームで実施した支援会議におけるチーム協働について

1）あなたは自分の意見を十分に言えましたか？

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

2）他の人たちはあなたの意見に十分に耳を傾けてくれましたか？

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

3）同意できない意見に対してもお互い十分に耳を傾けていましたか？

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

4）ぶつかり合いや意見の食い違いを参加者全員で解消し、よい形にまとめあげることができていましたか？

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

5）支援の方向性やアイデアについて、特定の人たちが自分たちの意見に頑なにこだわるということがありましたか？

□かなりあった　□多少あった　□あまりなかった　□なかった

6）支援方針の決定に、特定の人たちが強い影響力を持っていましたか？

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

7）支援計画実施のための役割分担はチーム全員の合意の上で決定されましたか？

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

8）本人・保護者・支援者にとって有用で建設的な話し合いが参加者全員でできましたか？

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

9）本システムを活用することによって支援会議の質が活用前よりも向上したと思いますか？

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

3．支援計画の内容について

1）支援計画は具体的な情報把握に基づくものでしたか？

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

2）支援計画は支援対象者の実態に合致したものでしたか？

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

3）支援計画は支援対象児者の支援ニーズを包括的に捉えたものでしたか？

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

4）支援計画は支援対象である当事者・家族の納得を得られるものでしたか？

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

5）本システムを活用することによって支援計画の内容が活用前よりも向上したと思いますか？

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

図４－１２　「支援計画検討会議の質・チーム協働」の質問票

A 8rev2.（team 共通）「支援計画の実行と結果」の質問紙

（チームリーダー・メンバー共通）

回答者記号（　　）

>>回答前に確認して下さい<<

本評価シートにかかわる支援チーム形成は　□ 初回評価　□ 再評価　のチーム形成　です。

1．あなたの役割と立場について該当する□にチェック☑して下さい。

1）支援チーム内の役割は　□チームリーダー　□チームメンバー　です。

2）立場は　当事者　：　□家族　□本人

支援者　：　□医師　□コメディカル　□福祉職　□教育職　□その他

（支援者の方は職名(医師は診療科)を記載ください：　　）

2．支援計画の実行結果について

1a）あなたが分担した支援計画の実行によって、目的の支援課題は解決したと思いますか？

□解決した　□多少解決した　□あまり解決しなかった　□解決しなかった

1b）「あまり解決しなかった・解決しなかった」と回答された方へ。

解決しなかった理由だと思われることを具体的に記載ください。

2a）支援計画全体の実行によって支援対象児者の生活は改善したと思いますか？

□改善した　□多少改善した　□あまり改善しなかった　□改善しなかった

2b）「あまり改善しなかった・改善しなかった」と回答された方へ。

改善しなかった理由だと思われることを具体的に記載ください。

3a）支援計画は支援チーム全体にとって実行可能なものでしたか？

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

3b）「あまりそう思わない・そう思わない」と回答された方へ

実行可能ではないと思った理由を具体的に記載して下さい。

4a）あなたが分担した支援計画の役割はあなたにとって実行可能なものでしたか？

□そう思う　□多少そう思う　□あまりそう思わない　□そう思わない

4b）「あまりそう思わない・そう思わない」と回答された方へ

実行可能ではないと思った理由を具体的に記載して下さい。

⇨ **裏面の質問に続けてお答え下さい**

図４－１３ａ　「支援計画の実行と結果」の質問票（表）

5 a）設問４a）で「あまりそう思わない・そう思わない」と回答された方へ。

支援計画の役割実行が難しくなった際に、チームの他のメンバーに相談したり助言を求めたりしましたか？

相談したり助言を求めたり　→　□した　　□しなかった

5 b）「相談や助言を求めたりしなかった」と回答された方へ

その理由を具体的に記載して下さい。

6）本システムを活用することによって支援計画の実行におけるチーム連携は活用前よりも向上しましたか？

□そう思う　　□多少そう思う　　□あまりそう思わない　　□そう思わない

7）本システムを活用することによって支援計画の全体構成と役割分担は活用前よりも明確になりましたか？

□そう思う　　□多少そう思う　　□あまりそう思わない　　□そう思わない

図４－１３ｂ　「支援計画の実行と結果」の質問票（裏）

イ　事後アンケート（事業参加者）

事業に参加した支援者および保護者に対して、事業全体の経過を振り返っての事業に対する評価アンケートを実施した。アンケートは支援者用と保護者用を準備し、それぞれ、事業完了後の２月中旬から３月初旬に回答を求めた。図４－１４ａ、ｂに支援者用のアンケートを、図４―１５ａ、ｂに保護者用のアンケートを示す。

支援者用

ICF 情報把握・共有ツールを活用した支援の振り返りアンケート

ICF ツールを活用して子どもたちの支援を行ってきた経験を振り返って、以下の質問項目にお答えください。

１．児の評価と支援に対する捉え方について（あてはまる□にチェック☑願います）

Ｑ１）子どもの日常的で具体的な情報に基づいて支援を考えることの大切さがわかった。

□そう思う　-----　□少し思う　-----　□あまり思わない　-----　□思わない

Ｑ２）場面や条件で子どもの様子が異なることの確認と共有が、支援の検討に大切だと感じた。

□そう思う　-----　□少し思う　-----　□あまり思わない　-----　□思わない

Ｑ３）子どもへの働きかけだけでなく、場面や条件を工夫することの大切さも大きいと思った。

□そう思う　-----　□少し思う　-----　□あまり思わない　-----　□思わない

Ｑ４）個々の支援を検討する上で、子どもの全体像を捉えて考えることが大切だと思った。

□そう思う　-----　□少し思う　-----　□あまり思わない　-----　□思わない

Ｑ５）課題項目の情報と関連する手がかりの組合せで支援を計画していく方法がわかった。

□そう思う　-----　□少し思う　-----　□あまり思わない　-----　□思わない

２．支援者チームについて（あてはまる□にチェック☑願います）

Ｑ１）支援者チームで児の状態や支援について話し合うことが増えた。

□そう思う　-----　□少し思う　-----　□あまり思わない　-----　□思わない

Ｑ２）支援者間で児の話をするときに、より具体的な話ができるようになった。

□そう思う　-----　□少し思う　-----　□あまり思わない　-----　□思わない

図４－１４ａ　ICF 情報共有・ツールを活用した支援の振り返りアンケート（支援者用；表）

Q３）児の状態に対する思い込みや想像で話すことが少なくなった。

□そう思う　-----　□少し思う　-----　□あまり思わない　-----　□思わない

Q４）他の支援者の話を聴くときに、根拠となるエピソードに留意するようになった。

□そう思う　-----　□少し思う　-----　□あまり思わない　-----　□思わない

Q５）互いの見立てが異なったときに、児の状態に影響する場面や条件を探すようになった

□そう思う　-----　□少し思う　-----　□あまり思わない　-----　□思わない

３．保護者の支援会議への参加について（あてはまる□にチェック☑願います）

Q１）保護者を交えて支援会議を実施することの有用性を実感した。

□そう思う　-----　□少し思う　-----　□あまり思わない　-----　□思わない

Q２）ICF システムの情報把握は保護者の子ども理解を深めると思う、

□そう思う　-----　□少し思う　-----　□あまり思わない　-----　□思わない

Q３）保護者と支援者での子どもの共通理解が、以前より深まった。

□そう思う　-----　□少し思う　-----　□あまり思わない　-----　□思わない

Q４）以前より、子どもの支援方法を保護者に具体的に伝えることができた。

□そう思う　-----　□少し思う　-----　□あまり思わない　-----　□思わない

Q５）ICF を使った支援会議では、保護者の参加姿勢が以前よりも積極的だった。

□そう思う　-----　□少し思う　-----　□あまり思わない　-----　□思わない

図４－１４ｂ　ICF 情報共有・ツールを活用した支援の振り返りアンケート（支援者用；裏）

保護者用

ICF 情報把握･共有ツールを活用した支援の振り返りアンケート

ICF ツールを活用した支援に参加協力された経験を振り返って、以下の質問項目にお答えください。

※※※ すべての質問についてあてはまる□にチェック☑をして下さい。 ※※※

1．子どもとのかかわりについて（支援に参加協力する前とくらべて・・・）

Q１）子どもを支援する方法が具体的にわかった。

□そう思う ----- □少し思う ----- □あまり思わない ----- □思わない

Q２）子どもの気持ちを考えてかかわるようになった。

□そう思う ----- □少し思う ----- □あまり思わない ----- □思わない

Q３）子どもを叱ることが少なくなった。

□そう思う ----- □少し思う ----- □あまり思わない ----- □思わない

Q４）子どもを褒めることが多くなった。

□そう思う ----- □少し思う ----- □あまり思わない ----- □思わない

Q５）子どもを変えるより、場面や条件を工夫しようと考えるようになった。

□そう思う ----- □少し思う ----- □あまり思わない ----- □思わない

Q６）子どもがよりよく育つための場面や条件の作り方が少しわかるようになった。

□そう思う ----- □少し思う ----- □あまり思わない ----- □思わない

Q７）子どもの苦手さやできないことの理由を考えるようになった。

□そう思う ----- □少し思う ----- □あまり思わない ----- □思わない

2．自分自身について（支援に参加協力する前とくらべて・・・）

Q１）子どもの気持ちがなんとなくわかると思えることが増えた

□そう思う ----- □少し思う ----- □あまり思わない ----- □思わない

図４－１５ａ　ICF 情報共有・ツールを活用した支援の振り返りアンケート（保護者用；表）

Q２）子どもと一緒にいて楽しいと感じることが増えた。

□そう思う　-----　□少し思う　-----　□あまり思わない　-----　□思わない

Q３）子育てに少し自信が持てるようになった。

□そう思う　-----　□少し思う　-----　□あまり思わない　-----　□思わない

Q４）子育てに前向きになれ、子どもと向き合えるようになった。

□そう思う　-----　□少し思う　-----　□あまり思わない　-----　□思わない

Q５）子育てでイライラすることが少なくなった。

□そう思う　-----　□少し思う　-----　□あまり思わない　-----　□思わない

Q５）子どものことを、いい子だな、大好きだなと思えることが増えた。

□そう思う　-----　□少し思う　-----　□あまり思わない　-----　□思わない

Q５）子どもに必要な支援について自然な気持ちで考えられるようになった。

□そう思う　-----　□少し思う　-----　□あまり思わない　-----　□思わない

３．家族について（支援に参加協力する前とくらべて・・・）

Q１）支援会議で話された内容を、家族にも伝えたいと思うようになった。

□そう思う　-----　□少し思う　-----　□あまり思わない　-----　□思わない

Q２）支援会議で話された内容を、家族に伝えることが増えた。

□そう思う　-----　□少し思う　-----　□あまり思わない　-----　□思わない

Q３）子どもについて、家族と前向きに話せるようになった。

□そう思う　-----　□少し思う　-----　□あまり思わない　-----　□思わない

図４－１５ｂ　ICF 情報共有・ツールを活用した支援の振り返りアンケート（保護者用；裏）

ウ　ＩＣＦ情報把握・共有システム活用前後での支援計画の比較（企画推進委員）

ＩＣＦ情報把握・共有システムを活用する前後で、各事業実施単位の個別支援計画が変化したか否かを検証するために、企画推進委員（企画推進委員長は除く）を対象にアンケートを実施した。図４―１６に親子支援事業の個別支援計画にかかわるアンケートを示す。

企画推進委員

Type A

ICF 情報把握・共有ツールを活用した支援の振り返りアンケート

ICF ツールを活用する前の支援計画と活用した後の支援計画を比較して、以下の質問項目にお答えください。

1．短期目標の記載について

Ｑ１）活用前と比べて活用後の記載内容は、より具体的になったと思うか？

□強く思う --- □思う --- □少し思う --- □あまり思わない --- □思わない --- □まったく思わない

Ｑ２）活用前と比べて活用後の記載内容は、それに基づいて支援者が同じ内容を共通に思い描けるものになったと思うか？

□強く思う --- □思う --- □少し思う --- □あまり思わない --- □思わない --- □まったく思わない

Ｑ３）活用前と比べて活用後の記載内容は、支援の効果を評価しやすい内容になったと思うか？

□強く思う --- □思う --- □少し思う --- □あまり思わない --- □思わない --- □まったく思わない

2．支援方針（のんのん）の記載内容について

Ｑ１）活用前と比べて活用後の記載内容は、より具体的になったと思うか？

□強く思う --- □思う --- □少し思う --- □あまり思わない --- □思わない --- □まったく思わない

Ｑ２）活用前と比べて活用後の記載内容は、それに基づいて支援者が同じ内容を共通に思い描けるものになったと思うか？

□強く思う --- □思う --- □少し思う --- □あまり思わない --- □思わない --- □まったく思わない

Ｑ３）活用前と比べて活用後の記載内容は、生活適応の改善により役立つものになったと思うか？

□強く思う --- □思う --- □少し思う --- □あまり思わない --- □思わない --- □まったく思わない

Ｑ４）活用前と比べて活用後の記載内容は、支援の効果を評価しやすい内容になったと思うか？

□強く思う --- □思う --- □少し思う --- □あまり思わない --- □思わない --- □まったく思わない

図４－１６個別支援計画の変化に関する質問票Ａ（企画・推進委員用）

アンケートの構成は、親子支援事業（のんのん）で参加した協力児の活用前後の個別支援計画を閲覧した後、図４―１６のアンケート票に回答し、続いて親子

通園施設（にじの学園）で参加した協力児の活用前後の個別支援計画を閲覧した後、図４－１７のアンケート票に回答した。このアンケート票には、設問３として、ＩＣＦ情報把握・共有システムの活用について２つの質問を付記している。

企画推進委員

Type B

ICF 情報把握・共有ツールを活用した支援の振り返りアンケート

ICF ツールを活用する前の支援計画と活用した後の支援計画を比較して、以下の質問項目にお答えください。

1．短期目標の記載について

Ｑ１）活用前と比べて活用後の記載内容は、より具体的になったと思うか？

□強く思う --- □思う --- □少し思う --- □あまり思わない --- □思わない --- □まったく思わない

Ｑ２）活用前と比べて活用後の記載内容は、それに基づいて支援者が同じ内容を共通に思い描けるものになったと思うか？

□強く思う --- □思う --- □少し思う --- □あまり思わない --- □思わない --- □まったく思わない

Ｑ３）活用前と比べて活用後の記載内容は、支援の効果を評価しやすい内容になったと思うか？

□強く思う --- □思う --- □少し思う --- □あまり思わない --- □思わない --- □まったく思わない

2．具体的な支援方針（にじ）の記載内容について

Ｑ１）活用前と比べて活用後の記載内容は、より具体的になったと思うか？

□強く思う --- □思う --- □少し思う --- □あまり思わない --- □思わない --- □まったく思わない

Ｑ２）活用前と比べて活用後の記載内容は、それに基づいて支援者が同じ内容を共通に思い描けるものになったと思うか？

□強く思う --- □思う --- □少し思う --- □あまり思わない --- □思わない --- □まったく思わない

Ｑ３）活用前と比べて活用後の記載内容は、生活適応の改善により役立つものになったと思うか？

□強く思う --- □思う --- □少し思う --- □あまり思わない --- □思わない --- □まったく思わない

Ｑ４）活用前と比べて活用後の記載内容は、支援の効果を評価しやすい内容になったと思うか？

□強く思う --- □思う --- □少し思う --- □あまり思わない --- □思わない --- □まったく思わない

注意！

本システムの活用について回答下さい。

支援計画の比較による回答ではなく、

3．ICF 情報把握・共有システムの活用について

（企画推進委員会で報告されてきた本事業の経過と成果に基づいてご回答下さい）

Ｑ１）本システムの活用で早期からの発達支援が縦と横につながりやすくなると思うか？

□強く思う --- □思う --- □少し思う --- □あまり思わない --- □思わない --- □まったく思わない

Ｑ２）本システムを継続的に活用すれば多職種の支援連携が実現しやすくなると思うか？

□強く思う --- □思う --- □少し思う --- □あまり思わない --- □思わない --- □まったく思わない

図４－１７　個別支援計画の変化に関する質問票Ｂ（企画・推進委員用）

エ　ＩＣＦツールを活用した支援経過で得られた参加者の感想

(ｱ) 支援者に対し、支援会議後に自由記述でのアンケートを実施した。

内容は図４－１８に示す４項目（①-1～3 及び②-1）である。

①支援会議に参加して新たな発見はありましたか。

ア　子どもに関すること（①-1）

イ　保護者に関すること（①-2）

ウ　その他（①-3）

②ICF を活用したことで、その後の自分の支援に変化がありましたか。（②-1）

・なし

・あり

変化の具体的内容

図４－１８　支援会議の自由記述アンケート（支援者）

(ｲ) 保護者に対し、支援会議後に自由記述でのアンケートを実施した。

内容は図４－１９に示す４項目（①-1～3 及び②-1）である。

①支援会議に参加して新たな発見はありましたか。

ア　子どもさんに関すること（①-1）

イ　ご自身も含めた家族に関すること（①-2）

ウ　その他（①-3）

②支援会議に参加後、子どもさんに関することで、ご自身の気持ちに変化がありましたか。（②-1）

・なし

・あり：

具体的内容

図４－１９　支援会議の自由記述アンケート（保護者）

オ　企画・推進委員の評価（企画推進委員会での発言から）

第１回から第５回までの企画･推進委員会で議論された主な意見を会議の音声記録から抜粋した。

5　モデル事業の成果と考察

（１）ＩＣＦ情報把握・共有システムの活用にかかわる質問票の結果

以下、実施した質問票の結果を示す。

ア　支援チーム形成・パート分担・入力チェックの質問票

（ｱ）チームリーダー用質問票

チームリーダーは親子支援事業（のんのん）で４名、親子通園施設（にじの学園）で３名と少数であったため、両事業単位を合わせた結果を表５－１に示す。統計値は各回答選択肢の度数と回答数のみとした。

ａ　両事業実施単位全体の結果

表５－１　支援チーム形成･パート分担（ﾁｰﾑﾘｰﾀﾞｰ用）質問票　両支援事業単位回答結果まとめ

支援チームの形成にかかる労力について						回答者：のんのん4名、にじ3名					
選択肢　>>	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	回答数
少ない	□	□	□	□	□ 多い	度数					
2　支援に携わっている人たちの所属や職種を把握することにかかった労力は？						4	2	1	0	0	7
3(1a)「活動と参加シート」の分担検討にかかった労力は？						0	4	2	1	0	7
3(1b)「活動と参加シート」の分担入力の依頼にかかった労力は？						6	0	1	0	0	7
3(2a)「環境因子シート」の分担検討にかかった労力は？（のんのんは保護者聞き取りで該当なし）						0	0	2	1	0	3
3(2b)「環境因子シート」の分担入力の依頼にかかった労力は？						2	0	1	0	0	3
選択肢　>>	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	回答数
少ない	□	□	□	□	□ 多い	度数					
5　個人情報の混在など不適切情報のチェックに要した労力は？						0	2	4	1	0	7

（ｲ）チームメンバー用質問票

チームメンバーは親子支援事業（のんのん）で１６名、親子通園施設（にじの学園）で１９名であった。表５－２及び５－３に各事業単位の結果を示す。

a　親子支援事業（のんのん）

表５－２　支援チーム形成･パート分担(ﾁｰﾑﾒﾝﾊﾞｰ用)質問票　親子支援事業回答結果まとめ

設問２　チーム全体で支援関連情報を共有することについて					
選択肢　>> 1：そう思う　2：多少そう思う　3：あまりそう思わない　4：そう思わない	1	2	3	4	回答数
	度数				
(1) 支援チームをリーダーとメンバーで構成することは連携支援の実現に効果的だと思いますか？	16	0	0	0	16
(2) 支援チームで分担して支援関連情報を把握することは連携支援の実現に効果的だと思いますか？	12	4	0	0	16
設問3　「活動と参加」および「環境因子」の入力パート分担について					
選択肢　>> 1：そう思う　2：多少そう思う　3：あまりそう思わない　4：そう思わない	1	2	3	4	回答数
	度数				
(1) 「活動と参加」であなたが分担した項目は自分の経験や専門にあっていると思いますか？	10	6	0	0	16
(2) 「環境因子」であなたが分担した項目は自分の経験や専門にあっていると思いますか？	チームリーダーが保護者に聞き取ったため、分担作業なし				
(3) 情報入力の方法（回答前確認ｂ）で回答した方法）は自分にあっていると思いますか？	12	4	0	0	16
設問4　個人情報に留意しながら情報を入力することについて					
選択肢　>> 1：そう思う　2：多少そう思う　3：あまりそう思わない　4：そう思わない	1	2	3	4	回答数
	度数				
(1) 個人情報の混入などを回避しながらの入力作業はかなり労力を使いましたか？	0	15	1	0	16
(2) リーダーが個人情報等の不適切情報の最終チェックをすることは必要不可欠だと思いますか？	12	4	0	0	16

b　親子通園施設（にじの学園）

表５－３　支援チーム形成･パート分担(ﾁｰﾑﾒﾝﾊﾞｰ用)質問票　親子通園施設回答結果まとめ

設問２　チーム全体で支援関連情報を共有することについて					
選択肢　>> 1：そう思う　2：多少そう思う　3：あまりそう思わない　4：そう思わない	1	2	3	4	回答数
	度数				
(1) 支援チームをリーダーとメンバーで構成することは連携支援の実現に効果的だと思いますか？	13	3	3	0	19
(2) 支援チームで分担して支援関連情報を把握することは連携支援の実現に効果的だと思いますか？	9	7	3	0	19
設問3　「活動と参加」および「環境因子」の入力パート分担について					
選択肢　>> 1：そう思う　2：多少そう思う　3：あまりそう思わない　4：そう思わない	1	2	3	4	回答数
	度数				
(1) 「活動と参加」であなたが分担した項目は自分の経験や専門にあっていると思いますか？	8	7	4	0	19
(2) 「環境因子」であなたが分担した項目は自分の経験や専門にあっていると思いますか？	3	13	3	0	19
(3) 情報入力の方法（回答前確認ｂ）で回答した方法）は自分にあっていると思いますか？	7	8	2	2	19
設問4　個人情報に留意しながら情報を入力することについて					
選択肢　>> 1：そう思う　2：多少そう思う　3：あまりそう思わない　4：そう思わない	1	2	3	4	回答数
	度数				
(1) 個人情報の混入などを回避しながらの入力作業はかなり労力を使いましたか？	5	3	4	7	19
(2) リーダーが個人情報等の不適切情報の最終チェックをすることは必要不可欠だと思いますか？	14	4	1	0	19

イ　活動と参加シートの活用にかかわる質問票

活動と参加シートの活用にかかわる質問票には閲覧者用と記入者用があるが、これら両方を併せた結果を示す。なお、親子通園施設については、情報の把握・共有および支援会議を２回実施しており、両方の結果を示す。

（ｱ）親子支援事業

親子支援事業の質問票の結果まとめを表５－４に示す。

表５－４　活動と参加シート質問票に対する親子支援事業の結果まとめ

選択肢　>>　1（少ない）--- 2 --- 3 --- 4 --- 5（多い）			1	2	3	4	5	回答数
			度数					
設問2 ※記入者	(1)-a	記入労力の程度（初回実施）	0	9	6	5	0	20
	(1)-b	記入労力の程度（再実施）						
選択肢	1：そう思う　2：多少そう思う 3：あまりそう思わない　4：そう思わない							
設問３ (項目12は 記入者のみ)	本シートの活用で改めて気づいた		1	2	3	4		回答数
			度数					
	(1)	「対象児者のできていること」があった	21	9	0	0		30
	(2)	「対象児者ができていないこと」があった	10	14	6	0		30
	(3)	「対象児者に有効な支援」があった	26	4	0	0		30
	(4)	「対象児者に必要な支援」があった	22	8	0	0		30
	(5)	「対象児者が身につけるべきスキル」があった	15	10	5	0		30
	本シートによって把握された情報全体によって		1	2	3	4		回答数
			度数					
	(6)	現在および今後の支援計画はさらによくなっていく	27	3	0	0		30
	(8)	そして情報共有によって多職種支援連携が効果的に実現される	20	10	0	0		30
	(10)	そして早期からの引継ぎによって適応不全を事前に回避できる	11	18	1	0		30
	「活動と参加」シート全体の情報把握は		1	2	3	4		回答数
			度数					
	(12)	担当部分の記入に必要な労力と時間に見合うものだった	6	14	0	0		20
	(13)	発達障害への気づきにつながると思う	9	17	0	0		26

(ｲ) 親子通園施設（１回目および２回目）

親子通園施設の質問票の結果まとめを表５－５、表５－６に示す。

表５－５　活動と参加シート質問票に対する親子通園施設の結果まとめ（１回目）

選択肢　>>　1（少ない）― 2 ― 3 ― 4 ― 5（多い）			1	2	3	4	5	回答数
			度数					
設問2	(1)-a	記入労力の程度（初回実施）	0	0	4	7	6	17
※記入者	(1)-b	記入労力の程度（再実施）						
選択肢	1：そう思う　2：多少そう思う 3：あまりそう思わない　4：そう思わない							
設問3（項目12は記入者のみ）	本シートの活用で改めて気づいた		1	2	3	4		回答数
			度数					
	(1)	「対象児者のできていること」があった	13	9	8	2		32
	(2)	「対象児者ができていないこと」があった	9	12	10	1		32
	(3)	「対象児者に有効な支援」があった	15	12	4	1		32
	(4)	「対象児者に必要な支援」があった	15	13	3	1		32
	(5)	「対象児者が身につけるべきスキル」があった	11	14	6	1		32
	本シートによって把握された情報全体によって		1	2	3	4		回答数
			度数					
	(6)	現在および今後の支援計画はさらによくなっていく	17	10	4	1		32
	(8)	そして情報共有によって多職種支援連携が効果的に実現される	15	16	1	0		32
	(10)	そして早期からの引継ぎによって適応不全を事前に回避できる	8	19	5	0		32
	「活動と参加」シート全体の情報把握は		1	2	3	4		回答数
			度数					
	(12)	担当部分の記入に必要な労力と時間に見合うものだった	3	8	6	0		31
	(13)	発達障害への気づきにつながると思う	15	16	1	0		32

表５－６　活動と参加シート質問票に対する親子通園施設の結果まとめ（２回目）

選択肢　>>　1（少ない）― 2 ― 3 ― 4 ― 5（多い）			1	2	3	4	5	回答数
			度数					
設問2	(1)-a	記入労力の程度（初回実施）						
※記入者	(1)-b	記入労力の程度（再実施）	0	0	4	8	5	17
選択肢	1：そう思う　2：多少そう思う 3：あまりそう思わない　4：そう思わない							
設問3（項目12は記入者のみ）	本シートの活用で改めて気づいた		1	2	3	4		回答数
			度数					
	(1)	「対象児者のできていること」があった	12	10	8	1		31
	(2)	「対象児者ができていないこと」があった	9	12	10	0		31
	(3)	「対象児者に有効な支援」があった	15	12	4	0		31
	(4)	「対象児者に必要な支援」があった	15	13	3	0		31
	(5)	「対象児者が身につけるべきスキル」があった	11	14	6	0		31
	本シートによって把握された情報全体によって		1	2	3	4		回答数
			度数					
	(6)	現在および今後の支援計画はさらによくなっていく	16	11	4	0		31
	(8)	そして情報共有によって多職種支援連携が効果的に実現される	14	16	1	0		31
	(10)	そして早期からの引継ぎによって適応不全を事前に回避できる	8	18	5	0		31
	「活動と参加」シート全体の情報把握は		1	2	3	4		回答数
			度数					
	(12)	担当部分の記入に必要な労力と時間に見合うものだった	3	8	6	0		17
	(13)	発達障害への気づきにつながると思う	15	15	1	0		31

ウ　環境因子シートの活用にかかわる質問票

環境因子シートの活用にかかわる質問票の閲覧者用と記入者用を併せた結果を表５－７～９に示す。なお、親子通園施設では、情報の把握・共有および支援会議を２回実施しており、両方の結果を示す。

（ｱ）親子支援事業

表５－７　環境因子シート質問票に対する親子支援事業の結果まとめ

選択肢　>>　1（少ない）―2―3―4―5（多い）			1	2	3	4	5	回答数
			度数					
設問2 ※記入者	(1)-a	記入労力の程度（初回実施）	0	0	4	0	0	4
	(1)-b	記入労力の程度（再実施）						
選択肢	1：そう思う　2：多少そう思う　3：あまりそう思わない　4：そう思わない							
設問3（項目11は記入者のみ）	本シートの活用で改めて気づいた		1	2	3	4		回答数
			度数					
	(1)a	「対象児者の生活に影響する環境因子」があった（周囲の人たちに関わる環境因子）	8	16	5	1		30
	(1)b	「対象児者の生活に影響する環境因子」があった（製品と用具、自然環境、サービスに関わる環境因子）	9	14	7	0		30
	(2)	「対象児者の生活しやすさにつながる環境因子」があった	11	15	4	0		30
	(3)	「対象児者の生活しづらさにつながる環境因子」があった	9	14	6	1		30
	(4)	「対象児者に必要な環境調整支援」があった	7	13	10	0		30
	本シートによって把握された情報全体によって		1	2	3	4		回答数
			度数					
	(5)	現在および今後の支援計画はさらによくなっていく	16	12	2	0		30
	(7)	そして情報共有によって多職種支援連携が効果的に実現される	17	12	1	0		30
	(9)	そして早期からの引継ぎによって適応不全を事前に回避できる	13	15	2	0		30
	「環境因子」シート全体の情報把握は		1	2	3	4		回答数
			度数					
	(11)	担当部分の記入に必要な労力と時間に見合うものだった	0	4	0	0		4
	(12)	発達障害への気づきにつながると思う	1	19	6	0		26

(ｲ) 親子通園施設（１回目および２回目）

a 親子通園施設の質問票の１回目結果まとめ

表５－８　環境因子シート質問票に対する親子通園施設の結果まとめ（1回目）

選択肢　>>　1（少ない）― 2 ― 3 ― 4 ― 5（多い）			1	2	3	4	5	回答数
			度数					
設問2	(1)-a	記入労力の程度（初回実施）	0	0	3	6	4	13
※記入者	(1)-b	記入労力の程度（再実施）						
選択肢	1：そう思う　2：多少そう思う 3：あまりそう思わない　4：そう思わない							
設問3 (項目11は 記入者のみ)	本シートの活用で改めて気づいた		1	2	3	4		回答数
			度数					
	(1)a	「対象児者の生活に影響する環境因子」があった (周囲の人たちに関わる環境因子)	8	11	12	1		32
	(1)b	「対象児者の生活に影響する環境因子」があった (製品と用具、自然環境、サービスに関わる環境因子)	4	10	16	1		31
	(2)	「対象児者の生活しやすさにつながる環境因子」があった	8	13	10	1		32
	(3)	「対象児者の生活しづらさにつながる環境因子」があった	6	13	11	2		32
	(4)	「対象児者に必要な環境調整支援」があった	5	19	7	1		32
	本シートによって把握された情報全体によって		1	2	3	4		回答数
			度数					
	(5)	現在および今後の支援計画はさらによくなっていく	12	13	6	1		32
	(7)	そして情報共有によって多職種支援連携が効果的に実現される	14	15	3	0		32
	(9)	そして早期からの引継ぎによって適応不全を事前に回避できる	8	20	4	0		32
	「環境因子」シート全体の情報把握は		1	2	3	4		回答数
			度数					
	(11)	担当部分の記入に必要な労力と時間に見合うものだった	5	6	2	0		13
	(12)	発達障害への気づきにつながると思う	11	21	0	0		32

b 親子通園施設の質問票の２回目結果まとめ

表５－９　環境因子シート質問票に対する親子通園施設の結果まとめ（２回目）

選択肢　>>　1（少ない）― 2 ― 3 ― 4 ― 5（多い）			1	2	3	4	5	回答数
			度数					
設問2	(1)-a	記入労力の程度（初回実施）						
※記入者	(1)-b	記入労力の程度（再実施）	0	0	3	6	4	13
選択肢	1：そう思う　2：多少そう思う							
設問3 (項目11は 記入者のみ)	本シートの活用で改めて気づいた		1	2	3	4		回答数
			度数					
	(1)a	「対象児者の生活に影響する環境因子」があった (周囲の人たちに関わる環境因子)	8	11	12	0		31
	(1)b	「対象児者の生活に影響する環境因子」があった (製品と用具、自然環境、サービスに関わる環境因子)	4	10	16	1		31
	(2)	「対象児者の生活しやすさにつながる環境因子」があった	8	13	10	0		31
	(3)	「対象児者の生活しづらさにつながる環境因子」があった	6	13	11	1		31
	(4)	「対象児者に必要な環境調整支援」があった	5	19	7	0		31
	本シートによって把握された情報全体によって		1	2	3	4		回答数
			度数					
	(5)	現在および今後の支援計画はさらによくなっていく	12	13	6	0		31
	(7)	そして情報共有によって多職種支援連携が効果的に実現される	14	14	3	0		31
	(9)	そして早期からの引継ぎによって適応不全を事前に回避できる	8	19	4	0		31
	「環境因子」シート全体の情報把握は		1	2	3	4		回答数
			度数					
	(11)	担当部分の記入に必要な労力と時間に見合うものだった	5	6	2	0		13
	(12)	発達障害への気づきにつながると思う	11	20	0	0		31

エ　支援計画検討会議の質・チーム協働にかかわる質問票

a　親子支援事業の質問票の結果まとめ

表５－１０　支援計画検討会議の質・チーム協働の質問票　親子支援事業の結果まとめ

設問２　支援会議におけるチーム協働について					
選択肢　>> 1：そう思う　2：多少そう思う　3：あまりそう思わない　4：そう思わない	1	2	3	4	回答数
	度数				
(1) あなたの意見を十分に言えましたか？	22	3	0	0	25
(2) 他の人たちはあなたの意見に十分に耳を傾けてくれましたか？	23	2	0	0	25
(3) 同意できない意見に対してもお互い十分に耳を傾けていましたか？	22	2	1	0	25
(4) ぶつかり合いや意見の食い違いを参加者全員で解消し、よい形にまとめあげることができていましたか？	21	3	1	0	25
選択肢　>> 1：かなりあった　2：多少あった　3：あまりなかった　4：なかった	1	2	3	4	回答数
	度数				
(5) 支援の方向性やアイデアについて、特定の人たちが自分たちの意見に頑なにこだわるということがありましたか？	1	2	3	19	25
選択肢　>> 1：そう思う　2：多少そう思う　3：あまりそう思わない　4：そう思わない	1	2	3	4	回答数
	度数				
(6) 支援方針の決定に、特定の人たちが強い影響力を持っていましたか？	1	4	2	18	25
(7) 支援計画実施のための役割分担はチーム全員の合意の上で決定されましたか？	23	0	2	0	25
(8) 本人・保護者・支援者にとって有用で建設的な話し合いが参加者全員でできましたか？	22	3	0	0	25
(9) 本システムを活用することによって支援会議の質が活用前よりも向上したと思いますか？	17	2	1	0	20
設問3　支援計画の内容について					
選択肢　>> 1：そう思う　2：多少そう思う　3：あまりそう思わない　4：そう思わない	1	2	3	4	回答数
	度数				
(1) 支援計画は具体的な情報把握に基づくものでしたか？	15	10	0	0	25
(2) 支援計画は支援対象者の実態に合致したものでしたか？	23	2	0	0	25
(3) 支援計画は支援対象児者の支援ニーズを包括的に捉えたものでしたか？	19	6	0	0	25
(4) 支援計画は支援対象である当事者・家族の納得を得られるものでしたか？	24	1	0	0	25
(5) 本システムを活用することによって支援計画の内容が活用前よりも向上したと思いますか？	21	3	1	0	25

b　親子通園施設の質問票の結果まとめ

表５－１１　支援計画検討会議の質・チーム協働の質問票　親子通園施設の結果まとめ

設問２　支援会議におけるチーム協働について						
選択肢　＞＞	1：そう思う　2：多少そう思う 3：あまりそう思わない　4：そう思わない	1	2	3	4	回答数
		度数				
(1)	あなたの意見を十分に言えましたか？	8	7	1	0	16
(2)	他の人たちはあなたの意見に十分に耳を傾けてくれましたか？	11	4	1	0	16
(3)	同意できない意見に対してもお互い十分に耳を傾けていましたか？	10	6	0	0	16
(4)	ぶつかり合いや意見の食い違いを参加者全員で解消し、よい形にまとめあげることができていましたか？	12	4	0	0	16
選択肢　＞＞	1：かなりあった　2：多少あった 3：あまりなかった　4：なかった	1	2	3	4	回答数
		度数				
(5)	支援の方向性やアイデアについて、特定の人たちが自分たちの意見に頑なにこだわるということがありましたか？	0	0	7	9	16
選択肢　＞＞	1：そう思う　2：多少そう思う 3：あまりそう思わない　4：そう思わない	1	2	3	4	回答数
		度数				
(6)	支援方針の決定に、特定の人たちが強い影響力を持っていましたか？	0	3	9	4	16
(7)	支援計画実施のための役割分担はチーム全員の合意の上で決定されましたか？	11	4	0	1	16
(8)	本人・保護者・支援者にとって有用で建設的な話し合いが参加者全員でできましたか？	12	3	1	0	16
(9)	本システムを活用することによって支援会議の質が活用前よりも向上したと思いますか？	10	6	0	0	16
設問3　支援計画の内容について						
選択肢　＞＞	1：そう思う　2：多少そう思う 3：あまりそう思わない　4：そう思わない	1	2	3	4	回答数
		度数				
(1)	支援計画は具体的な情報把握に基づくものでしたか？	11	5	0	0	16
(2)	支援計画は支援対象者の実態に合致したものでしたか？	8	8	0	0	16
(3)	支援計画は支援対象児者の支援ニーズを包括的に捉えたものでしたか？	5	11	0	0	16
(4)	支援計画は支援対象である当事者・家族の納得を得られるものでしたか？	8	8	0	0	16
(5)	本システムを活用することによって支援計画の内容が活用前よりも向上したと思いますか？	10	6	0	0	16

オ　支援計画の実行と結果にかかわる質問票

a　親子支援事業の質問票の結果まとめ

表５－１２　支援計画の実行と結果の質問票　親子支援事業の結果まとめ

設問２　支援計画の実行結果について						
選択肢　>>	1：解決した　2：多少解決した 3：あまり解決しなかった　4：解決しなかった	1	2	3	4	回答数
		度数				
(1a)	あなたが分担した支援計画の実行によって、目的の支援課題は解決したと思いますか？	2	13	2	0	17
(1b)	「あまり解決しなかった、解決しなかった」と判断した理由（抜粋） ・支援会議後、対象児が親子通園施設に行ったので実行せずに終わってしまった					
選択肢　>>	1：改善した　2：多少改善した 3：あまり改善しなかった　4：改善しなかった	1	2	3	4	回答数
		度数				
(2a)	支援計画全体の実行によって支援対象児者の生活は改善したと思いますか？	1	16	0	0	17
(2b)	「あまり改善しなかった、改善しなかった」と判断した理由（抜粋）					
選択肢　>>	1：そう思う　2：多少そう思う 3：あまりそう思わない　4：そう思わない	1	2	3	4	回答数
		度数				
(3a)	支援計画は支援チーム全体にとって実行可能なものでしたか？	9	4	4	0	17
(3b)	「あまりそう思わない、そう思わない」（実行可能ではない）と判断した理由（抜粋） ・可能なものが多かったが課題が多いと全部を短い時間の教室の中で取り入れる難しさもあった。					
選択肢　>>	1：そう思う　2：多少そう思う 3：あまりそう思わない　4：そう思わない	1	2	3	4	回答数
		度数				
(4a)	あなたが分担した支援計画の役割はあなたにとって実行可能なものでしたか？	9	8	0	0	17
(4b)	「あまりそう思わない、そう思わない」（実行可能ではない）と判断した理由（抜粋）					
(5a)	支援計画の役割実行が難しくなった際に、チームの他のメンバーに相談したり助言を求めたりしましたか？　（設問４a）で「あまりそう思わない・そう思わない」と回答した場合）	した			しなかった	
(5b)	相談や助言を求めなかった具体的な理由は？（抜粋）（設問5aで「しなかった」と回答した場合）					
選択肢　>>	1：そう思う　2：多少そう思う 3：あまりそう思わない　4：そう思わない	1	2	3	4	回答数
		度数				
(6)	本システムを活用することによって支援計画の実行におけるチーム連携は活用前よりも向上しましたか？	17	0	0	0	17
(7)	本システムを活用することによって支援計画の全体構成と役割分担は活用前よりも明確になりましたか？	8	9	0	0	17

b　親子通園施設の質問票の結果まとめ

表５－１３　支援計画の実行と結果の質問票　親子通園施設の結果まとめ

設問２　支援計画の実行結果について					
選択肢　>> 1：解決した　2：多少解決した　3：あまり解決しなかった　4：解決しなかった	1	2	3	4	回答数
	度数				
(1a) あなたが分担した支援計画の実行によって、目的の支援課題は解決したと思いますか？	0	15	5	0	20
(1b) 「あまり解決しなかった、解決しなかった」と判断した理由（抜粋） ・チーム内で分担をはっきり決めなかったことで、どこまでどう支援していいか迷い、話し合いも持たなかったので反省している。 ・特に実際の身辺動作のタイミングでは、関われない現状であるため。					
選択肢　>> 1：改善した　2：多少改善した　3：あまり改善しなかった　4：改善しなかった	1	2	3	4	回答数
	度数				
(2a) 支援計画全体の実行によって支援対象児者の生活は改善したと思いますか？	1	17	2	0	20
(2b) 「あまり改善しなかった、改善しなかった」と判断した理由（抜粋） ・児の感覚欲求の強さと家庭環境などの難しさがあったため。 ・家族の働きかけの継続が難しく、本児も場面ごとの対応が異なる点もあったため。					
選択肢　>> 1：そう思う　2：多少そう思う　3：あまりそう思わない　4：そう思わない	1	2	3	4	回答数
	度数				
(3a) 支援計画は支援チーム全体にとって実行可能なものでしたか？	4	11	5	0	20
(3b) 「あまりそう思わない、そう思わない」（実行可能ではない）と判断した理由（抜粋） ・担当以外の支援対象者の姿を見ていくのは難しいと思った。しかし、チームで話し合いをすることで、1人では考えられない方法を知り得ることはでき助かった。					
選択肢　>> 1：そう思う　2：多少そう思う　3：あまりそう思わない　4：そう思わない	1	2	3	4	回答数
	度数				
(4a) あなたが分担した支援計画の役割はあなたにとって実行可能なものでしたか？	4	16	0	0	20
(4b) 「あまりそう思わない、そう思わない」（実行可能ではない）と判断した理由（抜粋）					
(5a) 支援計画の役割実行が難しくなった際に、チームの他のメンバーに相談したり助言を求めたりしましたか？（設問４a）で「あまりそう思わない・そう思わない」と回答した場合）	した			しなかった	
(5b) 相談や助言を求めなかった具体的な理由は？（抜粋）（設問5aで「しなかった」と回答した場合）					
選択肢　>> 1：そう思う　2：多少そう思う　3：あまりそう思わない　4：そう思わない	1	2	3	4	回答数
	度数				
(6) 本システムを活用することによって支援計画の実行におけるチーム連携は活用前よりも向上しましたか？	6	12	2	0	20
(7) 本システムを活用することによって支援計画の全体構成と役割分担は活用前よりも明確になりましたか？	4	13	3	0	20

(2) 本事業の振り返りアンケート（保護者および支援者）

ICF 情報把握･共有システムを活用した支援への参加を振り返ってのアンケートについて、保護者の結果を表５－１４に、支援者の結果を表５－１５に示す。

表５－１４　本事業の振り返りアンケートの結果（保護者）

保護者用アンケート						
設問1　子どもとのかかわりについて（ICF活用事業に参加協力する前と比べて）						
選択肢 >>	**1：そう思う　2：多少そう思う　3：あまりそう思わない　4：そう思わない**	**1**	**2**	**3**	**4**	回答数
		度数				
Q1)	子どもを支援する方法が具体的にわかった。	6	1	0	0	7
Q2)	子どものできる事やできるようになった事に気づくようになった。	6	1	0	0	7
Q3)	子どもの気持ちを考えてかかわるようになった。	4	3	0	0	7
Q4)	子どもを叱ることが少なくなった。	3	3	1	0	7
Q5)	子どもを褒めることが多くなった。	7	0	0	0	7
Q6)	子どもを変えるより、場面や条件を工夫しようと考えるようになった。	6	1	0	0	7
Q7)	子どもがよりよく育つための場面や条件の作り方が少しわかるようになった。	5	2	0	0	7
Q8)	子どもの苦手さやできないことの理由を考えるようになった。	5	2	0	0	7
設問2　自分自身について（ICF活用事業に参加協力する前と比べて）						
選択肢 >>	**1：そう思う　2：多少そう思う　3：あまりそう思わない　4：そう思わない**	**1**	**2**	**3**	**4**	回答数
		度数				
Q1)	子どもの気持ちがなんとなくわかると思えることが増えた	4	3	0	0	7
Q2)	子どもと一緒にいて楽しいと感じることが増えた。	7	0	0	0	7
Q3)	子育てに少し自信が持てるようになった。	4	2	1	0	7
Q4)	子育てに前向きになれ、子どもと向き合えるようになった。	7	0	0	0	7
Q5)	子育てでイライラすることが少なくなった。	3	2	2	0	7
Q6)	子どものことを、いい子だな、大好きだなと思えることが増えた。	6	1	0	0	7
Q7)	子どもに必要な支援について自然な気持ちで考えられるようになった。	6	1	0	0	7
設問3　支援会議への参加について						
選択肢 >>	**1：そう思う　2：多少そう思う　3：あまりそう思わない　4：そう思わない**	**1**	**2**	**3**	**4**	回答数
		度数				
Q1)	支援会議に参加してよかった	7	0	0	0	7
Q2)	支援会議に参加することで、子育てに対する気持ちが楽になった。	6	1	0	0	7
Q3)	支援会議に参加することで、支援者の人たちとの距離が近くなった。	7	0	0	0	7
Q4)	支援会議に参加することで、これからの子育てへのエネルギーをもらえた。	7	0	0	0	7
設問4　家族について（ICF活用事業に参加協力する前と比べて）						
選択肢 >>	**1：そう思う　2：多少そう思う　3：あまりそう思わない　4：そう思わない**	**1**	**2**	**3**	**4**	回答数
		度数				
Q1)	支援会議で話された内容を、家族にも伝えたいと思うようになった。	7	0	0	0	7
Q2)	支援会議で話された内容を、家族に伝えることが増えた。	7	0	0	0	7
Q3)	子どもについて、家族と前向きに話せるようになった。	7	0	0	0	7

表５－１５　本事業の振り返りアンケートの結果（支援者）

支援者用アンケート					
設問1　児の評価と支援に対する捉え方について					
選択肢　>> 1：そう思う　2：多少そう思う　3：あまりそう思わない　4：そう思わない	1	2	3	4	回答数
	度数				
Q1)　子どもの日常的で具体的な情報に基づいて支援を考えることの大切さがわかった。	13	1	0	0	14
Q2)　場面や条件で子どもの様子が異なることの確認と共有が、支援の検討に大切だと感じた。	13	1	0	0	14
Q3)　子どもへの働きかけだけでなく、場面や条件を工夫することの大切さも大きいと思った。	12	2	0	0	14
Q4)　個々の支援を検討する上で、子どもの全体像を捉えて考えることが大切だと思った。	14	0	0	0	14
Q5)　課題項目の情報と関連する手がかりの組合せで支援を計画していく方法がわかった。	12	2	0	0	14
設問2　支援者チームについて					
選択肢　>> 1：そう思う　2：多少そう思う　3：あまりそう思わない　4：そう思わない	1	2	3	4	回答数
	度数				
Q1)　支援者チームで児の状態や支援について話し合うことが増えた。	13	1	0	0	14
Q2)　支援者間で児の話をするときに、より具体的な話ができるようになった	12	2	0	0	14
Q3)　児の状態に対する思い込みや想像で話すことが少なくなった。	6	8	0	0	14
Q4)　他の支援者の話を聴くときに、根拠となるエピソードに留意するようになった。	9	5	0	0	14
Q5)　互いの見立てが異なったときに、児の状態に影響する場面や条件を探すようになった。	7	6	1	0	14
設問3　保護者の支援会議への参加について					
選択肢　>> 1：そう思う　2：多少そう思う　3：あまりそう思わない　4：そう思わない	1	2	3	4	回答数
	度数				
Q1)　保護者を交えて支援会議を実施することの有用性を実感した。	11	2	1	0	14
Q2)　ICFシステムの情報把握は保護者の子ども理解を深めると思う。	11	2	1	0	14
Q3)　保護者と支援者での子どもの共通理解が、以前より深まった。	12	2	0	0	14
Q4)　以前より、子どもの支援方法を保護者に具体的に伝えることができた。	10	3	1	0	14
Q5)　ICFを使った支援会議では、保護者の参加姿勢が以前よりも積極的だった。	11	2	1	0	14

(3) ＩＣＦ情報把握･共有システム活用前後での個別支援計画の比較(企画推進委員)

本システム活用前後の親子支援事業の個別支援計画を図５－１に､親子通園施設の個別支援計画を図５－２に示す｡これらの図で示した支援計画は親子支援事業４名、親子通園施設３名のうち、それぞれ前後の変化がわかりやすいものとした。但し各事業実施単位の他児についても前後の変化は認められている。

表５－１６は､これら参加協力児の個別支援計画を事業実施単位毎に前後比較して、その変化を企画推進委員が評価した結果である。また、Type-B の設問３は両事業実施単位を通じて ICF 情報把握・共有システムの活用について尋ねた質問である。

ICF活用前　のんのん

個別の支援計画

3歳　男児　　うさぎグループ

1　指導計画　（8月作成）

1	長期目標	遊びの中に目的を見つける
2	担当の願い	始めと終わり（見通し）を知る
3	短期目標	支援方針（いつ、どこで、どのようにかかわるか）
① 好きな遊びを母や保育士と楽しむ。		車（トミカ）が好きなため、「通行止めです」「電車が通ります」など遊びが発展し興味が続くように声を掛ける。座れている時は「座れたね」など褒めていく。座るといいことがあるというのを印象付ける。
② 保育士や母に身体を止めてもらうことで注目する。		さりげなく身体を止めてあげて、見れる環境をつくる。 止まれたこと、見れたことを褒め、実感できるようにする。
③ 活動が始まることに気付く		片付けの時間の前にもうすぐ片付けと言うことを伝えていく。見通しがもてるようにする。次の活動で楽しいことがあることを伝えていく。

ICF活用後　のんのん

個別の支援計画

3歳　男児　　うさぎグループ

指導計画　（10月作成）

1	長期目標	遊びの中に目的を見つける
2	担当の願い	始めと終わり（見通し）を知る
3	短期目標	支援方針（いつ、どこで、どのようにかかわるか）
① 返事、要求、交換などのやりとりを増やし、ジェスチャーを促していく。		・「これちょうだい」など代弁し、この場面にはこの言葉を使うという経験を増やし、やりとりの方法を知らせる。 ・本児の好きな物を使って交換したり要求を出す経験をする。 ・写真カードを使って欲しいものを選んで、要求を保育士に出す。 ・考えて答える場面を増やす。（「やる人？」「はーい」など） ・身体を使いコントロール（ゆっくり、早く、小さく高くなど）を経験し声のコントロールにつなげる。
② 足型やマークで自分の場所など、見て分かるようにし、止まること、座ることを意識できるようにする。		・さりげなく身体を止めて見る環境をつくる。 ・待つ場所には足型、机にマーク、など見て分かるような環境を整えていく。 ・同じ絵本を繰り返し見る機会を増やし、注目する時間を延ばす。 ・具体的に行動を褒める。 ・一つの行為に対し一つずつ丁寧に声を掛け促す。 ・座れた時や、返事が出来たときなど、ハイタッチや身体に触れて褒める。 ＜靴に注目させる時＞ ・外に出るタイミングを人が少ない時にする。 ・個別に対応できるようにし、短い言葉で分かりやすく知らせるようにする。 ・歌を歌いながら履く。
③ 事前予告することで、次の活動に気付き、やろうとする。		・声を掛けて活動を知らせたり、絵カードに興味を示した時は絵カードで事前に流れを知らせていく。 ・流れが分かりやすいよう「今から～が始まるよ」などさり気なく声を掛け、活動に気付けるようにする。 ・活動内容を事前に実物を使って見せ、見通しを持てるようにする。 ・全体で説明して入りにくいときは、傍で話して伝えるようにする。 ・一つ一つ遊びが終わった後にほめ、終わりを期待させる。

図５－１　システム活用前後の個別支援計画（親子支援事業；左が活用前、右が活用後）

個別の支援計画（にじの学園 ICF活用前4月）

5歳 男児

1 支援の計画・実施・評価（4月）

支援場面	短期目標	具体的な支援	評価
生活支援 （健康） （生活リズム） （食事） （排泄） （更衣）	母の誘いによりトイレに行く。	場所見知りなど、苦手を考慮する。無理強いせず階段を経て行っていく。	少しずつ園のトイレの受け入れ、母と保育士の誘いによりトイレで3回排尿があった。
	新しい環境に慣れる。	母との関わりを観察するところから始める。	新しいことには計画する。一斉活動により、クラス単位の決まった活動は安心する。
発達支援 （感覚運動） （遊び） （言語） （対人関係） （集団参加）	要求を母や保育士と一緒に言葉にしてみる。	場面ごとの言葉かけを統一して、本児の言葉を引き出す方法を探る。通じた喜びを伝えていく。	「ユラユラやりたい。」など、楽しい遊びの中で保育士と共有した言葉を使い児発的な要求が少しずつ出てきた。
	楽しい思いを経験する。	好きな玩具、遊具を見極める。人と関わる遊びを行っていく。	毛布ぶらんこ、ハンモック、トランポリンで笑顔が出た。

2 成長の記録・引継ぎ

成長の記録 次年度への引継ぎ	

個別の指導計画（にじの学園 ICF活用後12月）

5歳 男児

1 支援の計画・実施・評価

支援場面	短期目標	具体的な支援	評価
生活支援 （健康） （生活リズム） （食事） （排泄） （更衣）	母の誘いによりトイレに行く。	フレーズに乗せた言葉かけに合わせ、マカトンサインを見せて根気強くトイレに誘う。排尿のサインを見逃さず、静かなトイレに誘う。気付きを促すため本児の反応を待ち、できた時には褒めるようにする。便座カバーや足台を使用するなど、排泄しやすい環境を整える。	
	安心して母と食事の場面を過ごす。食べられそうなものを食べる	刺激の少ない個室で母が食べる姿を見られるよう、対面の席を用意する。 無理強いせずにまずは好きな物を食べるようにする。食事の形状を工夫する。 登園時間を早くし、食事の間隔が開くようにする。	
発達支援 （感覚運動） （遊び） （言語） （対人関係） （集団参加）	自分の要求を写真カードや言葉で伝えようとする。	好きな遊びをする時に、遊びの中で使っている分かりやすい言葉や写真カードを使って要求するなど、大人とやりとりをしていくようにする。	
	好きな遊びを通してやりたい遊びを選択する。	好きな事、やりたくない事の2つを提示し選択しやすいようにする。選択をし、やりたい要求が出た時はそれが叶うようにする。要求すればかなえてくれるという経験を重ねていく。	
	安心できる大人と一緒に、他児と同じ遊びの場で遊ぶ。	遊んでいる他児を見てその場に近付いた時には、保育士の仲立ちにより同じ場で遊べるようにする。	
	歌やフレーズを使い楽しみながら動いたり止まったりするなど、色々な体の使い方を経験する。	好きな感覚遊びで10数えて止まることを繰り返し経験する。体の各部位に気付けるように、体に触れる遊びをしていく。体操の時、歌に合わせて止まったりジャンプができたりした時には、できていることを分かりやすい言葉で伝えるようにする。	

図５－２　システム活用前後の個別支援計画（親子通園施設；左が活用前、右が活用後）

表５-１６　システム活用前後の個別支援計画の比較結果（企画推進委員）

		1	2	3	4	5	6	回答数
アンケート　Type-A　（親子支援事業）								
設問1	**短期目標の記載について（親子支援事業）**							
選択肢　>>	**1：強く思う　2：思う　3：少し思う　4：あまり思わない　5：思わない　6：まったく思わない**	度数						
Q1)	活用前と比べて活用後の記載内容は、より具体的になったと思うか？	2	2	5	0	0	0	9
Q2)	活用前と比べて活用後の記載内容は、それに基づいて支援者が同じ内容を共通に思い描けるものになったと思うか？	1	4	4	0	0	0	9
Q3)	活用前と比べて活用後の記載内容は、支援の効果を評価しやすい内容になったと思うか？	2	3	4	0	0	0	9
設問2	**支援方針の記載内容について（親子支援事業）**							
選択肢　>>	**1：強く思う　2：思う　3：少し思う　4：あまり思わない　5：思わない　6：まったく思わない**	度数						
Q1)	活用前と比べて活用後の記載内容は、より具体的になったと思うか？	7	2	0	0	0	0	9
Q2)	活用前と比べて活用後の記載内容は、それに基づいて支援者が同じ内容を共通に思い描けるものになったと思うか？	3	6	0	0	0	0	9
Q3)	活用前と比べて活用後の記載内容は、生活適応の改善により役立つものになったと思うか？	2	6	1	0	0	0	9
Q4)	活用前と比べて活用後の記載内容は、支援の効果を評価しやすい内容になったと思うか？	1	7	1	0	0	0	9
アンケート　Type-B　（親子通園施設）								
設問1	**短期目標の記載について（親子通園施設）**							
選択肢　>>	**1：強く思う　2：思う　3：少し思う　4：あまり思わない　5：思わない　6：まったく思わない**	度数						
Q1)	活用前と比べて活用後の記載内容は、より具体的になったと思うか？	6	3	0	0	0	0	9
Q2)	活用前と比べて活用後の記載内容は、それに基づいて支援者が同じ内容を共通に思い描けるものになったと思うか？	4	5	0	0	0	0	9
Q3)	活用前と比べて活用後の記載内容は、支援の効果を評価しやすい内容になったと思うか？	5	4	0	0	0	0	9
設問2	**支援方針の記載内容について（親子通園施設）**							
選択肢　>>	**1：強く思う　2：思う　3：少し思う　4：あまり思わない　5：思わない　6：まったく思わない**	度数						
Q1)	活用前と比べて活用後の記載内容は、より具体的になったと思うか？	5	3	1	0	0	0	9
Q2)	活用前と比べて活用後の記載内容は、それに基づいて支援者が同じ内容を共通に思い描けるものになったと思うか？	4	4	1	0	0	0	9
Q3)	活用前と比べて活用後の記載内容は、生活適応の改善により役立つものになったと思うか？	2	6	1	0	0	0	9
Q4)	活用前と比べて活用後の記載内容は、支援の効果を評価しやすい内容になったと思うか？	3	6	0	0	0	0	9
アンケート　Type-B　（両事業実施単位に関わる付加質問）								
設問3	**ICF情報把握・共有システムの活用について**							
Q1)	本システムの活用で早期からの発達支援が縦と横につながりやすくなると思うか？	3	6	0	0	0	0	9
Q2)	本システムを継続的に活用すれば多職種の支援連携が実現しやすくなると思うか？	2	6	1	0	0	0	9

（4）就学時の引継ぎ書類

図５－３に示すのは、親子通園施設で作成した、就学児の引継ぎ書類である。当該児について支援会議の中で検討された５つの課題項目中、１項目を示している。そのため、小学校には、同様の引継ぎ書類が５枚、引き継がれることとなる。

具体的な支援内容と経過

支援内容	基本的な対人関係
課題	・発語はあるが、一方的で他者へ伝えようとはしない。
支援の方向性	・まずは、身近な大人と楽しい事を共有できるようにする。
具体的な手がかり（本児の強みなど）	・慣れた環境では期待して見る事が増えた。 ・保育士の言う言葉を期待し笑う。 ・母にしつこく要求を通そうとする。 ・好きな歌は大人の表情を見る事が増えた。 ・経験の中でこの遊びはこの人と決め要求する。
支援案（8月17日）	①言葉がけに擬音語を使ったり、本児の好きな感覚を利用したりし、遊びの中で楽しく人と関わる経験をする。 ②写真カードを利用し、好きな遊びを選ぶなど、要求を表現すると叶う経験を重ねる。
支援の結果（12月）	①②特定の他児の動きに興味を示し見るようになった。保育士が誘うと、他児と同じ遊びの場にいられるようになった。楽しかった遊びを、「ピョンピョンやりたい。」など、言葉で表現し、思いが叶うと、心地よさそうに笑うようになった。父や母の表情や声色の変化に気付き、少し引いた場所で顔を見るようになった。
次への課題と支援の方向性	（次への課題） ・他児の遊びを見ているが、自分から入っていこうとしない。 （支援の方向性） ・保育士の介入により、他児と一緒の場で遊ぼうとする。
支援の修正（12月14日）	①保育士が仲立ちとなりながら他児と同じ場で遊ぶ。 ②言葉がけに擬音語を使ったり、本児の好きな感覚を利用したりし、遊びの中で楽しく人と関わる経験を重ねていく。 ③母や保育士と物を介して関わる経験をする。 ④本児の行動に対して大人が言葉にして伝えイメージしていけるようにする。

支援がうまくいく条件といかない条件

うまくいく条件	目的を持って遊んでいる他児。安心できる大人。体を動かしたり、触れ合ったりする遊び。
うまくいかない条件	予測できない人や物。泣き声などの不快な音刺激。初めて見る人や場所、物。

図５－３　親子通園施設からの就学時引継ぎ書類（課題１項目分）

(5) ＩＣＦ情報把握・共有システムを活用した支援経過で得られた参加協力者の感想

ア　保護者の感想

支援会議実施１～２ヶ月後に自由記述でアンケートを実施した結果について、親子支援事業の結果を図５－４に、親子通園施設の結果を図５―５に示す。

(ｱ) 親子支援事業（のんのん）

支援会議後の保護者の感想（自由記述アンケートより）

親子支援事業（のんのん）

1　支援会議に参加して新たな発見はあったか。

(1) 子どもさんに関すること

・できない事ばかりに目がいっていたが、できる事、出来るようになった事がたくさんあることに気がついた。
・視覚的に伝える事が有効という事がわかった。
・スキンシップをとることでとても喜び、行動に移すことがわかった。

(2) ご自身も含めた家族に関すること

・家族の対応が子どもに良い影響を与えていたことに気づいた。
・自分（母親）の声に子どもがよく反応していることがわかった。

2　支援会議に参加後、子どもさんに関することでご自身の気持ちに変化があったか。

（4名全員とも変化あり）　具体的な内容は下記のとおり

(1) 気持ちの変化

・正解や不正解のない子育ての中で、子育てに自信がなかったことも少しは自信が持て、前向きにがんばろうと思うようになった。
・自分の育児に少し自信が持てた。具体的な方法を教えてもらえたので、今後への希望になり安心した。子どもに対して、きちんと向き合い話をしようという気持ちが強くなった。
・親が子どものことを理解して、その強み、弱みを含めた特性を、第3者にも伝えられるようになれるとよいと思った。子どもが苦手な事に対して、「声かけや寄りそい方」など良い方向に向かう関わりを学びたいと思った。
・本人の言動を理解できるようになり、前よりも本人に寄り添って子育て出来るようになり気持ちが楽になった。本人が楽しんで活動に取り組む姿を一番近くで感じる事ができ、自分自身もすごく嬉しく今後の成長が楽しみになった。

(2) 子育ての姿勢

・子どもの言動を理解できるようになり、普段の本人への接し方が変わった。
・子どもに寄り添って子育てできるようになった。
・子どもと向き合いちゃんと話をしようという気持ちが強くなり実施した。
・今まで以上に、子どもに声をかけるようになった。

3　その他

(1) 子どもの変化

・周りから理解を得られた時には嬉しそうにし、言葉で伝えようとする姿がみられるようになった。
・自分でできることはやるようになり、できた時は伝えに来てくれるようになった。

(2) 上記以外で支援会議に参加してよかったことなど

・親だけでなくいろいろな人に関わってもらうことで、子どもが刺激を受けて成長していくことがわかった。
・人に話を聞いてもらうことは嬉しいことだと感じた。子どもの事を知っており、解決方法も納得がいき友達に相談するよりも心が軽くなった。
・にじの学園に通園することにした。（2名）

図５－４　支援会議後の保護者の感想（親子支援事業　のんのん）

（ｲ）親子通園施設（にじの学園）

支援会議後の保護者の感想（自由記述アンケートより）
親子通園施設（にじの学園）
1　支援会議に参加して新たな発見はあったか。
(1) 子どもさんに関すること
・今まで成長にあまり変化がないと思っていたが、伸びているところもあり嬉しく感じた。
・思っていたよりできることが多いことに気づけた。
・１つのことを繰り返しやると上手にできるようになる事がわかった。
(2) ご自身も含めた家族に関すること
・ICFを通じて、子どものことを周りがよく理解してくれるようになった。
2　支援会議に参加後、子どもさんに関することでご自身の気持ちに変化があったか。
（3名全員とも変化あり）　具体的な内容は下記のとおり
(1) 気持ちの変化
・今までは成長にあまり変化がないと思っていたが、延びているところも気づけ嬉しく感じた。
・いろんな人に支えられていることに気づけた。
・両親共に、もっと子どもに寄り添って生活をしていきたいと思った。これまでよりもっと子どもに愛情を持てるようになり、気持ちが前向きになった。
(2) 子育ての姿勢
・支援の方法を家族で共有するようになった。
・子どもに対し、分かりやすく短い言葉で話すようになった。
3　その他
(1) 子どもの変化
・以前より活動がスムーズになった。
(2) 上記以外で支援会議に参加してよかったこと
・得意なこと、苦手なことを具体的に考えることで、たくさんの支援方法を聞くことができた。自分や家族だけでは、支援のアイデアがでてこないのでよかった。

図５－５　支援会議後の保護者の感想（親子通園施設　にじの学園）

イ　支援者の感想

支援会議実施１～２ヶ月後に自由記述でアンケートを実施した結果について、親子支援事業の結果を図５－６に、親子通園施設の結果を図５―７に示す。

(ｱ) 親子支援事業（のんのん）

支援会議後の支援者の感想（自由記述アンケートより）

親子支援事業（のんのん）

1　支援会議に参加して新たな発見はあったか。

(1) 子どもさんに関すること

・保護者と会議をすることで、教室での様子と家での様子の違いを知ることができた。
・新たな強みや苦手なことがわかった。
・教室での遊びを家でも楽しんでいることを保護者の話から知ることができ、どんな遊びを取り入れたらよいかわかった。
・今まで育ってきた環境を知ることができた。
・書面にすることで、子どもの姿をきちんと把握することができた。

(2) 保護者に関すること

・保護者がどのような思いで子どもに接しているかがわかった。
・家でも工夫して子育てをしていることがわかった。
・保護者の子どもに対する思いや育て方、母親と他の家族との関係性がわかった。
・しっかりと子育てをしていても、子どもを可愛いと思えない人もいることがわかった。

2　ICFを活用したことで、その後の自分の支援に変化があったか。

（全員とも変化あり）　具体的な内容は下記のとおり

・いつも同じような考え方をしていたが、違う視点を少しずつ取り入れられるようになった。
・なんとなくの感覚で子どもと接していた部分が多かったが、その子の強み、弱みをふまえて根拠を持って接するようになった。
・子どもの強みを保護者と共通理解することで、支援を共有し一緒に考えられるようになった。
・保護者に支援方法を具体的に話すことで、療育しやすくなった。
・保護者に渡す資料をつくる時に、具体的にわかりやすく書くようになった。
・できる時とできない時の違いはどこにあるのか、環境面からも考えるようになった。
・できないことが多い子どもでも、できることから支援を考えることができることを実感した。

3　その他

・職種や支援者によって子どもの見方が違うが、いろいろな見方をすることで支援につながることがわかった。
・具体的な子どもの姿を共通認識できているため、保護者が支援者のアドバイスを受け入れやすくなった。

図５－６　支援会議後の支援者の感想（親子支援事業　のんのん）

（ｲ）親子通園施設（にじの学園）

支援会議後の支援者の感想（自由記述アンケートより）
親子通園施設（にじの学園）
1　支援会議に参加して新たな発見はあったか。
（1）子どもさんに関すること
・好きなものを利用することで、出来たり、やろうとする姿が見られることがわかった。
・事業所ではパズルをやり通せると聞き驚いた。環境によって姿が違うことがわかった。
・本当にごくわずかなサインを出していることに気づかされた。
（2）保護者に関すること
・家庭環境や保護者の不安な気持ちを知ることができた。
・家族がそれぞれ子どもに対する自分の役割を模索していることを知った。
・保護者の話を聞き、自分が思っていた以上に深く悩んでいたことを知った。
・家庭での子どもに対する保護者の対応を知り、園ではわからない保護者の困り感を知れた。
・保護者がいろいろと子どもの対応に模索し、ストレスを感じていたことを知った。
2　ICFを活用したことで、その後の自分の支援に変化があったか。
（全員とも変化あり）具体的な内容は下記のとおり
・子どもの見方が多角的になり、子どもの困り感をさぐられるようになった。
・自分の考えだけではなく、保護者や各分野の専門家の思いや見立てなどから多角的に見れるようになった。
・子どもの良い所を活かして苦手なことの支援ができないかと考えるようになった。
・効果に繋がる声かけや環境設定を考えるようになった。
・子どものサインをより丁寧に見て、得意な所を活かした支援を考えられるようになった。
3　その他
・支援会議後、家庭と園で同じ方法で取り組むことで共通の目標、方向性がわかり効果もでてきた。
・より良い支援方法を試行錯誤し、生活の中で効果に繋がる方法を考えるようになった。

図５－７　支援会議後の支援者の感想（親子通園施設　にじの学園）

(6) 企画・推進委員の評価（企画推進委員会での発言から）

ICF 情報把握・共有システム活用の利点について図５－８に、工夫および課題について図５―９に示す。

ア　ICF 情報把握・共有システム活用の利点

企画・推進委員の評価（企画推進委員会での発言から）

1　ICF情報把握・共有システム活用の利点

（1）実際の支援に関すること

・環境を整えることで、子どものできることが広がるという考えはよりよい支援につながる。
・チェック項目から、本人の苦手さだけでなく、よさや強みも見えてくる。
・今まで見ていなかった環境の視点にも気づきを得られる。
・いろいろな場面で1人の子どもを見ていくので、その子の支援の手がかりを知れる。
・実際の対象児を知らなくても、収集したデータで支援案が作っていける。
・1つの課題に対して、広げて考えていける。
・日常的に目につく行動(例：靴が1人で履けない、スプーンをつかえない）は捉えやすいが、それがどのように成り立っているのか、このツールを活用することで気づくことができる。

(2) 支援会議に関すること

・1時間半から2時間で４、５項目の内容を、とても効率よく、網羅的に検討されている。
・通常の福祉サービス利用児に実施している支援会議と違い、他機関が参加しても具体的な話が出ている。
・支援会議でねらいがどこにあるかをはっきり伝えられるので、保護者も納得して取り組める。
・関係機関が支援を統一することで課題の達成ができ、有意義な会議である。
・うまくいく条件、うまくいかない条件が絞り込まれてきて第2回目の支援会議の意義を感じた。
・支援会議で保護者がエネルギーを得られたというのは、良い会議であったと思う。

(3) 引継ぎに関すること

・ICFを活用した子の支援計画は個別性が出ている。名前を見なくても誰の計画かがわかる。
・ICFを活用後の支援計画は、具体的に実施方法が書かれており、引継ぎ後もすぐに取り込みやすい。（活用前の計画は実際にやろうと思っても、どう関わったらよいかわかりにくい。）

(4) 支援の質に関すること

・ICF情報把握・共有システムの活用がされると、碧南市全体の支援の質があがる。
・日常的に目につく行動(例：靴が1人で履けない、スプーンをつかえない）は捉えやすいが、それがどのように成り立っているのか、このツールを活用することで気づくことができる。専門家が説明しなくても、チーム1人1人の気づきで分析的に行え支援者のスキルアップになる。
・ICF対象児以外にも、その視点や支援方法を広げており、全体的なスキルアップになっている。

(5) 保護者に関すること

・子どもの成長も見られるが、保護者も成長しているように感じる。
・今までぼんやりと感じていた子どもの全体像が、保護者も支援者もしっかりと認識できた。
・保護者も今後また困ったことにぶつかった時に、これからはどうやったらできるようになるのかと考えられると思う。

(6) 多職種連携

・このシステムは日常生活用語で書かれているので、同じ視点で支援が考えられる。
・このシステムの活用が進んでいかない限り、顔がつながっただけで連携は進まない。
・これまで職種や職場が違うと見方がバラバラだと感じていたが、ICFを活用すると同じような見方ができるのだと実感した。

図５－８　企画・推進委員の評価（ICF 情報把握・共有システム活用の利点）

イ　ICF 情報把握・共有システム活用時の工夫と課題

企画・推進委員の評価（企画推進委員会での発言から）
2 ICF情報把握・共有システム活用時の工夫
(1) 聞き取りに関すること
・保護者には、支援者が文章をかみくだき、会話の中で聞き取ってもらえると答えやすい。
・聞き取りは、1人の担当者で行うのではなく、数名で分担すると負担感もなくいろいろな視点でみれるのでよい。
(2) 支援項目に関すること
・支援する前段階で、どの支援項目を選択するかの議論が必要である。
・改善できそうな項目を見つけるのに、ヒントになるのはその子の強みや環境因子の好影響である。
・どの項目をなぜ選択したか理由を入れると参加者全体にわかりやすく、支援者の教育にもなる。
・どの項目が選ばれなかったかを意識するのも大切。
3 ICF情報把握・共有システムの今後の活用
(1) 今後に関すること
・保護者の立場では、是非学齢期の子ども対象にやってもらえるとありがたい。要因が環境などにもあるという見方を支援者の方たちにも知ってもらえると、今後の対応が違ってくる。
・ICFをベースに支援した人から、導入した効果などを伝え多くの人が実感していくとICFへのハードルが少しずつ下がっていくのではないか。
・ICFを初めて活用する人は、少し難しいと思ってもやっていくことでよさに気づくと思う。
・ICDとICFはお互いに補完する関係であるといわれている。医学的な見方が前面にでると、「子どものできないところ」「どうしたら治るのか」という話になりがちである。
・保護者には早い時期にICF的な考え方（「課題は生活の中にある」「環境への働きかけ」「環境を整えるとできることが増える」）を実感してもらえるとよい。そのために、ICFの考え方を持っている支援者が身近にいるとよい。
(2) ICFを広めていく方法
・「子どものいいとこ探し（ICF）」「支援のヒントが見つかる」「子どもを客観的に見ることができる」などという風にポジティブに伝えていくとわかりやすいのではないか。
・今はまだICFが特別なことと思われている。研修などでたくさん耳にし、当たり前のことになっていくと実施しやすいのではないか。
・ICFとは、専門的なものではなく、子どもを見る際の客観的に分かりやすくするものである。障害をみるものではなく、生活場面をみるものだということをしっかり伝えていると良い。
4 ICF情報把握・共有システム活用の課題
(1) 研修に関すること
・支援会議の参加者が資料の使い方について、統一した知識を持っているとやりやすい。
・このツールが情報のプラットフォームという認識をどこまで広めていけるかが課題で、その研修が必要。
・情報を活用していくために、情報を引き継ぐ受け手にもICFの研修が必要になってくる。
(2) 情報収集の作業量に関すること
・情報収集等の作業がすごく大変になると、支援できる人数が限られるため整理できたらよい。
・年齢に応じて必要でない項目もあるが、子ども1人1人違うので何が必要で不必要かを決めていかないといけない。
(3) 支援会議に関すること
・１つ１つの会議を積んでいかないといけないという点がたいへんであるが、少し簡易にできるようになると実際の現場で活かせるのではないか。

図５－９　企画・推進委員の評価（ICF 情報把握・共有システム活用の工夫と課題）

(7) 考察

ア　多領域連携

ICF 情報把握・共有システム（以下、ICF システム）の活用で職種による子どもの見方の違いを受け入れ、それを支援に繋げられるようになった（表５－７～９の質問紙や図５－６、７支援者の感想より）。また、ICF システムの活用により具体的に支援内容を関係機関で共有し支援の統一が図られ、子どもの発達への効果にも繋がった。

これらは、図５－８企画推進委員の評価にもあるように、ICF が日常の言葉で書かれており、職種や立場を越えて共通の視点で支援が考えられるということが大きく関係している。また、関係機関が情報を共有しているため具体的な内容で支援会議の検討ができ、そのことも多領域連携につながった。

イ　実践支援活用

情報収集の項目が多いので、支援者の負担はある。しかし、複数の担当者で分担すること、最初から全て聞き取ろうとせず取れる範囲で情報をとっていくこと、保護者にはかみくだいて会話の中で聞くことなどの方法を活用することによって、情報収集の負担は少し軽減される。これは、表５－４～６にある、のんのん（親子支援事業）とにじの学園（親子通所施設）の情報収集の労力の違いに示されている。（にじの学園は１人の担当者で、最初から多くの情報収集を行った）

支援者の負担はあるものの、そこで行った情報収集はそれらの労力に見合うものという結果が表５－４～９に示されている。

情報収集で新たな気づきがあったかという点では、早期療育で初めて情報を収集するのんのんで気づきが多いのは当然であるが、２年ほど関わっていたにじの学園の通園児に対しても新たな気づきがあったという点は、ICF システムが子どもの支援関連情報を網羅的に収集できることを表している。

特に、支援の現場以外での子どもの様子や、環境面、保護者の思いにかかわる新たな気づきが多くあり、この点は、通常の支援業務においては見落とされがちであることがわかった。そして、これらの情報が網羅的に収集されたことにより、これまで感覚的にしか把握されていなかった子どもの姿が、多角的に子どもの強み、弱みを踏まえ、支援チームで共通認識することができた。

子どもの課題について、図５－３のように「うまくいく条件」「うまくいかない条件」を見出すことができ、引継ぎ書類として次の支援先に渡すことができた。これは、環境を整えることで子どものできることが広がるという ICF の考えを集約しており、このような考え方が支援会議において自然と導き出されたということが、この事業の大きな成果の一つであると言える。

またその結果、具体的な支援計画が立てられるようになり、引き継ぎ先での支援にもすぐに取り入れることが可能な、具体的で実践可能な計画を立案することができた。

ICF システムを活用することは、子どもの行動がどのように成り立っているのかの分析ができ、多角的に見る視点を養うことにつながり、子どもの強みから支援を考える手法を獲得できるなど、支援者のスキルアップにも大きく役立った。そして、今回の事業への参加協力児以外にもその視点や支援方法が広がっており、ICF システムの活用は支援の質の向上をもたらすといえる。

さらに ICF システムは、保護者に対しても子どもの受けとめ方や自身の変化、子育ての実際によい効果をもたらした。

のんのんでは、まだ自分の子どもの発達に課題があるのかどうか不安のさなかにいる保護者が多い。そのような保護者に ICF システムを活用して ICF 項目に基づく支援関連情報の把握と共有を行うことによって、活用前までは子どもが出来ない部分にしか注目していなかったのが、子どもの出来ていることもたくさんあることに気づけるようになった。さらに自分や家族の行動が子どもによい影響を与えていることにも気づき、これまで不安で自信のなかった子育てに、少し自信が持てるようになった。子育てに少しずつ前向きになり、子どもに対する接し方も変わり、子どもに寄り添う、向き合う、声をよくかけるなどの行動の変化が見られるようになってきた。これらは、表５－１４、図５－４、図５－８のデータおよび記載に示されている。

にじの学園の保護者は、毎日目に見えて子どもの成長が感じられるわけではないため、子どもに変化があまりないと感じていたと思われる。しかし、ICF システムの活用により、網羅的に細かく情報を見ていくことで子どもの伸びているところ、できているところ、どんな場面やどんな時にできるのかなど、子どものよさを環境要因とセットで気づくことができた。また、情報収集の内容や支援会議の参加、そ

の結果を家族に伝える事で、母以外の家族にも子どもの理解が得られるようになった。

さらに、子どもの具体的エピソードを軸に多くの支援者と協働して支援会議を行うことで、自身と子どもが多くの人たちに支えられていることに気づくことができ、そのことがまた、子ども達に前向きな気持ちと愛情を持って接することができるという変化になって顕れた。これらは、表５－１４、図５－５、図５－８のデータおよび記載に示されている。

ウ　子育て支援から発達支援への滑らかなつなぎ

親子支援事業（のんのん）で ICF システムを活用した４名の保護者は、②「実践支援活用」で記述したように、不安や自信のない子育てから、少し自信が持て、具体的な対応方法を教えてもらい今後の希望につながった(図５－４より)。そして、さまざまな多くの人に関わってもらうことで子どもが刺激をうけ成長していくという捉え方を持つに至った。その結果、支援会議後、療育に通いたいという思いが明確となり、にじの学園を２名の保護者が利用することとなった。このように、ICF システムを活用することにより、保護者が自ら子どもの状況を、その強みと弱みから受け止め、療育に進むことを選択できた。この選択は、外側から強制されたものではなく、とても自然な流れであり、今後の親子にとって、とてもよい出発であると感じられた。

エ　課題と今後の展望

ICF システムの課題としては、大きく分けて２つあげられる。１つ目は、事前に情報収集方法や支援会議の実施方法などの研修をする必要があること。２つ目は、情報収集の作業量が多いこと。この点については、幼児期等、年齢に応じてある程度項目を絞られると支援者の負担感が少なくなり、広く活用されやすくなると考えられる。

来年度碧南市においては、これらの成果と課題を受け、ICF の活用を地域の支援者に広げ碧南市の地域支援体制の充実を図っていく予定である。

付録

1　企画・推進委員会の実施状況等

(1) 企画・推進委員会開催時期及び検討内容

表６－１　企画・推進委員会第１回～第５回の開催日時及び検討内容項目

	日時	検討内容
第1回	平成30年7月18日 13時30分～15時30分	(1)これまでの ＩＣＦを利用した支援の報告 (2) ＩＣＦ情報把握・共有システムのにじの学園及び親子支援事業での活用について ア　親子支援事業の概要 イ　ＩＣＦ情報共有パッケージ活用の流れ ウ　事業効果判定の方法 エ　支援会議について オ　ＩＣＦを親子支援事業で活用する際の課題・解決方法の検討
第2回	平成30年8月17日 12時30分～14時	(1) にじの学園支援計画について ア　情報共有パッケージを活用した情報収集の報告 イ　支援会議に向けた検討内容の絞り込みについて ウ　絞り込んだ検討項目の支援案について エ　午前中の支援会議で出た意見及び保護者の感想等について (2) 親子支援事業での活用に際しての課題の確認と解決策の検討について
第3回	平成30年12月27日 13時30分～15時30分	(1) ＩＣＦ情報把握・共有システム活用の結果報告 (2) ＩＣＦ情報把握・共有システム活用の効果について ア　実施者への質問紙調査の結果から イ　支援計画の質と量から ウ　保護者の気持ちの変化 エ　実践現場での活用で出てくるであろう課題について (3) 報告書の内容構成について
第4回	平成31年2月1日 13時30分～15時30分	(1) 事業効果について (2) 引継ぎについて (3) 他地域への普及方法検討 (4) 事業報告書について
第5回	平成31年3月15日 13時30分～15時30分	(1) 支援に対するICFシステムの効果 (2) 全体経過の振り返り (3) 事業報告書について (4) 今後の展望について

(2) 検討内容の概要

＜第１回企画・推進委員会　検討概要＞

１　ＩＣＦを利用した支援の報告

・ICF の考え方の印象としては難しい考え方という印象。

・子どものできない事が、環境を整えることでできることが広がるという考えはよりよい支援につながる。

・情報共有パッケージは、親の立場からすると１人で書くのは難しい。支援者と一緒に書けるとよい。

２　ＩＣＦ情報把握・共有システムのにじの学園及び親子支援事業での活用について

(1) ＩＣＦ情報把握パッケージ活用の流れ

・子どものよさを見つけていき、そのよさを活かして子どものできることを増やしていくために、こういうチェック表は有効である。

・チェック項目から、本人の苦手さだけでなく本人のよさも見えてくる。

・たくさんのチェック項目はあるが、大変答えやすい内容だと思う。

(2) 支援会議について

・支援会議では、次の支援会議までの間にやることの優先順位をつけ、支援を考案する。支援の修正などをする担当者を決めることが大切である。

・基本的には支援会議に家族が関わることになる。家族の知らないところでデータがやりとりされて、そこで全部決まっていくことはない。

・保護者が支援会議に入る場合は配慮が必要で「ここがわかるともっと楽しく過ごせるね」という言い方で伝え、家族との共同体制を作っていくことが大切。

・ＩＣＦ情報把握パッケージを活用する上では、臨床的スキル（言い方、伝え方）が重要になる。言い方ひとつで、親が傷ついたり傷つかなかったりする。

・今まで自分達が実施してきた会議は、ベースにある情報が情報共有パッケージと比べるとかなり不足していると感じる。しかし、実際にこのように行うとなると、時間や情報収集の仕方等で難しい。

・ＩＣＦ情報把握パッケージの活用で、子どもの成長が促されるのであればよいことである。

・情報共有パッケージでは細かく項目が載ってきているので、環境など今まで見ていなかった視点も気づき、こんなところからも影響を受けるのかと思うこともある。

情報収集は量が多くて大変だが、子どもを捉えるという意味ではいろんな面から見ることができる。

・定期的にやっている事例検討会は、支援者の困り事に対して検討をしているが、その困り事は施設の場面でしか見ていない。いろんな場面で 1 人の子を見て、その子の手がかりを知れるのは強みである。

・また、最初から全ての項目を細かくとるのは大変なので、対象児に対してどこが重要かを恣意的に決めていくのもよい。

・これだけの項目の情報収集を 1 日でやろうと思うと無理である。3 週間かけて少しずつやっていってもよい。

(3) ＩＣＦを親子支援事業で活用する際の課題・解決方法の検討

（親子支援事業は、保護者が自分の子どもに対し発達の困難さがあるのかどうなのかと迷っている状態であるのが特徴）

・育児に対して困っている保護者は困っている事に対して、かなり視野が焦点化しているので、実際は子どものよさもたくさんあるが見えていないことがある。保護者がどのような状況なのかにより、子どものよさから見ていくのか、保護者の困り事に対して見ていくかを見極めるとよい。

・情報パッケージは量が多いので、活動と参加、環境の絞り込んだものだけで見ていくのもよい。保護者がどれだけの情報量を処理できるかにより、調整するとよい。

＜第２回企画・推進委員会　検討概要＞

1　にじの学園支援計画について

(1) 支援会議に向けた検討内容の絞り込みについて

・ライフステージで考えていく事とあわせて、その子が今、伸びようとしているところはどこなのか等、その子の成長を合わせて考えた時に、本当にその項目でよいのか検討は必要。

・ICF ツールで情報は得られるが、その情報をどう活用していくかは支援者側のスキルが求められる。

・支援の効果ありの部分においても、効果がでてきているのでさらにどうしていったらよいかということも考えられると良い。

・この回答を保護者がみると、「できない」という部分が多く、それをみると保護者は自分の子どもはできないことがこんなに多くあるんだと最初に感じると思う。絞込みの段階から、できたらすぐに成功できそうな、保護者として達成感が得られる部分をいれていくと、保護者が子どもの成長を感じられ、次に向かっていく気持ちになる。

・にじの学園は親子通園施設であり親と子の支援のため、保護者が困っているところに焦点をあてる点と、子どものライフステージや子どもの姿に焦点を絞ってみていく点があるとよい。

・改善できそうな項目をたくさんある中から見つけていくのが大切である。なにができそうか、ヒントになるのはその子の強みや環境因子の好影響であるため、そのことを意識しながら選んでいくとよい。そうすると支援のアイデアが思いつきやすい。

(2) 絞り込んだ検討項目の支援案について

（具体的な支援案についての検討ではなく、支援案をなぜ考えたのかという根拠やプロセスや手がかりをどのようにしていけばよいかについて検討を行った。）

・実際の対象児を知らなくても取ったデータと、それと連続して保護者から実際に話を聞くことで、支援案が作っていける。

・１つの課題に対してこれだけ広げて考えていけるということは１人ではできず、他の支援者と情報を共有した結果だと思う。

・支援方法の考え方、情報を共有し合うという点ではよいが、それぞれがかなり使いなれてこないと、うまく情報を使いきれないのではないか。単純にやっていくと課題が多くでてきて、絞り込まないといけなくなるが、その絞り込む方法などを使っていく中でスムーズにできていくとよい。

(3) 午前中の支援会議で出た意見及び保護者の感想等について

事務局より、口頭にて支援会議で出た意見や保護者の感想等を報告した。

・保護者の立場で自分の子どもの支援会議に出させてもらうことがあるが、自分の子どものことに対して多くの支援者が集まりいろんなことを考え、アイデアをだしてくれるのはとても感謝している。今回のご両親も同じだと思う。どの家族も支援会議に参加できれば、家庭と実際の支援者とがうまくつながって、子どもに対していい支援が出来ていくと思うが、実際にはそのような保護者ばかりではなく、時間の関係もあって全ての家族の参加というのは難しいことかもしれない。

・保護者と支援の現場がつながるという意見に賛同である。ただし保護者によっては配慮しないといけない人もおり、その共通理解をした上での開催が大切である。

・にじの学園の先生の感想に作業が大変だったという言葉が何度もあった。その後の感動もあったので、いいものには変わりないと思うが、このパッケージをこれから広め、ICF を利用していくことには作業がすごく大変になってしまうと支援できる人数が限られてしまう。できるだけ、整理していけることを検討していけると良い。

・ICF には限らないがインタビューをする時に、インタビューされる人が言いたいことがあるとどんどん話が横にそれていってしまうため、保護者の気持ちを傷つけないようにしながら、切り上げる方法は別のスキルである。

・年齢に応じて必要でない項目もあるが、子ども１人１人で違う場合もあるので、その子によって、何が必要で何が不必要かを決めていかないといけなく、今後の課題となると思う。聞き取ったエピソードをまとめて書くというスキルも必要となる。

2　親子支援事業での活用に際しての課題の確認と解決策の検討について

・聞く順番としては、子どもできるところから先に聞いていくとよい。

・なれてくると専門用語が出てしまうので、気をつけるとよい。また、できないことだけに注目せず、できることも見ていくことも大切である。

・保護者が多角的に見るということを感じられることが大切である。
・支援者で状況をつけていき、気になるところを保護者に聞いていくとインタビュー時間が短時間で終わる。

＜第３回企画・推進委員会　検討概要＞

１　ＩＣＦ情報把握・共有システム活用の結果報告

(1) にじの学園、のんのんでのＩＣＦ情報把握・共有システム活用方法

（事務局より、親子支援事業では、前回の企画推進委員会の意見をもとに、情報の取り方で担当者の分担方法（にじの学園では１人で情報収集、親子支援事業では数人で分担し情報収集）と保護者への聞き取り方法（にじの学園では保護者に質問紙を渡し記入、親子支援事業では質問紙を見せるのではなく、事前に支援員が保護者に聞き取る内容を噛み砕き、まとめて確認）を変更して実施したことを報告した。

・保護者には、支援者が文章を噛み砕き会話の中で聞き取ってもらえたのは答えやすい。

・担当者 1 人で情報をとるのではなく、数名で分担するのは負担感もなくいろいろな視点でみれるのでよい。

(2) 支援会議の実施について

・支援会議に参加し、情報共有パッケージの情報があると子どもを知らなくても全体像を捉えやすかった。

・会議の参加者が資料の使い方について統一した知識を持っているとやりやすい。

・いろんな職種の方が参加し、１時間半から２時間で４項目から５項目の内容を検討おり、とても効率よく進めている。また、すごく網羅的に検討されている。

・検討する項目を選択するのが難しい。なぜその項目を選んだのか明確になると良い。

・支援方法は具体的でとてもよい。

・どの項目を選択するかについて、選ぶ理由はたくさんある。少し介入すれば効果がでそうなもの、生活の質が大きく改善するもの、結果が評価しやすいもの、家でやりやすいというものもある。選んだ理由はたくさんあると思うので、初めは若手の職員の教育も含めてなぜ、その項目を選んだのか、(例えば、効果の出やすさＡ、取り組みやすさＢ、評価のしやすさＣなど)その理由を入れてくれると伝わりやすい。

・本人がどこまでできそうかは、他の項目全体の項目をざっと見ていくことになる。その辺りは、多少、力が必要なためガイドラインなどがあればいいと思う。

・どの項目が選ばれなかったかも大切。気になる事を全部やっていると疲労してし

まう。誰か権威のある人が会議などで、ここは後回しでよいと補償してくれることは、支援者や家族にとっては大事。選ぶ理由と選ばれなかった理由を両方意識できると、焦りが減りバランスよくなる。

・支援する前段階で、どの支援項目を選択するか議論が必要である。

・支援項目をどう設定していくのかに関して、「具体的な手がかり」にあがってきたその子の強み、出来ている事の中から、支援項目が設定されていくことも出来る。

・通常の福祉サービス利用者に実施している支援会議と違い、今回の会議では他機関が参加しても具体的な話が出てきている。普段自分達が実施している会議では、支援方針を統一したいと思っているが、なかなか具体性がなく支援方法が抽象的な話しになっている。

・福祉事業所もいろいろなカラーがあり、細かいアセスメントがでていないこともあるので、今後、こういったことがやれるとすると碧南市全体の支援の質が上がる。

・具体的な項目まで絞り込んで、どうやっているかというところまで絞り込むことで、ばらつきをはっきりさせ、どの方法がベストかわかる。具体的な中身で議論する事が支援会議においては重要であると確認できた。

(3) 第２回目支援会議のための資料作成、第２回目支援会議について

（事務局より、会議資料に基づき第２回目支援会議の資料の構成と第２回目支援会議の流れ、主な意見、会議後に見えてきたことについて報告をした。）

・初めて見た人にもわかりやすいといわれていたが、そういった点でもとても良いものだと思う。

・保育園に入園する子に対して、簡単な情報だけでは手立てが何もわからず保育士も困る。その前にこれだけ具体的なことを教えてもらえると、とても助かる。

・お子さん自身も ICF を通してすごく成長したところが見えてきているが、保護者の方も考え方や成長していると感じた。これを通して、今後、子どもを将来みていく上で、どういうふうに考えていけばよいのかがわかってきたのだと思う。

２　ＩＣＦ情報把握・共有システム活用の効果について

(1) 実施者への質問紙調査の結果から

・これまで多職種連携がうまくいかなかったのは専門用語が多いのが原因ともい

われているが、ICF は日常生活用語で書かれているので、同じ視点で支援が考えられる。

(2) 支援計画の質と量から

・ICF の活用していない子の計画は名前を見ないと誰の計画かわからないが、ICF を活用した子の支援計画は、名前を見なくても誰の計画かすぐにわかるといわれた。個別性がでた支援計画ができた。

・支援計画の質の考察には、よい支援計画とは何かを考えないといけない。分量が多ければいいかというとそうでもない。支援計画を見ただけで、どの子かわかるというのはすごく大切。

・ICF 活用前の支援計画を見て自分が実際にやろうと思うと、どうやって関わっていいかわかりにくい。ICF 活用後のものを見ると、実施方法がわかりやすく引き継ぎ後もすぐに取り込みやすい。

(3) 保護者の気持ちの変化

（事務局より、会議資料に基づきについて保護者の気持ちの変化を報告した。子育てに不安を感じていた保護者も、ICF の活用で子どものできるところが見え、親子支援事業から療育に通いたいという思いにまでなったこと。）

・保護者の変化で大変ということが全くなく、保護者にとっては本当にやってよかったのだと思う。

・ICF を活用することで、今までぼんやりと感じていた子どもの全体像が支援者も保護者もしっかりと認識ができた。支援計画を保護者と一緒に立てるが、支援会議でねらいがどこにあるかをはっきり伝えられることで、保護者も納得して取り組める。

(4) 実践現場での活用で出てくるであろう課題について

・将来的に例えば、福祉サービスを使っている人に対して使うことになった場合、課題になるのはこのシステムがプラットホームという認識をどこまで広めていけるのかが課題。そのための研修が必要。

・質問紙内容の量、支援修正の項目の絞込みの選び方をどうするかも課題となる。どこまで計画的な研修が行えるかが今後の展開に関わってくる。

・ICF の把握システムの活用が進んでいかない限り、顔がつながっただけで連携は進まない。是非、碧南市で進めていただきたいと思う。

＜第４回企画・推進委員会　検討概要＞

１　事業効果について

(1) にじの学園第２回支援会議の結果

（事務局より会議資料に基づき、にじの学園第２回支援会議の結果を説明した。第１回目の会議で家庭も含めた関係機関で支援方法を統一したことにより、第１回目の会議後、早い段階で課題の解決が図られた。）

・関係機関が支援を統一することで課題の達成ができた。１つの場所だけでは、気づくことができない、有意義な会議であったと思う。

・保護者が参加しているのが大変良いと思った。一緒に参加する事で、できたことが保護者とも共有できていた。

・できることが増えていくことがすばらしい。この枠組みがあったからこそできるようになったということであれば、大変有効なシステムであると思う。

・このシステムのいいところは、できるところに目をむけてそこから支援を考えられるという点である。

・１つ１つの会議を積んでいかないといけないという点が大変であるが、そこを少し簡易にできるようになると、実際の現場で活かしていけると思う。しかし毎回、保護者の方に参加していただくのも現実的には難しい。

・保護者も今後、また困った事にぶつかった時に、これからはどうやったらできるようになるのかと考えられるようになると思う。

・第２回目の支援会議では、具体的にうまくいく条件、うまくいかない条件が絞り込まれてきて、第２回目の支援会議の意義を実感した。

(2) 支援項目の絞込みについて

（事務局より会議資料に基づき、支援項目の絞込みについて説明した。第３回企画推進委員会で絞込みの方法について議論がされたが、情報把握パッケージを活用する前の支援項目の選択方法と、情報把握パッケージを利用したことでの支援項目が絞込みやすくなったことを説明した。例えば、支援項目に「真似をして学ぶ」というものをあげようとしたが、情報をよく見ると「目的を持って見る」ことができておらず、そこから始めないといけないという結論になった。他にも、スプーン、フォークが使えないという子も、情報を見ると手や腕をうまく使えないことがわか

りまずは、そこからという結論になった。情報把握パッケージを活用することで、そういった点を支援者と保護者で情報を見て確認することができた。)

・前回の会議では、支援項目の絞込み方法に対して不安を抱いていたが、今回の説明ですっきりと腑に落ちた。

・経験の浅い支援者が子どもの姿を見て、どこをねらってやっていくと子どもが伸びるのかを考えていく際に、のんのんは５ヶ月間しかないので、このツールの活用で的確にここを伸ばしていくといいとうのがわかるのがよいと思った。

・日常的に目に付くこと（例：靴が１人ではけない。スプーンがつかえない）は捉えやすい行動が、それがどのように成り立っているのかが、このツールでは項目が網羅的であるために気づくことができている。例えば、スプーンで食べるという行動には、手の使い方や目の使い方も必要になってくる。これまでは、専門家が説明し、みんなが共通して理解していた。それが、支援チーム１人１人の気づきの中で分析的に捉えることができるのは、支援者のスキルアップに繋がる。保護者とも、こういう成り立ちだから、まずここが大切だと共通認識できる。

・分析的に見ていくという専門的視点を専門家と支援者と保護者の間で共有することができる。

・このツールを使うことで絞込みが煩雑になるかというとそうではなく、逆に絞り込みやすく、選択理由をそれぞれが念頭におくことで優先順位もつけやすい。

・このツールを使うことで、課題を絞り込んだという説明責任が果たせる。それがすごくよい。

(3) 支援計画検討会儀の質・チーム協働の質問紙の回答結果について

・今回の支援会議は、とてもよい調和性を持ってできた。ICF を活用する前よりも支援会議の質が向上し、支援計画の内容もよくなったというのが、参加された方の意見であった

(4) 支援者のスキルアップについて

（事務局より会議資料に基づき、支援者のスキルアップ（支援者の変化）について説明した。）

・子どもが成長していくのが土台にあるが、支援者や保護者が成長する姿も感じられる。

・ICF 対象児以外にも、その視点や支援方法を広げており、全体的なスキルアップ

になっていると思う。

2　引継ぎについて

（事務局より、今回の ICF で集まった情報や支援方法の一覧について説明をし、引き継がれる側としてはどの情報があるとよいか意見を伺った。）

・支援会議を実施し、対象児はこんな手がかりを持って、結果がこうなったというのが表れているので、それを見せてもらえると次に支援していく時にありがたいが、一目で見たときに、この表の読み取り方がわかりにくい。

・情報を全部もらっても情報が多くてわかりにくいため、項目を絞り込んだほうがよい。

・具体的な支援方法がもらえると助かる。支援方法とともに、うまくいかない条件もわかると、苦手な事が事前にわかり参考にしやすい。

・「うまくいく条件」「うまくいかない条件」があるとよい。

・普段、園ではできないことに目を向けてしまうので、いいところや得意なところを活かした話し合いの結果が書かれていると、それが入園後の保育に役立つ。

・情報量はたくさんあったほうがよいが、それを活かせる力が受け取り手に必要。受け取り手のために、ICF についての研修も必要になってくる。実践の場で使えるかどうかとい視点は大切である。

・最初にどういう姿だったのかは知りたい。その後、どのくらいの期間で支援をして、どのような変化があったのかがわかるとよい。

3　他地域への普及方法について

・論文として全国発信することもよいと思う。

・ホームページに掲載する時には、なるべくわかりやすく記載できると良いと思う。

・シンポジウムや講演会を開催するのもよいのではないか。あいち発達障害者支援センターの共催をお願いしてもよいのではないか。

＜第５回企画・推進委員会　検討内容＞

1　支援に対するICFシステムの効果

(1) 引継ぎ書類の形式について

（事務局より形式案を提示）

・1項目に対し、現状から支援方法、うまくいく条件、うかない条件が見やすくてよい。

・支援がうまくいったところが一目でわかるように、字体などを変えるとさらによい。

・支援内容のタイトルのところにICFのコードを入れるとよい。

(2) 個別支援計画の質のアンケート結果

（企画・推進委員に個別支援計画のICF活用前後の質の変化のアンケートをとった結果を報告）

・ICF活用後は具体的で、誰が見てもわかりやすいものとなっていた。

・アドバイスがなくてもこのツールを活用する事で、支援者の質が上がるのだと思った。

(3) 支援者、保護者の振り返りアンケート結果

・支援会議で保護者がエネルギーを得られたというのは良い会議であったと思う。

・保護者が子どもをほめることが増えたり、子育てに前向きになれたなど、とても良い結果だと思う。これらは、支援会議で具体的な話を支援者としたことで、とても心強くなれたし、とても大きな満足感を得られたのではないか。

・保護者は子どものことを客観的に見えていなかったが、ICFの活用で子どもの事がよくわかったのではないか。

2　全体経過の振り返り

（年間計画と実際の実施結果について事務局より報告をした。ほぼ計画どおりにでき、のんのんでは計画より早く実施ができ、支援期間も長く取れた。にじの学園では第1回目から第2回目までの期間が3ヶ月程と短く、もう少し長い期間があるとよかったと報告した。のんのんでは、支援会議を毎週実施したため支援会議資料作成に苦慮した。のんのんでは、教室の期間の問題で第2回目の支援会議はできなかったが、支援会議の内容を母と時々確認したりすることができたのがよかった。）

・最初はどのように使えるのかと思ったが、結果が出たのをみるとやってよかったと思った。
・今回はモデル事業で初めてのことであったので手探りであったと思うが、今後やる場合は余裕をもったスケジュール、もう少し長いスパンでやっていけると良いと思う。
・支援会議までの間隔は、子どもの状態像によって見通しをもって考えれば良い。
・今後の活用となると、相談支援の計画などとの兼ね合いも考えていけると良い。

3　今後の展望について

事務局から、のんのん、にじの学園の来年度の ICF 活用方法の説明
（のんのん：今回実施の 4 名のうち、アセスメントを実施していく中で 2 名の方が親子通園施設に行くことになり、今では元気に通園している。今後は ICF の要素を取り入れてアセスメントをとっていけるとよいと思う。
にじの学園：経験の浅い先生にも勉強になるため、園内研修としてクラスに 1 ケースずつ抽出して ICF ツールの活用していきたい。）
・今後、情報の項目をどう絞り込むのかが課題である。

事務局から、平成 31 年度のモデル事業案について説明
（ICF をもちいた地域支援体制づくりとし、ICF 活用についての支援者の研修と相談支援専門員を軸に福祉サービス利用児数名に ICF ツールの活用をする。）
・保護者の立場でいうと、是非学齢期の子ども対象にやってもらえるとありがたい。問題行動などがあった時に、要因が環境などにもあるという見方を支援者の方たちにも知ってもらえると、今後の対応が違ってくると思う。
・せっかくここまで取り組んだので、来年度、場を広げ、ライフステージを広げていくのは良い方向であると思う。
・ICF をベースに支援した人から、ICF を導入した効果などを伝え多くの人が実感していくと、ICF へのハードルが少しずつ下がっていくのではないか。
・実際に ICF をやっていく中で覚えていき、よさに気づいていった。ICF を初めて活用する人は、少し難しいと思ってもやっていくことでよさに気づくと思う。
・全員をやらなくても、このツールを活用することで支援者の見方が変わっていく。

・日々、観察していることを情報に落としていくものであることを伝えていくと良い。

4　企画・推進委員会の1年間を振り返った感想

・ICFの活用で保護者や支援者が変わってきたという実感した。

・ICFとは、専門的なものではなく、子どもを見る際の客観的に分かりやすくするものである。障害をみるものではなく、生活場面をみるものだということをしっかり伝えていけると良い。

・これまで、職種や職場が違うと見方がバラバラだと感じていたが、ICFを活用すると同じような見方ができるのだと実感した。

・具体的な事例を聞く中で徐々にICFがわかってきた。保護者にとっては、先の将来が見えてきて、とても頼りになるものだと感じた。

・引継ぎ書類などを実際に見たときに保育園現場で役立つと実感した。

・ICFは支援者の質が向上すると感じた。園の先生で自分のクラスの子の対応に苦慮している人で、ICFを活用してみたい人がいるかもしれないと思った。

・最初に「ICF」という知らないアルファベットが来ると、それだけで難しそうと思うため、「子どものいいとこ探し（ICF)」などとするとよいのではないか。「これをやると支援のヒントが見つかりますよ」などというキャッチフレーズでいくとよいのではないか。

・ICFは説明だけではわかりにくかったが、支援計画を見たらわかってきた。虐待などの会議で多職種が集まる際、情報を一致させるだけで多くの時間を要するので、そういった場面でうまく使えないか。普段、チームで仕事をしている人にはこのようなものがあるとよい。

・「障害とは人の中にあるのではなく、環境との間にある」という言葉は、保護者にとっては、本当にいい言葉である。ICFについては「子どもを客観的に見ることができ、いいところをたくさんみつけられるようになるもの」などという風にポジティブに伝えていくとわかりやすいのではないか。

・ICDとICFはお互いに補完する関係であるといわれている。医学的な見方が前面にでると、「子どものできないところ」「どうしたら治るのか」という話になりがちである。子どもの困り事に気づき始めた保護者はどうしてもそちらにひっぱられる。

保護者には早い時期にICF的な考え方(「課題は生活の中にある」「環境への働きかけ」「環境を整えるとできることが増える」)を実感してもらうことができるとよい。ICFの考え方を持っている支援者が身近にいるとよい。

・今はまだICFが特別なと思われている。研修などでたくさん耳にし、当たり前のことになっていくと実施しやすいのではないか。

・この会議はいろいろ人が出て意見を言い合え、とても良い会議であったと思う。

(3) 企画・推進委員会及び事務局名簿

表６－２　企画・推進委員会委員名簿及び事務局名簿

発達障害児者地域生活支援モデル事業　企画･推進委員会

No.	役職	職業(役職)	委員氏名
1	委員長	北海道大学　大学院　教育学研究院　教授	安達　潤
2	委員	愛知県医療療育総合センター中央病院　児童精神科　医長	吉川　徹
3	〃	親子の会　カラフル代表	鈴木　由記
4	〃	碧南市学校教育課　教育相談室　臨床心理相談員	二宮　直樹
5	〃	碧南市学校教育課　指導主事	鎌谷　祥行
6	〃	碧南市保健センター　課長補佐兼母子保健係長	中根　みはる
7	〃	碧南市こども課　指導主事	鈴木　悦子
8	〃	碧南市こども課　指導保育士	神谷　しづえ
9	〃	碧南市社会福祉協議会　主任児童専門員	杉浦　淳子
10	〃	碧南市子どもプラザ　こころるっくしんかわ　指導員	杉浦　真由美
11	〃	碧南市社会福祉協議会　相談支援専門員	古川　裕隆

オブザーバー：合同会社　祐愛　りはくる代表　小幡　一美

＜事務局＞

福祉こども部長	岡崎　康浩
福祉課長	金原　厚夫
福祉課　発達支援係長 (発達障害児者地域生活支援モデル事業マネージャー)	鈴木　信恵
福祉課　発達支援係　主任保育士	鈴木　佳代子
福祉課　発達支援係　保育士（ＩＣＦ支援チームリーダー）	山口　京子
福祉課　発達支援係　看護師	長田　ゆかり
福祉課　発達支援係　保育士	早川　文子
福祉課　発達支援係　保育士	鶴田　香奈子
にじの学園長	斉藤　範子
にじの学園　保育士（ＩＣＦ支援チームリーダー）	宮本　碧
にじの学園　保育士（ＩＣＦ支援チームリーダー）	杉山　日出子
にじの学園　保育士	榊原　裕美
にじの学園　保育士	石橋　千晴
にじの学園　保育士	岩瀬　菊江
にじの学園　保育士	村上　由美子

2　成果の公表実績・計画

(1) 成果の公表実績

碧南市自立支援協議会こども部会（平成 31 年 2 月 21 日）にて実施内容と成果報告

(2) 成果の公表計画

碧南市役所のホームページにて実施内容や成果等の報告

日本自閉症スペクトラム学会　第 18 回研究大会　自主シンポジウムにて報告